銀魂 銀時VSサーヴァント！聖杯大争奪戦！！

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀魂　銀時ＶＳサーヴァント！聖杯大争奪戦！！

【Ｎコード】
Ｎ３４４９Ｇ

【作者名】
赤夜叉

【あらすじ】
「銀魂」の主人公・坂田銀時が「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ」の世界に、サーヴァントとして召喚されます。聖杯狩りじゃあああ！！

第一訓：天然パーマは英霊になる（前書き）

初めての作品です。素人ですが、精一杯、頑張って書きました。楽しんで頂けたら幸いです。

第一訓：天然パーマは英霊になる

真っ暗。
（アレ？何だコレ？空が真っ黒だ）
真っ暗な闇の中に銀髪で天然パーマの男が倒れてる。
（アレ？真っ黒なのは俺じゃないか）
銀髪の男は片目を開けてる。
（アレ？何で俺こんなとこにいるんだ？アレ？）

「目覚めよ」
闇に男の声が響く。
「英霊となる時がついに来たのだ」
闇に一筋の光が。
「そっと開くのだ。その眼を。その閉じられた限界への扉…」
銀髪の男が目を覚ます。
「目覚めよ」銀髪の男が体を起こす。
「アレ？どこだここ？」
辺りを見回す。何も無い真っ暗闇。
「新八ー。神楽ー」
名前を呼ぶが返事はない。
「どうなってんだこれ？二日酔いのせいか、頭も痛ぇし」
頭を抱えながら呟く。
「二度寝するか。新八、飯つくっとけよ」
と言いながら銀髪の男は横になる。すると、また闇に光が現れる。
「目覚めよ」
再び男の声が闇に響く。
「英霊になる時が来たのだ。目覚めの時は今だ」

「うるせーよ。誰だ、妙な目覚ましかけたの」
「いや…目覚ましじゃなくて…。すいません起きてください」
黙って寝てる銀髪の男。
「すいませーん！目覚めてください！きいてますか？あああああ！！」
男の声が荒れる。
「目覚めろっつってんだろぉおお！！いい加減にしろぉおお！！」
突然、白髪に白い髭を生やした男が現れる。
「なんで異空間で二度寝！？少しは空気を読め！！なんかいつもと感じ違うだろ！！」
「んだよ。うるせーな」
男の怒鳴り声でやっと銀髪の男が起きる。
「ようやく目覚めたか」
男が満足そうな顔をする。
「ようこそ『英霊の座』へ」
「は？英霊の座？つーか誰ですかアンタ」
「我に名など無い。我はなんじを英霊とする者だ」
「…仙人？」
「フッ。まぁ好きに呼ぶがいい」
男・仙人は不適に笑う。
「坂田銀時」
「！！」
教えてもいないのに自分の名前を呼ばれ、少し驚く。
「銀時…私はずっとお前を見てきた。お前は強い。様々な英雄を見てきたが、なんの神秘も持たず世界を救った偉業を成し遂げたのはお前が初めてだ」
仙人が銀髪の男・坂田銀時を評価する。
「だがしかし！」
仙人が目を見開く。
「まだだ！！英霊となればお前はまだ強くなれる！！」

仙人が大声を上げる。
「…強くなりたいか、銀時」
「いや、いいです」
やる気のない声で即答する。
「え？……今なんて…」仙人が戸惑う。
「すいません。頭痛いんで勘弁してください」
頭を抱えながら横になる。
「いや……え？あの……これ結構スゴイ事なんだよ？」
戸惑いながらも仙人は話す。
「英霊になるって事は自分の功績が世界に認められたって事なんだぞ。なりたくても、なかなかなれないんだぞ」
「うるせーよ。頭痛ぇつってんだろ？殺すぞ」
そう言ってまた眠りにつく。
「いや寝るなよー！！」仙人が怒鳴る。
「なんで仙人の前で三度寝！！？三度寝はなかなかしないぞ！！」
これだけ怒鳴っても銀時は起きない。
「なんて向上心の無い英雄だ…」
仙人が呆れる。
しばし、どうすべきか考える。
「！」
仙人が何かを思いつく。
「あ～あ。勿体ないな～。もし英霊になれば、あらゆる願いを叶える万能の杯『聖杯』がもれなく手に入るのにな～」
その話を聞き、銀時が目を開ける。
「願いを叶える！？マジ？それマジなのか！？」
勢いよく起き上がる。
「ああ。マジだ」
してやったり、と仙人が笑みを浮かべる。
「おいおい。何だよその龍の玉みたいなアイテム！？」
「さぁどうする銀時？英霊になるか、ならないか？」

仙人が銀時に問い掛ける。
「…マジで聖杯が手に入るのか？」
「ああ」
暗闇に沈黙が訪れる。
「今一度、問おう」
仙人が沈黙を破る。
「英霊となるか？坂田銀時」
再び銀時に問う。
銀時は仙人の顔を見る。「しょうがねぇな」
頭を掻く。
「聖杯のために、なってやるよ英霊に」
銀時が英霊になると答える。
仙人が満足そうに笑う。
「おめでとう。坂田銀時。これで君は英霊となった」
その時、銀時の後ろが光る。
「！」
銀時が後ろを振り向く。
「さぁ行くがいい！その光の先にお前の求めるモノがある！！」
光を指差しながら仙人が言う。
銀時が光に向かって一歩、歩む。そして光へと歩いていく。暗闇から光へと世界が変わる。

＊

暗い地下室。明かりはランプの光りのみ。その地下室に、ある儀式をしてる者がいた。髪をサイドに束ね、赤い服にミニスカート。女性である。床に魔法陣を描き、何やら呪文を唱えている。魔法陣が光る。儀式が進むにつれ魔法陣の光が強くなる。そして今まで呪文を唱えてる間、閉じていた目を開く。
「抑止の輪より来たれ。天秤の守り手よ」

そう唱え、魔法陣の輝きが最大になる。
（よおおっし！手応え最高！！これはもうこれ以上ないって言うカードを引き当てた…ッ！！）
女が確かな手応えに喜ぶ。魔法陣の光が消え、地下室が静まり返る。
いくら待っても何も起こらない。
「…ちょっと」
女が口を開く。
「なんで何も起こらないのよ！？」
予想外の事態に戸惑う。
「まさか、失敗……？」
最悪な答を口にする。
「そんな！儀式は完璧だったはず！！」
女が大声を上げた直後。ドオン、と上から大きな音がする。
「！！」
女が音がした上を向く。
「何！？居間の方から…！！」
急いで上に向かう。
「ちょっとちょっと…！！」
階段を上がる。
「ええいもう！いったいぜんたい」
ドアノブを回そうとするが回らない。
「何だってのよー！！」
怒鳴りながらドアを蹴破る。
「…いでで。一体どうなってんだ。くそっ」
居間から男の声がする。
「またべつの場所か。今度はどこだ？」
壊れた家具の上に銀髪の男が座っていた。
その光景を見て、この家の当主・遠坂凛は。
「…は！？」
と呟いた。

第一訓：天然パーマは英霊になる（後書き）

どうしても大好きな「銀魂」と「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ」のクロスオーバーを読みたかったので、自分で書いてしまいました。大変でしたが、楽しく書けました。

第二訓：銀の侍と赤い魔術師（前書き）

グダグダにならないように頑張ります！ぜひ感想など、お寄せください！

第二訓：銀の侍と赤い魔術師

（やっぱりサーヴァントにするならセイバーが一番よね）
魔術師・遠坂凛が己の考えを確認する。
（その魅力はなんといっても近接戦での攻撃力の高さ！そして私は遠距離から魔術で援護するってワケ！これって最強の組み合わせでしょ？）

「…で？」
凛が半眼で聞く。
「アンタが私のサーヴァントってことで間違いない？」
壊れた家具に座る銀髪の男・坂田銀時に聞く。
「は？さぁバンド？バンドすんのお前？」
「しないわよ！！ていうかバンドじゃなくてサーヴァント！！」
「つーかお前、誰？」
「人の話、聞きなさいよ！！」
凛が怒鳴る。
「そう怒るなよ。カルシウム取れ。カルシウム取ればすべてうまくいく」
「うるさい！！ちょっと黙っててて！！」
そう言って凛は銀時を観察する。
白い着物を着て、銀髪で天然パーマ。腰には『洞爺湖』と書いてある木刀をぶら下げている。そして男は、死んだ魚のような目をしていた。
（木刀を持ってるってことは…まさかセイバー！？でもこんな無気力そうな男がセイバーなんて……）
思い切って聞いてみることにした。

「ねぇ。アンタ、セイバー？」
「セイバー？なんだそれ？」
「自分のクラスがわからないの！？」
「何だよクラスって？3年A組ですか？」
気だるげに銀時が答える。
「……」
銀時の返答に言葉を失う。
（そういえばコイツ…サーヴァントの事も知らなかった……もしかして）
凛がある答を出す。
「アンタ『聖杯戦争』の事、知らないの？」
「聖杯戦争？何それ？」
予想通りの返事がきた。
「はぁ」
凛がため息を付く。
「まさかサーヴァントに説明することになるとは思わなかったわ」
「ん？」
銀時は首を傾げる。
「アンタは私に喚ばれて、サーヴァントっていう使い魔となり『聖杯戦争』という聖杯の所有権を巡る魔術師の戦いに参加したのよ」
「は？」
知らない単語ばかり出てきて、銀時は理解できていない。
「まずサーヴァントっていうのは実在した英雄たちの魂なのよ」
「え…？」
「神話や伝説…数え上げればキリがないわね」
凛は説明を続ける。
「生前の偉業により英雄と認められた者は死後『英霊の座』ってところへ迎えられるの」
生前と死後という言葉を聞いて、銀時の顔色が悪くなる。
「聖杯は彼らに7つのクラス当てはめることで、この世に召喚する

ことを可能としたの」
銀時は冷汗を流す。
「その7つのクラスは、セイバー、ライダー、ランサー、バーサーカー、アーチャー、キャスター、アサシン。この7つよ」
凛がクラスを挙げる。
「聖杯は召喚された英霊達にふさわしいクラスを割り当ててマスターに与えるの」
凛の説明は続く。
「そしてマスター同士を戦わせ、最後に生き残った者が聖杯を手にするの。これが聖杯戦争のあらましよ。わかった？」
凛が説明を終え、銀時に聞く。
「！」
だが銀時は何も答えず、顔を青くして震えている。
「どうしたのよ？顔を青くして震えて」
凛が聞く。
「……それって…」
銀時が口を開く。
「オレ…死んでるってこと？」
「そうよ」
「ゆゆ…幽霊ってことか？」
「ちょっと違うけど…まぁそう考えていいわ」
「気絶しろぉお！！俺、気絶しろぉおお！！」
急に銀時は壁に頭を打ちつける。
「ちょっとぉおお！！アンタ何やってんのよ！！？」
「クソッ！何で気絶しねーんだ！俺のバカ！！死ねぇええ俺ぇ！！！」
叫びながら壁に頭を打ち続ける。
「落ち着きなさいよアンタ！！一体どうしたのよ！？」
「俺が死んでるなんて嘘だぁ！！しかも俺が幽霊なんて…んなワケない！！許さん！絶対許さんぞ！！」

「アンタ自分が死んでることに気付いてなかったの！？」
「はっ！！」凛の言葉を聞いて何かを思い出す。

＊

空が真っ赤。
（アレ？なんだコレ？空が真っ赤だ）
頭から血を流して銀時が倒れてる。
（アレ？真っ赤なのは俺じゃね？）
銀時のそばには壊れた原チャリが倒れてる。
（アレ？何で俺こんなことになったんだ？アレ？ちょっと待て…俺…）

＊

自分が交通事故に遭った事を思い出す。
「…じゃあアンタ…交通事故に遭って？」
凛が聞くが、銀時からの返事はない。
「交通事故で死ぬ英雄って…」
凛は頭を抱える。
銀時は力無くその場に座り込む。
「なんてこった…ジャンプ買った帰りに死んじまうなんて…」
顔を手で覆う。
しばらく嫌な沈黙が場を支配した。どれくらい時間が経ったか、銀時がようやく立ち上がる。
「まぁ…死んじまった事をいつまでも気にしててもしょうがないわな」
どうやら自分が死んでしまったショックから立ち直ったようである。
「なぁ」
「何？」

「俺が戦わなきゃ…お前は他のマスターってのに殺されるのか？」
「殺される気はないけど、サーヴァント無しじゃ正直、勝てないわね」
凛が肩をすくめて答える。
「わかったよ」
「え？」
「正直、殺し合いなんざ乗り気しねぇがよ。お前を死なせるわけにもいかねぇしな」
「じゃあ」
「やってやるよ。サーヴァントってやつ」
（…やれやれ）
凛が思わず苦笑する。
「私は遠坂凛。これからよろしく」
「俺は銀時。坂田銀時だ」
こうして銀時の聖杯戦争が始まる。

第二訓：銀の侍と赤い魔術師（後書き）

銀時と凛。なかなか良いコンビだと思います。

第三訓：人の話は聞くだけでなくちゃんと内容を理解しよう（前書き）

第三訓お楽しみあれ！

第三訓：人の話は聞くだけでなくちゃんと内容を理解しよう

（坂田銀時…名前からして日本の英雄って感じだけど……そんな名前の英雄いたかしら？）
凛が考えているど。
「なぁ凛」
銀時が話し掛ける。
「何？」
「魔術師って何だ？」
と銀時が当然の質問をした。
「そういえばアンタ、何にも知らないんだっけ。いいわ教えてあげる」

「まず魔術っていうのは人為的に神秘・奇蹟を再現する行為の総称よ。基本的には”術者の体内、もしくは外界に満ちた魔力を変換”するの」
右手の人差し指を立てて凛が説明する。
「世界に固定化された魔術基盤に術者が命令を送り、予め設定された機能が実行されるの。その命令を送るのに必要な電力が魔力なの」
「…ああ…なるほど…」
わかったフリをする銀時。
「でも誰にでもできるわけじゃないわ。魔術を使うには魔術回路という擬似神経が必要なのよ」
魔術回路の説明が始まる。
「魔術回路は生命力を魔力に変換する為の路であり、基盤となる大魔術式に繋がる路でもあるのよ」
この時、銀時の頭はパンク寸前である。

「つまり、この魔術回路を持ち、魔術を行使する者を魔術師と呼ぶの」
凛が説明を終える。
凛の説明に銀時はポカンとなってしまう。
「…私の言ったことわかる？」
凛が聞く。
「や…あの、凛…要するに魔術師ってのは…」
銀時が結論を出す。
「スゲー奴って事？」
直後、凛がずっこける。
「アンタねぇ！！そんなまとめ方あるかぁああ！！」
凛がキレる。
「お…落ち着け！凛！！とりあえずカルシウムを…」
キレる凛を落ち着かせようとするが。
「いるかぁああ！！！」
凛の暴走は止まらない。

＊

翌朝。ベッドに寝ていた凛が目を覚ます。体を起こす。
「ふぁ～」
あくびをする。ベッドから降り、部屋を出る。一階に下りて居間に入る。居間は綺麗に片付けられていた。昨夜、凛が暴れてさらにメチャクチャになった居間を銀時が一晩かけて片付けたのだ。ソファーには銀時が寝っころがって熟睡している。
（…ちゃんと片付けてくれたんだ）
そう思いながら凛は紅茶を用意する。
すると銀時が目を覚ます。
「おはよう。銀時」
凛があいさつする。

「ん…？おお」
銀時も頭を掻きながら返事をする。
「夢オチ…て展開にはならねぇか」
「何か言った？」
「いや」
ソファーから立ち上がる。
「紅茶入れたんだけど。飲む？」
「おっ。いいのか？」
「ええ」
「じゃ遠慮なく」
銀時が紅茶を飲む。
「なかなかうめぇな」
「ありがとう」
凛も紅茶を飲む。
「そうそう。銀時、今日は学校に行くわよ」
「学校？」
銀時が片眉を上げる。
「ええ。一応、学校では優等生だから休むわけにはいかないし」
「優等生！？お前が！？」
銀時が驚く。
「何よ？文句ある？」
「…あるが言わないでおこう」
「よろしい。じゃあ銀時は霊体化してついてきて」
「霊体化？」
「え？」
嫌な予感がする。凛はそう思った。
「まさかアンタ…霊体化もできないの？」
「どうやるんだ？」
凛は力無くテーブルに突っ伏した。

＊

朝の通学路。学生が歩く中、凛も歩いてる。結局、霊体化が出来ない銀時は学校周辺に待機してるということになった。

（まさか霊体化も出来ないなんて…）

凛が落ち込みながら学校へ向かう。

学校の校門を通ると。

「！！」

凛が違和感に気付く。

（これは…結界！？）

学校に結界が張ってある。

（しかもとびっきりたちの悪いやつが）

そのまま校舎へと入る。

（銀時）

パスという繋がりを通じて銀時に話し掛ける。

（こちら万事屋。どうぞ）

銀時から返事がくる。

（放課後、学校の屋上に来て。結界が張ってあるわ）

（…了解）

＊

銀時は学校の近くをうろついていた。

「結界ね…。早速、聖杯戦争っての始まりか」

銀時の周りがザワつく。

「……」

銀時は周りから奇異の視線を向けられていた。

銀髪に白い着物。銀時の派手な容姿は周りの注目を集めるには十分だった。

（ヤベーな。この世界でこの恰好は目立ち過ぎるぜ）

銀時がコンビニに入る。
（この世界には天人（あまんと）がいないのか？）
雑誌コーナーに向かう。
「！！」
銀時はある物を見つける。
銀時が見つけた物とは。
「ジャンプゥウウ！！！」
銀時が愛読しているジャンプだった。

第三訓：人の話は聞くだけでなくちゃんと内容を理解しよう（後書き）

感想お待ちしてます。

第四訓：誰もいなくなった放課後の学校ってちょっと不気味だよね（前書き）

ついに銀さんがサーヴァントと対決します！

第四訓：誰もいなくなった放課後の学校ってちょっと不気味だよね

放課後。学校の屋上に凛と銀時がいる。凛が結界の痕跡を見つける。
「完全に消すのは無理ね。でも遅らせることはできるわ」
凛が作業を始めようとすると。
「くそっ！金がありゃジャンプ買えたのによ！ワン〇ース！！」
「？」
何やら銀時が悔しがっている。

今度こそ結界を遅らせる作業をしようとするが。
「なんだ。消しちまうのか？もったいねぇ」
後ろから男の声がする。
「！？」
振り返ると屋上のフェンスに男が一人立っていた。
男は青い髪に体にフィットした青い服を着ていた。
「サーヴァント！！？」
驚きで声を上げる。
「あれがサーヴァントか」
銀時は冷静である。
「ここらで怪しい気配がするってんで見に来てみたら、とんだ拾いもんだ」
青い男が語る。
「ひとつ手合わせ願おうか！」
そう言って青い男の手に真紅の槍が現れる。
「槍！？ランサー！！」
「凛！！」
銀時が素早く凛を抱き抱える。

「えっ！？」
そのままフェンスの方へ走っていき、屋上から飛び降りる。地面に着地して、凛を離す。
「凛！離れてろ！！」
「逃がすかぁ！！」
青い男・ランサーは槍を突き出しながら上から迫る。
「！！」
凛が上を向く。
ギィン、と何かがぶつかる音がする。
ランサーが飛び退く。
「！？」
凛も驚いて見る。
腰から抜いた木刀を構えた銀時が立ってる。
「おいおい。女に刃物を向けるもんじゃないぜ」
不敵な笑みを浮かべる。
ランサーと対峙する。凛は見た。銀時の目を。銀時の死んだ魚のような目は、獲物を狩る獣の目になっていた。
（木刀？）
銀時の武器にランサーが疑問を持つ。
「てめぇ…まさかセイバーか？」
ランサーが問う。
「セイバー？ああ、クラスか」
頭を掻く。
「さぁな。自分でもわかんねぇんだ。てかクラスなんてどうでもよくね？」
「ふざけるな！！自分のクラスもわからねぇサーヴァントなど聞いたことが無いわ！！」
ランサーが怒鳴りながら槍を突く。
銀時がそれを木刀で捌く。
「たくっ。ここの世界の奴はカルシウム不足の奴が多いな」

一歩間合いをとりながら銀時が言う。
「ほざけ！！そんな木刀で何が出来る！？」
ランサーがさらに怒る。
「斬り合いでこの俺に敵うと思ったかぁ！！」
怒声と共に目にも止まらぬ速さで連続で槍を突く。
だが、銀時はそれらを全て木刀で防ぐ。
「何っ！？」
防がれたランサーが驚く。
銀時のマスターの凛も驚く。再び突きを連続で放つも木刀で見事に防がれる。
（馬鹿な！攻めきれないだと！！）
今、起こってる事が信じられないランサー。
（最速のサーヴァントたるこの俺が…！！）
ランサーの攻撃を防ぎ続ける銀時。
「うおおおお！！！」
叫びながら攻撃を続けるランサー。
そして銀時が動く。ランサーが突いてきた槍を体を捻ってかわし、ランサーの顔目掛けて木刀を振る。
「くっ！！」
ギリギリで木刀をかわして距離をとる。
ランサーが槍を構え直す。
この時、凛は見惚れていた。人間の常識を越えたサーヴァント同士の戦いにではなく、自身のサーヴァント・坂田銀時の強さに。普段はやる気の無い死んだ魚のような目をし、無気力感を全開している男がこれ程の強さを持っていた。その銀時の強さに凛は見惚れていた。
「やるじゃねぇか。自分のクラスもわからねぇくせによ」
「男に褒められても嬉しかねぇよ」
「ハッ！おもしれぇ奴だ！」
ランサーは楽しそうに笑う。

「ならば我が必殺の一撃にて」
槍を持つランサーの手に更に力が入る。
「貴様を討つ！！！」
ランサーが凄まじい殺気を放つ。
「！！」
銀時も木刀を構える。
「！？」
ランサーの周りから魔力が吸収されている。
（なんて魔力なの！！）
凛が驚愕する。
（まるで周囲の熱を根こそぎ奪ってるようだわ！）
冷汗を流す。
（禍々しい殺気があの槍先に集中していく…！！！）
そこで凛はハッとなる。
（まさか…！！）
「その心臓、貰い受ける！！」
「銀時！！逃げなさい！！」
凛が叫ぶ。
「ゲイ―」
だがもう遅い。
「ボルク！！！」
真紅の魔槍が放たれる。

第四訓：誰もいなくなった放課後の学校ってちょっと不気味だよね（後書き）

戦闘シーンを書くのは大変でした。次からはもっとうまく書けるように頑張ります！

第五訓：良い子は下校時刻になったらちゃんと帰りましょう（前書き）

戦闘シーンが微妙な感じがするかもしれませんが、温かい目で見守ってください。感想お待ちしてます。

第五訓：良い子は下校時刻になったらちゃんと帰りましょう

因果の理を捻じ曲げる槍。『ゲイボルク』。それはすなわち
「心臓を穿つ」という結果を
「槍を放つ」という原因より先に生じさせてしまうこと。故に放てば敵の心臓を捉らえ、避けることは不可能。

真紅の魔槍が銀時の心臓に迫る。その時、ガッという音が夜の学校に響いた。
「な…っ！？」
ランサーが驚く。
「……」
凛は声も出ない。
「ふんごぉおおお！！！」
銀時が自身に向かってくる槍を木刀で止め、上から叩き落とそうとしていた。
「止めただとっ！！？」
「ぐ…！！」
歯を食いしばり、木刀を掴んでる腕に更に力を入れる。木刀と槍がぶつかってる所から火花が散る。
「うぉおおお！！！」
銀時が叫び、木刀で無理矢理、ランサーが放った槍を地面に叩き落とす。
「なんだとっ！？」
ランサーが叫ぶ。

「防いだと言うのか。我が必殺のゲイボルクを…！！」
銀時は肩で息をしてる。
「…嘘……」
凛も信じられないといった顔をしてる。
（俺のゲイボルクを防いだことにも驚いたが…一番驚くべきはその防いだ方法！！）
槍を構え直す。
（宝具も魔術も使わず…力技のみで因果を逆転させる槍を防ぎやがった！！）
銀時の型破りな力に驚く。
「危ねぇな。心臓に当たったらどうすんだ？」
ホコリをはたく銀時。
「クッ……ハッハッハッ！ハーハッハッハッ！！」
突然、ランサーが高らかに笑い出す。
「……」
「おい。何が可笑しい全身青タイツ」
銀時が聞く。
するとランサーは笑うのをやめる。
「…いけすかねぇマスターに、しみったれた偵察任務」
不敵に笑いながら話すランサー。
「この聖杯戦争。ハズレを引いたと諦めかけていたが、お前のような奴と戦えるなら最高だ！！」
喜びながら槍を構える。
「おいおい。勝手に一人で盛り上がるなよ」
銀時も構える。
再び二人の激戦が始まろうとしたその時。
パキッと木の枝が折れるような音がした。
「誰だ！？」
ランサーが怒鳴る。
「！！」

音がした方を見る。
一瞬、人影が見えた。
「チッ！」
ランサーが人影を追う。
「おい！」
「銀時！！ランサーを追って！早く！！」
凛が叫ぶ。
「たくっ！何だってんだ！」
ランサーの後を追う。

＊

校舎の中。廊下に一人の男が血溜まりに倒れてる。
「こいつぁ…」
「…銀時。ランサーを追って、マスターを突き止めて。ここは私が何とかするから」
「できるのか？」
銀時が驚いて聞く。
「ええ。だから貴方はランサーを追って」
「わかった…」
銀時が走り出す。
途中で足を止める。
「凛」
「何？」
「…すまねぇ」
凛に謝る。
「…貴方のせいじゃないわ。大丈夫。こいつは絶対助ける」
凛が力強く答える。
「…ああ」
そして銀時はランサーの後を追った。

銀時の後ろ姿を見届けた凛はポケットから何か取り出す。それは赤い宝石だった。

＊

銀時が学校に戻ってくる。結局、ランサーのマスターはわからなかった。廊下には凛も倒れてた男もいなかった。

「…どうなってんだ？」

考えても仕方なかったので、凛の家に帰ろうとした。

「ん？」

足元を見る。

赤い宝石が落ちてた。

「こいつぁ…凛のか…？」

と言いながら宝石を拾う。

「まぁ本人に確かめればいいか」

宝石を懐にしまう。

＊

凛の家。

「銀時。どうだった？」

「悪ぃ。途中で青タイツ見失うなっちまった」

銀時が謝る。

「そう簡単にはいかないか」

「あっそうだ。これお前のか？」

そう言って宝石を取り出す。

「あっ私の宝石」

「やっぱお前のか。ほれ、もう落とすなよ」

凛に宝石を渡す。

「…ありがとう」

宝石を受け取る。
この赤い宝石は凛の父の形見である。だが中にあった魔力はもう無いので凛にはもう必要のない物だったが、せっかく銀時が持ってきてくれたので素直に受け取った。
「で？あいつはどうなったんだ？」
「え？」
「いや、え？じゃなくて、あの廊下に倒れてた男どうなったんだ？」
「ああ。私のさっきの宝石の魔力を使って助けたわよ」
「マジでか！？そんな事もできるのか？スゲーな魔術！！」
銀時が素直に驚く。
「…あれ？でもそれってヤバくない？」
「え？」
「目撃者って消すんだろ？だったら青タイツがそれ知ったら、またあいつ狙われるぞ」
「銀時！急ぐわよ！！」
凛が慌てて走る。
「忘れてたんかいぃいいい！！！」
銀時の突っ込みが遠坂家に響いた。

第六訓：喧嘩はタイマンでやるべし（前書き）

いろいろ突っ込む所があると思いますが、よろしくお願いします。
感想お待ちしてます！

第六訓：喧嘩はタイマンでやるべし

銀時と凛は例の男の自宅に向かっていた。門の前に着く。
（何であの男の家、知ってんだ？）
銀時が疑問に思った時。
中から光が発せられる。
「何だこの光？」

「嘘…これって…」
凛が驚いてる。
「ん？」
「七人目のサーヴァント…」
「七人目？」
その時、敷地内からランサーが飛び出す。
「あっ！青タイツ！！」
だがランサーはそのまま去ってしまった。
直後、塀の上から一つの影が降ってきた。銀時がその気配に気付いて上を向く。次の瞬間、その影が銀時の左肩を斬る。
「銀時！！」
「ぐぁああ！！」
声を上げて倒れる。
「サーヴァント！？」
「凛！警察呼べ！警察！」
傷口をおさえながら叫ぶ。
「呼べるわけないでしょ！！」
「…ああ。そうだったな」
そう言いながら立ち上がる。

目の前の相手を見る。鎧を見に付けた金髪の少女が立っていた。
「女のサーヴァントもいるのかよ」
言いながら頭を掻く。
「はっ！！」
声と共に踏込み、両腕を銀時目掛けて横に振る。
銀時が後ろに跳ぶ。すると銀時が着てる着物の腹の辺りが横に少し切れる。
「！？」
「不可視の武器！？」
凛が声を出す。
少女は不可視の武器を構えたまま動かない。そして銀時が腰に下げてる木刀を見る。
「剣を取りなさい」
「！」
「敵とはいえ、武器を持っていない者を斬るのは騎士の誓いに反する」
少女が自分の騎士道を銀時に話す。
それを聞いて銀時が真剣な顔をする。そして腰に下げた木刀を抜いて構える。セイバーも不可視の武器を構える。そして銀時に向かって突進する。
「はぁあああ！！！」
不可視の武器を振り上げ、銀時目掛け神速ともいえる速さで不可視の武器を振り下ろす。
（斬った！！）
少女が前を見る。
だが少女の前には銀時の姿は無く、短く切られた数本の銀色の髪が落ちていった。
（な…！？）
驚愕してる少女。
そして少女の右側に銀時はいた。

（かわされた…斬られ…）
少女がそう思った直後。
ガキィインと金属音が夜に響いた。
不可視の武器が地面に落ちる。
銀時は木刀を振り下ろした形で、少女も同じような形で動きが止まっている。少女が銀時を見る。銀時が木刀を腰に下げる。
「はぁい。終了ぉ」
肩の傷をおさえながら宣言する。凛が目を見開いて驚いてる。
「いてて。凛。俺の傷も治してくんない」
後ろにいる凛の元に行く。
「待ちなさい！」
少女が声を上げる。
銀時の足が止まる。
「一体どういうつもりですか！？私に情けをかけたのですか！？」
少女が声を大きくして銀時に問う。
「情けだぁ？そんなもんお前にかけるくらいならご飯にでもかけるわ」
銀時が答える。
「喧嘩ってのはよ、何か護るためにやるもんだろ。お前が自分の騎士道を護ろうとしたようによ」
「…では、貴方は何を護ったのですか」
銀時の背中に問い掛ける。
「凛の命と」
言った後、銀時が振り返る。
「俺の武士道（ルール）だ」
そう言って凛の方へ歩いていく。
すると。
「セイバー！！」
家の門から男が叫んで出てくる。
「マスター！」

セイバーと呼ばれた少女が男を見る。
「こんばんは。衛宮君」
凛が男に挨拶する。
「遠坂…！？」
男は凛がいることに驚いてる。
「知り合いだったのか？」
「学校で顔合わすくらいよ」
銀時の質問に答える。
「衛宮君。立ち話もなんだし、とりあえず中で話さない？」
「あ…ああ」
そして一同は男・衛宮士郎の家に入った。
中に入り、居間でお茶を飲みながら話をする。士郎が魔術師だが聖杯戦争については何にも知らない素人と知って、凛は呆れながらも士郎に説明してあげた。

＊

「令呪っていうのは聖杯の力をバックアップしたサーヴァントに対する3度限りの絶対命令権よ」
「ああ。お前の腕に付いてたあのアザみたいなやつ。そんな凄いもんだったのか」
「…そういえばアンタも知らなかったわね」
凛がまた呆れる。
とまぁこんな感じで説明は終わり。
「じゃあ行きましょう」
凛が立ち上がる。
「行くってどこに？」
「教会よ。話は後で話すわ」

第七訓：雨も降ってないのに雨合羽を着てる奴には気をつけろ（前書き）

”銀さんが強すぎ”って突っ込みがありました（汗）サーヴァントになってパワーアップしたという事でお願いします。あれ？それでもやっぱ強すぎかな？

第七訓：雨も降ってないのに雨合羽を着てる奴には気をつけろ

銀時達は夜の街を歩いていた。目的は教会に向かうため。
「なぁ遠坂。一体何しに行くんだ？」
士郎が凛に聞く。
「この戦いの”監督役”に会いに行くのよ」
「監督役？」
「聖杯戦争を取り仕切ってる奴よ。貴方がこれからどうするにせよ。会っておいて損はないわ」

「おい。士郎」
銀時が士郎を呼ぶ。
「何ですか、銀さん？」
「何ですかじゃねぇよ。アレ、何とかならなかったのか？」
そう言いながらある人物を指差す。
「え？いや…あの鎧姿じゃ目立ち過ぎるから…」
「…マスター」
銀時が指差す人物・セイバーは鎧の上に黄色い雨合羽を着ていた。
「いくら霊体化ができないとはいえ、このような扱いは……」
汗を流しながらセイバーが言う。
「これでも目立つだろ。つーか不審者に見えるだろうが」
呆れながら銀時が話す。
「警察に捕まってもしらねーぞ」
「ていうか、アンタもその恰好なんとかしなさいよ」
などという会話が続いた。

＊

そして一行は教会に到着する。
「ここが言峰教会よ」
教会の前に立つ。
「安心して。ここの神父とは古い知り合いだから危険はないわ」
凛が振り返る。
「銀時。貴方は万が一の外敵に備えて、ここで待機してて」
「ああ」
「マスター。私もここで待機してます」
「ああ。わかった」
凛と士郎が教会の中に入っていった。
外には銀時とセイバーだけ。お互いなにも話さず、場が沈黙する。
（重いぃぃ！！空気がぁああ！！）
沈黙に苦しむ銀時。
（セイバー！何か喋ってくれ！頼む！３００円あげるから！！）
心の中でセイバーに頼む。
「銀時」
「おっ。何だセイバー？」
銀時の願いが通じたのか、セイバーが話し掛けてきた。
「一つ聞きたいのですが、貴方は一体何のサーヴァントですか？」
「ああ。青タイツにも言ったが、俺にクラスなんてねぇぞ」
「クラスがない？それは本当ですか！？」
セイバーが少し驚いてる。
「ああ。俺もカッコいいクラス欲しかったなぁ」
「クラスが無いサーヴァントとは…。しかしセイバーのサーヴァントの私に剣の勝負で勝つとは、さぞ有名な英雄なのでしょう」
セイバーがそう言うと銀時の表情が曇る。
「俺ぁ英雄なんて綺麗なもんじゃねぇよ」
「え？」
セイバーは銀時の顔を見た。その顔は、どこか淋しげに見えた。

＊

しばらくして、凛と士郎が戻ってくる。
「お待たせ。衛宮君にはしっかりと教え込んでおいたから」
「そうか」
「セイバー。ちょっと頼りないマスターだけど、これからよろしく頼む」
士郎が手を差し出す。
「はい。こちらこそマスター」
セイバーが差し出された手を握る。
「んじゃ、用も済んだしとっとと帰ろうぜ」
「そうね」
一行は歩き出す。

＊

一行を上から様子を見ている影が二つ。
「やあっと出てきた」
影の一つが喋る。
「行こう。バーサーカー。わたし待ちくたびれちゃった！」

第八訓：夜道歩くときは気をつけろ（前書き）

最凶のサーヴァント出現！

第八訓：夜道歩くときは気をつけろ

「凛」
銀時が話し掛ける。
「何？」
「２４０円貸してくれ」
「は？何に使うのよ？」
「ジャンプを買う」

しばらく歩いて凛が立ち止まる。ちなみに銀時はさっきのお願いを断られて落ち込んでいる。
「ここで別れましょう衛宮君」
振り返って士郎に言う。
「わかってると思うけど、次に会う時は敵同士よ。言っておくけど手加減なんてしないわよ」
「とか言いながら、士郎にいろいろと手助けしてたじゃねぇか」
「なによ？何が言いたいのよ？」
「いや、お前もいいヤツだなって思ってよ。嫌いじゃないぜ。お前みたいなヤツ」
「な……！？」
凛が顔を真っ赤にする。
「何言ってるのよ！バカ！！」
と凛が銀時の脇腹にパンチを食らわす。
「ぐぼぉ！！」
銀時が打たれた脇腹をおさえる。
「く…良いパンチ持ってるじゃねぇか凛…」
「うるさい！さっさと帰るわよ！！」

そう言って凛は坂道に振り返り、そのまま歩こうとして。
「！！」
ピタリと止まる。
「どうした、凛？」
「遠坂？」
凛の視線の先を見る。坂の上に雪のような白い髪の少女が一人、立ってる。
「もう帰っちゃうの？夜はまだまだこれからなのよ」
「え…？」
「おいおい。良い子はもうとっくに寝てる時間だぞ」
すると少女は薄く笑う。
「はじめまして。わたしはイリヤ」
少女・イリヤが挨拶する。
「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言えばわかるかしら？」
「なんですって！？」
凛が驚愕する。
「知ってるのか遠坂？」
「アインツベルン…。毎回、聖杯戦争にマスターを送り込んできてるヤツらよ」
「え…それじゃマスターなのか！？」
「そうだよ。お兄ちゃん」
イリヤが笑いながら話す。
「でもわたしの一番の目的はね…」
くるりと体を一回転する。
「お兄ちゃんを殺すこと」
少女の声とは思えない冷たく、殺意の篭った声でそう告げた。
「…！！」
士郎が思わず一歩後ずさる。
（俺を知ってる？でもどうして！？）

「わたしね、この日が来るのをず～っと待ってたんだ」
無邪気に笑いながらイリヤが話す。
「お兄ちゃんを殺すこの日を！おいでバーサーカー！！」
イリヤの声と共に地を揺るがす大きな音がする。
イリヤの後ろに鉛色の巨人が現れる。
鋼のような肉体。他を圧倒する威圧感。見ただけで相手を射殺せそうな眼。
「！！」
その圧倒的な”脅威”に凛と士郎は金縛りにあったように動かなくなってしまう。
（これがバーサーカー！？なんてデカさよ！！）
凛が驚愕の目でバーサーカーを見る。そんな緊迫した中。
「へ…屁怒絽（へどろ）！！？」
と銀時が叫ぶ。
「は…？」
凛が力無くそう呟く。
イリヤもポカンとしてる。
「屁怒絽さん…！いや、屁怒絽様もいらしてたんですか！？」
顔を真っ青にして冷汗をダラダラ流しながら頬を引きつらせる銀時。
「ヘドロって誰よ！！」
と怒鳴りながら凛が銀時に飛び蹴りを食らわす。
「うごっ！！」
銀時が倒れる。
今度はその様子を見ていた士郎とセイバーがポカンとなる。さっきまでの緊張感が台無しである。
「…貴方たち…ふざけてるの？」
不機嫌そうにイリヤが言う。
「バーサーカー！あんなふざけたやつら殺しちゃえ！！」
「■■■■■■！！！」
バーサーカーが咆哮しながら、銀時に向かって突進する。

「いっ！！」
銀時目掛けて大剣を振る。
とっさに木刀を前に構え大剣を受け止めるが、そのまま後方に吹っ飛び壁に叩きつけられる。
「ごはっ！！」
銀時が血を吐き、壁が音を立てて崩れる。
「銀時！！」
「銀さん！！」

第九訓：サーヴァントとは主を護る者なり（前書き）

感想お待ちしてます。

第九訓：サーヴァントとは主を護る者なり

「マスター退がって！！」
雨合羽を脱ぎ、不可視の剣を構えてセイバーが前に出る。
「■■■■■■！！！！」
吠えながらバーサーカーが迎え撃つ。

セイバーが不可視の剣でバーサーカーに斬りかかる。だがセイバーの剣はバーサーカーを斬ることなく鈍い音を立て弾かれてしまう。
「■■■■■■！！！！」
バーサーカーが吠えながら大剣を振るう。それを跳んで避け、後方へ移るセイバー。バーサーカーが続けて大剣を振るい、それを剣で受け止める。力負けして少し後ろに押されてしまう。
「く…！」
なんとか大剣を弾く。
だがバーサーカーの猛攻は止まらない。
バーサーカーが大剣を振るたびに、車や電柱など周りの物が破壊される。巨体に似合わぬセイバーを上回る素早さ。当たれば”死”へ繋がる重い一撃。セイバーはバーサーカーの攻撃を捌き続ける以外、方法は無かった。
「なんてバケモノよ…！」
そう言って凛は左腕の袖を捲くる。そして腕に刻まれた魔術刻印が光る。
「くらえ！！」
凛の手から黒い塊”ガント”の嵐がバーサーカーに向けて放たれる。ガントは全てバーサーカーに直撃。だがバーサーカーにはかすり傷一つない。

「そんな…！？全然効いてない！？」
「無駄よリン。バーサーカーには一定以上のランクの魔術じゃないと効かないわよ」
笑いながらイリヤが話す。
「く…」その時、凛達の隣で壁に何か激突する音がする。
「！？」
見ると頭から血を流してセイバーが倒れている。
「セイバー！！」
士郎が叫ぶ。
「マ…マスター…」
セイバーが顔を上げる。
「誰もわたしのバーサーカーには勝てないわ」
イリヤがバーサーカーの隣に立つ。
「バーサーカーの真名はヘラクレス。古代ギリシャ最大の英雄なのよ！！」
楽しそうにイリヤが喋る。
（ヘラクレス！？）
「サーヴァントは人々の認知度に強く影響されるの。この世に広く知れ渡った英雄ほど、そのサーヴァントは強力になる」
サーヴァントの強さについて話す。
「だから、ヘラクレスに勝てるものなんかいないのよ！」
その時、セイバーが剣を突き立てて、立ち上がろうとする。
「セイバー！！」
士郎がセイバーのそばに寄る。
「もうやめろ！このままじゃお前本当に死んじまうぞ！！」
士郎がセイバーにそう叫ぶと。
「マスター…」
セイバーが士郎の顔を見る。
「サーヴァントが最も優先すべき事は…マスターの命を護ることです」

「！！」
「ですから…いかなる敵が現れようと、私は必ずマスターを護ります！」
力強く言葉を放つ。
「ふーん。まだバーサーカーと闘う気なんだ。まぁ遊んであげてもいいけど…」
そこで一旦、言葉を切る。
「その前に…」
そう言ってイリヤは凛を見る。
「！！」
「バーサーカー！先にサーヴァントのいないマスターを殺しなさい！！」
「■■■■■■■！！！」
吠えながら凛に向かって突進する。
「遠坂っ！！」
士郎が走り出すが間に合わない。
「……！！」
凛が目を閉じる。
凛は自分の死を覚悟した。
「おいっ」
突然、聞こえたその声と共にバーサーカーの後頭部に大きな瓦礫の塊がぶつかる。
「！？」
全員が瓦礫が投げられた場所を見る。
そこには一人の男が立っていた。
「てめーらがうるさく騒ぐから眠れねーじゃねぇか」
侍・坂田銀時が立っていた。

第十訓：侍は倒れない（前書き）

銀時ＶＳバーサーカー！

第十訓：侍は倒れない

「ぎ…」
頭から血を流しながら、男がバーサーカーに向かって歩く。
「銀時！！」
凛が男の名前を叫ぶ。

「へぇ。あのサーヴァント生きてたんだ」
イリヤが少し驚いた様子で話す。
銀時がバーサーカーの数メートル前で止まる。
「何しにきたの？まさかバーサーカーと闘うなんて言わないわよね」
イリヤが笑いながら銀時に問う。
「闘うさ」
「！」
イリヤが少し驚いた顔をする。
「相手がヘラクレスだろうがヘラクレスオオカブトだろうが何だろうが」
銀時の目が鋭くなる。
「俺の大事なもんを傷つける奴ぁ」
「■■■■■！！」
バーサーカーが吠える。
「ブッた斬る！！！」
叫ぶと同時に木刀を構え、前に踏込む。バーサーカーも大剣を振る。
二人がすれ違う。銀時の右頬から血が出る。バーサーカーの額からも血が吹き出る。

「■■■■■■！！」
バーサーカーが吠えながら振り返り、銀時に大剣を振るう。地面が音を立てて、えぐれる。だが大剣を振った所に銀時の姿は無かった。気配に気付きバーサーカーは己が振った大剣を見る。大剣の上に銀時が乗っていた。
ニタッと憎たらしく笑い、バーサーカーの顔に木刀を叩き込む。バーサーカーの体が少しかたむく。
「！！」
イリヤ以外の全員が驚く。
銀時が地面に降りて追撃を放つ。それをバーサーカーは大剣を持っていない左手で防ぐ。
「終わりだよ。お兄さん」
バーサーカーが大剣を持ってる腕を振り上げ、勢いを付け銀時の左脇腹に大剣を叩き込む。
「い゛…！」
銀時の顔が歪む。
「ぐぼァアア！！」
口から血を吐く。
「銀時！！」
自分のサーヴァントの名を叫ぶ。
「バーサーカー相手によく頑張ったね。お兄さん」
イリヤが笑いながら話したその時。
「…ククク」
銀時の笑い声が聞こえた。
「！？」
「！！」
イリヤとバーサーカーが驚く。
「悪ぃなデカブツ」
大剣と脇腹の間に木刀を挟んでバーサーカーの攻撃を防いでいた。
「こんなもんじゃ、俺は倒れねぇよ」

顔を上げ、口から血を垂らしながら銀時はそう言った。
そして地を蹴り一気にバーサーカーの顔の前まで跳び、木刀の一太刀を浴びせる。銀時の一撃で首が鈍い音を立てて折れ、２メートル以上の巨体を誇るバーサーカーを十数メートル先まで吹き飛ばす。
大地が震えるほどの音を立ててバーサーカーが倒れる。
肩で息をしながら銀時が口元の血を拭く。
その場にいる全員が驚き、言葉を失っていた。
一度、銀時を吹っ飛ばし、セイバーを圧倒したあのバーサーカーに銀時は勝ったのだ。
「へぇ。バーサーカーを一回殺すなんて。やるわね」
イリヤが笑いながら言うと、バーサーカーが起き上がる。
「！！？」
全員が驚いた。銀時も驚いていた。
バーサーカーの首は元通りに治っていた。
「驚いた？バーサーカーはね十二の命を持ってるの。それがバーサーカーの宝具、ゴッド・ハンドよ」
自分のお気に入りのオモチャを自慢するように話す。
「そんな…」
凛が絶句する。
「リン。あなたのサーヴァント気に入ったわ。今日はこれで終わり。じゃあねお兄ちゃん」
そう言ってバーサーカーを連れて歩き出す。
「あっ」
と言ってイリヤが足を止めて振り返る。
「お兄さん。名前は？」
銀時に問い掛ける。
「坂田銀時。侍だ」
「サカタギントキ？サムライ？ふーん。わかった。じゃあねギントキ」
そして今度こそイリヤはバーサーカーと共に去って行った。

第十一訓：助け合う心って大事だよね（前書き）

感想お待ちしてます。

第十一訓：助け合う心って大事だよね

バーサーカーとの激闘を終えた後、一行は士郎の家にいた。
「ねぇ衛宮君。一つ提案があるんだけど」
「提案？」
「私と同盟を組まない？」

「同盟！？俺と遠坂がか！？」
居間に士郎の声が響く。
「ええ。今回は銀時がなんとか一回バーサーカーを倒したけど、だからといって次もうまくいくとは限らない」
凛が説明する。
「イリヤスフィールは個人的に衛宮君を狙ってるし、銀時にも興味を持った。つまりバーサーカーは私達の共通の敵ってこと。そこで私達が手を組むってこと」
「…本当にいいのか遠坂？」
「いいから手を組みましょうって言ってるんでしょ」
「はは…そうだよな」
士郎が笑う。
「その話、乗ったよ。遠坂が一緒なら心強い」
笑顔で士郎が凛の提案を承諾する。
「セイバーもいいか？」
隣に座ってるセイバーに聞く。
「はい。私もリンは信用できると思います」
と、セイバーが答える。
「それにギントキは強い。一度、剣を交えたのでわかります。ギントキも信用できる」

「銀時。アンタはどう？」
銀時に聞く。
「あ？いいんじゃねぇの？」
と、頭や腕に包帯を巻き、横になりながら適当に答える。
「じゃあ決まりね。私は色々準備があるから、また後でね」
そう言って凛は立ち上がる。
「ほら。行くわよ銀時」
凛が銀時を起こす。めんどくさそうに銀時が起き上がり、衛宮家をでる。

＊

数十分後、凛が銀時を連れて衛宮家に戻ってきた。大きな荷物を銀時に持たせて。
「今日からここでお世話になるから、よろしくね衛宮君」
笑顔でそう告げる凛。
「…なんでさ？」
「私達は戦略上、常に行動を共にする必要があるの。あっ私どこで寝ればいいの？」
「…ああ…離れがあるからそこの部屋を…ってちょっと待て！遠坂！！」
士郎が止めるのも聞かず、凛は銀時を連れて歩く。
部屋に着いて、持ってきた荷物を出す。
「遠坂は女の子なんだから、こういうのはまずいんじゃないか？」
「衛宮君。アンタも魔術師の端くれなら覚悟を決めなさい！」
「う…」
「何の覚悟だよ？」
銀時が突っ込む。
「それよりも問題は学校よね。セイバーが霊体化できれば問題は無かったんだけど…」

今後の行動について悩む。
「そっか。銀さんも霊体化できないんだっけ？」
「ああ」
「何かいい方法はないかしら…」
一同が悩む。そして銀時がポンと手を打つ。
「俺いい方法、思いついたかも」
「え？」
一同の視線が銀時に集まる。
「俺もセイバーも学校に行ける方法」
「本当ですか！？」
「ああ。ただなぁ…」
と、銀時が悩み始める。
「どうしたのよ？」
「今から間に合うかねぇ…」
そう言って銀時は何故か凛とセイバーだけに、その方法を教えた。
最初は驚いた凛だったが、すぐに意地の悪い笑みを浮かべる。
「わかったわ。私がなんとかするわ」
笑顔で銀時にそう答える。士郎には何も教えず凛と銀時は、また家に戻り新たな荷物を持って帰ってきて部屋に閉じこもってしまった。
結局セイバーも何も話してくれなかった。
そして士郎は一言呟いた。
「なんでさ？」

＊

凛の部屋。凛が何やら書類らしき物を書いてる。
ふと手の動きを止める。
「銀時」
「何だ？」
床にねっころがりながら答える。

「バーサーカーにやられた傷は大丈夫？」
「ああ。左の脇腹が痛ぇな。たくっ。あの馬鹿力」
銀時が愚痴る。
「銀時…」
「ん？」
凛が顔を少し赤くする。
「その…ありがとう」
恥ずかしがりながら銀時にお礼を言った。

＊

翌朝。
衛宮家に二人の訪問者が訪れる。士郎のクラスの担任である藤村大河、士郎の後輩で弓道部の間桐桜。家族ぐるみの付き合いであり日々食卓を共にしてる。ちなみにセイバー達がいることは内緒にしてる。
朝食を終え、凛達に学校に行くことを伝えて桜達と学校に行く。
学校に到着して、朝のホームルームが始まる。
「最後に今日から少しの間この学校で非常勤講師をすることになった人と転校生を紹介しまーす」
非常勤講師？転校生？と周りがざわつく。士郎が首を傾げる。
「はーい、入って～」
大河が入るように促すと、教室のドアが開けられる。

第十二訓：学校の屋上って気持ちいいよね

「どうも坂田野銀時です」
と、眼鏡をかけ白衣を着た銀髪の男が挨拶する。
「はじめまして。アリス・ペルドラです」
金髪の少女も挨拶する。
銀時とセイバーである。
士郎がおもいっきりずっこけた。

一時間目。数学の授業。黒板の前に立ち、坂田野銀時が教科書を開いている。ちなみにセイバーは士郎の後ろの席に座ってる。
「佐藤ー。この問題の答を言ってみろー」
「X＝8です」
「よーし。多分あってるぞ。はい次ー」
「先生ー。ちゃんと授業してください」
と女子生徒が言った。
「人生ちょっと適当なくらいが丁度いいんだ。はい次ー」
「先生ー。先生の場合、全てが適当です」
と男子生徒が言った。
「人生あきらめが肝心だ。あきらめて俺の適当な授業を受けろー」
こんな感じで授業は終わった。

＊

昼休みの屋上。
凛、銀時、士郎、セイバーの四人がいた。
「びっくりしたぞ遠坂。まさかこんな形で二人が学校に来るなんて

…」
「本当は銀時は私のクラスの担当にしたかったんだけどね。あ～あ。衛宮君の慌てた顔が見たかったなぁ」
凛が心底残念そうに言った。
「お前な…」
「結構大変だったのよ。書類を作ったり、手続きもしたり。何せ急な提案だったからね」
凛が疲れた顔をする。
「いやぁまさか本当にできるとは思わなかったなぁ」
「それじゃ時間もないし。本題に入りましょう」
そして凛は士郎とセイバーに学校に結界が張られてる事を教える。
衛宮士郎が使える魔術は”強化”のみである。そして物体の構造を”解析”することを得意とする。
話し合いの結果、士郎が解析し結界の発生装置の魔法陣を見つけ、凛がそれを無力化するということで決まった。

＊

放課後の学校。
さっそく士郎が解析を始める。そして凛が基点を潰していった。
「以外と簡単に終わりそうだな」
と銀時が言った時。
突如、世界が赤くなり体に重りを付けられた感覚が襲う。
「なっ！？」
凛が驚く。
「遠坂！これは…！？」
「結界だわ！まさかこのタイミングで発動するなんて…！」
「近くにサーヴァントがいるはずです！」
「行きましょう！」
凛が走ると。

「遠坂！そっちじゃないだろ！？」
士郎が凛を呼び止める。
「俺は外の方から何か感じるんだ」
「何ですって？」
「どうしますリン？」
凛がしばし考える。
「いいわ。二手に分かれましょう。けど無理はしないこと」
「わかった」
「行きましょう。シロウ」
士郎とセイバーが下へ向かう。
「銀時。私達も上に行くわよ！」
「おう」
凛と銀時が上に向かう。階段を上り屋上に出る。
「ここから感じるわ」
屋上の中央に出る。その瞬間、凛の背後に何かが迫る。
銀時が木刀でソレを弾く。弾いたソレは地面に刺さる。地面には鎖鎌に似た武器が刺さっていた。
「やりますね。さすがあのバーサーカーを倒したサーヴァント」
どこからか女の声が聞こえる。
「どこだ？」
凛の背中に立つ銀時。
「この程度の奇襲では仕留められませんね」
屋上に長身の女が現れる。
「サーヴァントか？」
凛を護るように前に出る。
「我がクラスは”ライダー”。クラス無きサーヴァントよ。貴方にはここで死んでもらいます」

第十三訓：みんな明日へ羽ばたくための翼を求めてる（前書き）

銀さんがライダーと対決します！

第十三訓：みんな明日へ羽ばたくための翼を求めてる

屋上で銀時とライダーが対峙する。
「凛。下がってろ」
「行きます」
ライダーが自身の武器を構える。

ライダーが鎖鎌に似た武器”ダガー”を銀時に向かって放つ。
それを銀時は木刀で音を立てて弾く。屋上に木刀とダガーがぶつかる甲高い音が響く。
ライダーのダガーは銀時の頭、心臓に向けて放たれる。向かってくるダガー二本を弾き、ダッシュでライダーの元へ向かう。
「く…っ！」
銀時が木刀を振り、ライダーの顔をかすめる。
すると銀時の後ろから遠坂が放ったガントが飛んでくる。ライダーが跳んでガントを避ける。銀時達から離れる。
（やはりこのままでは勝てませんね…）
するとライダーは顔に付けてるアイマスクに手をかける。
「？」
銀時が構える。
「本当は使いたくはなかったのですが…貴方を倒すには使うしかありません」
そう言ってライダーがアイマスクを外す。
カッと目を見開く。
直後、銀時の体に異変が起きる。
「ぐ…！？」
突然、体が重くなる。

「な…！こいつぁ…」
「銀時！これは”石化の魔眼”よ！！しかもその視界に収められるだけで術中に囚われる強力なヤツだわ！！」
「石化だと！？」
その時、ドスッと肉に硬い物が刺さる音がする。銀時の両足にライダーのダガーが刺さってる。
「ぐぁあああ！！！」
銀時が悲鳴を上げる。
「銀時！！」
凛が銀時に近寄る。
「足を潰され、結界、私の魔眼の力。これで貴方は動けません」
ダガーを構えて話す。
「動けねぇからなんだよ？」
「！」
「足潰されようが腕潰されようが、自分の肉体がある限り最後まで闘ってやるよ」
真っ直ぐにライダーを見据えて言う。
「銀時…」
銀時の後ろで凛が呟く。
「やはり貴方は危険ですね」
ライダーがダガーを複数構える。
「ここは念入りに殺しておきましょう」
次の瞬間、八本のダガーを銀時の後ろにいる凛に向けて放つ。
「く…！！」
凛を突き飛ばし木刀でダガーを防ぐが、左肩と右脇腹にダガーが刺さる。
「銀時！！」
そしてライダーは自らの首にダガーを突き刺す。
傷口から血が吹き出て、ライダーの前で血が不気味な魔法陣を描く。
「あれは…まさか…！」

魔法陣が光輝く。あまりの光の強さに凛が目を閉じる。
やがて光がおさまり、前を見るとライダーの姿が無い。上を見ると凛は驚きに目を見開く。
そこには翼の生えた白馬に乗ったライダーの姿があった。
「何だありゃ？」
「ペガサス！？」
「そうです。天を自由に駆る神代の幻獣です！」
ライダーが話す。
「今、発動してる私の宝具〝ブラッドフォード・アンドロメダ〟とこの魔眼〝キュベレイ〟の力によって動けない貴方にこの子の攻撃がかわせますか？」ペガサスの頭を撫でながら話す。
「ですが貴方はバーサーカーを倒したサーヴァント。一気に決着をつけます！」
ライダーの手に手綱が現れる。
「手綱！？あれがライダーの宝具！！」
「この子は騎乗兵としての私の能力の具現！私の手綱はこの子の潜在能力を極限まで発揮させる道具」
銀時を見下ろしながら話す。
「クラス無きサーヴァント。これで終わりにしてあげましょう」

第十四訓：一人の獲物を深追いするのは愚の骨頂（前書き）

ライダー戦、決着！

第十四訓：一人の獲物を深追いするのは愚の骨頂

ペガサスに乗るサーヴァント・ライダー。
傷ついた侍・坂田銀時。
銀時のマスター・遠坂凛。
屋上での闘いに今、決着が着こうとしていた。

「はっ！」
ライダーがペガサスを走らせる。鳴きながらペガサスが空を駆ける。
ペガサスが走って生じる風圧が銀時達を圧す。
「なんて風だ！まるで台風だな！」
風圧を受けながら銀時が立ち上がる。
「銀時！貴方、大丈夫なの！？」
「へっ。こんなもんで倒れる程ヤワじゃねぇよ」
圧倒的、危機にひんしても不敵な笑みを浮かべる。
「銀時！ここは一旦引くわよ！」
「引くってどうやって？言っとくが俺の足はもう一歩も動かせねぇぞ」
銀時の両足は傷口から血が大量に出ている。その上、ライダーが学校に張った結界『ブラッドフォード・アンドロメダ』、魔眼『キュベレイ』によって体が思うように動かない。
「逃げろ」
「え？」
「お前だけでも逃げろ。セイバー達と合流すりゃなんとかなるだろ」
「断るわ」
「あ？」
即答で断られて銀時は間抜けな声をだす。

「悪いけどね、アンタを見捨てて逃げるような薄情者じゃないのよ。私は」
「おい。魔術師は時に非常な決断を下さなきゃいけないんじゃなかったか？」
「うるさいわね！とにかくアンタを見捨てて逃げる事は絶対にしないわ！！」
顔を赤くしながら銀時に怒鳴る。それを見て銀時はやれやれと首を横に振る。
「たくっ。厄介なマスターのサーヴァントになっちまったぜ」
頭を掻きながら言う。
「だが…」
銀時が木刀を構える。
「お前だからこそ、命張って護るかいがあるってもんだ」
ペガサスは遥か高くに飛んでいた。
「これで終わりです！」
光速で屋上にいる銀時目掛けて降下する。
「ベルレー」
ライダーが宝具の真名を口にする。
「フォーン！！！！」
光を纏ったペガサスがスピードを更に上げる。そして銀時のいる屋上に直撃する。
激しい衝突音を立て、光速で突進してきたペガサスを銀時は愛刀”洞爺湖”で受け止める。
「うぉおおお！！！」
叫びながら必死にペガサスを止める。
骨が軋み、筋肉が悲鳴をあげる。ライダーにやられた傷口から血が出る。
「猛ろ！天馬よ！！天上の神々に愛された美しき我が子よ！眼前の敵を蹴散らすのです！！」
ペガサスの押す力が増す。

「がぁあああ！！！」
傷だらけの体で必死に耐える。
自分の背中にいる少女を護るためにボロボロの体で必死に耐える。
「さぁ消えなさい！クラス無きサーヴァントよ！！」
ライダーが叫ぶ。
「…負けねぇよ……俺ァ…」
だがここで銀時は表情を変える。
そして伏せていた顔を上げる。その顔は笑っていた。
「俺”達”は負けねぇよ！！！」
銀時がそう叫んだ直後、銀時の背後から一つの影が飛ぶ。
「！？」
ライダーが影を見る。
その影は。
「ライダー！！！」
鎧に身を包み、不可視の剣を持ったセイバーだった。
「セイバー！！？」
「はぁあああ！！！」
セイバーは不可視の剣を上から神速で振り下ろす。振り下ろされた剣はライダーとペガサスを上から真っ二つに両断した。
両断されたライダーとペガサスは姿が薄れ、風となって夜空に消えていった。

第十四訓：一人の獲物を深追いするのは愚の骨頂（後書き）

今まで書いた中で一番好きな話かもしれません。感想お待ちしてます。

第十五訓：みんなで囲む食卓は楽しい

闘いが終わり、屋上が静まり返る。セイバーが振返り、二人を見る。
「二人とも大丈夫ですか？」
そして士郎も屋上の入口から現れる。

「…へへ…セイバー…お前はやればできる子だと…思ってたぜ……」
そう言って銀時は、糸の切れた人形のようにその場に倒れてしまう。
「銀時！！」
「ギントキ！！」
二人が銀時に駆け寄る。
「銀さん！」
士郎も銀時に駆け寄ろうとした時。
「うわぁああ！！」
誰かの悲鳴が聞こえた。
「！！」
全員が声の主を見た。
「令呪が…令呪が燃えちまうぅ！！」
青い髪に学生服を着た男が燃えてる本を持って叫んでいた。
「慎二！？」
士郎は男の名を叫んだ。男は士郎と同じクラスの学生・間桐慎二。
「ひっ！」
短い悲鳴を上げて慎二が逃げる。
「待て！」
「セイバー待ってくれ！」
慎二を追おうとしたセイバーを士郎が止める。
「シロウ！？」

「慎二の事はいい。ライダーが慎二のサーヴァントならもう慎二は何もできない！それよりも今は銀さんを！」
「はい。わかりました」

＊

夢を見た。
何も無い荒れ地。そこに人がいた。いや、人ではない。人の形に近いが異形な形をした顔をしてる。それぞれが武器を手に持ち、大勢で中央にいる二人の男を囲んでいる。
一人は黒髪の長髪。一人は銀髪の天然パーマ。
「……これまでか」
長髪の男が口を開く。
「敵の手にかかるより、最後は武士らしく潔く腹を切ろう」
長髪の男がそう言った時。
「バカ言ってんじゃねーよ。立て」
銀髪の男が立ち上がる。
「美しく最後を飾り付ける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか」
刀を構えて銀髪の男が語る。
それを聞いて長髪の男も立ち上がる。
「行くぜ、ヅラ」
「ヅラじゃない。桂だ」
そして叫びながら二人の侍は眼前の敵へと向かって行った。
そこで夢は終わる。

＊

窓から差し込む太陽の光に当たり、凛が目を覚ます。ここは衛宮家の凛の部屋。凛は壁にもたれかかって床に座ってる。

ベッドには全身に包帯を巻いて、銀時が眠ってる。
「…夢…？」
凛が眠い目をこする。
夢で見た光景を思い出す。
「やっぱりこれ、アイツの記憶か…」
凛がため息を付く。
「サーヴァントとマスターは霊的に繋がってるからこんなこともあるんだろうけど…」
凛が顔を手で覆う。
（今の夢…銀時ともう一人の男を取り囲んでたあの連中…あいつら何者かしら？少なくとも人間じゃなかった…）
凛が考え込んでいると。
「…ん」
銀時が声を出す。
「銀時？」
銀時の名を呼ぶ。
銀時が目を開ける。凛が銀時の側に寄る。
「凛…？」
「よかった。目が覚めたのね」
凛が一安心する。
「あれ？髪切った？」
「切ってないわよ」
笑顔で銀時のボケにツッコむ。

＊

ライダーとの闘いの後、結界は消えたが、屋上がメチャクチャになってしまったので、その修理のために学校はしばらく休みとなった。
「銀さん。おはようございます」
「おお」

銀時が居間にくる。
「ギントキ。もう傷は大丈夫なのですか？」
「いやダメだな。銀さんの体はもうボロボロだ」
と言いながら座る。
「おはよう」
「おはよう。遠坂」
凛も居間にやってくる。これからみんなで朝食を食べるのである。
ちなみに今日は桜と大河は来ない。桜は何やら事情があって来れないらしく、大河は学校関係の事情で来れないらしい。
「そういやぁ飯なんて召喚されてから初めての気がする」
テーブルに並べられた朝食を見て銀時が言う。
「別にサーヴァントに食事は必要ないし」
「でも、みんなと食べたら楽しいだろ？」
「んじゃ食べますかね」
いただきます。
朝食を食べ始める。銀時が一口食べる。
「うめぇ！これお前が作ったのか？」
「はい。そうです」
「まさかこんな特技があったとはなぁ。やるなぁ士郎」
「はい。シロウの料理はとても美味しい」
たが凛は。
「よし。勝った！」
一人ガッツポーズをしてる。

第十六訓：食の好みも人それぞれ（前書き）

銀時ＶＳセイバー？

第十六訓：食の好みも人それぞれ

朝食を食べていた一同の動きが止まる。理由は銀時が白いご飯に”ある物”をかけているからである。その”ある物”とは。
「銀さん…何かけてるんですか…？」
「小豆テンコ盛り”宇治銀時丼”だ」
小豆だった。

「ギントキ！何ですかこれは！？」
テーブルを強く叩きながらセイバーが怒鳴る。
「そのような物は食への冒涜です！」
「バカヤロー。遥か昔より炭水化物と甘い物は合うとされてるんだ。パンやケーキだってそうだろ？」
「だからと言ってそのような料理！いえ料理とすら私は認めません！！」
強く断言する。
「こいつはな、昔デザートと飯をバラバラに食うのがメンドかったサンドイッチ将軍がつくり出した由緒正しい食べ物なんだよ」
宇治銀時丼を食べながら話す。
「いないわよ！そんな将軍！！」
凛が怒鳴る。
「そうです！そのような料理、私は存在自体、許しません！！」
銀時はやれやれと頭を掻く。
「そんなに言うなら俺の宇治銀時丼とお前の国の料理、どっちが優れてるか食べ比べてみるか？ねっ士郎君？」
「えっ？俺っ！？」
突然、指名されて驚く。

「ん…」
セイバーは暗い顔をして俯いている。
「セイバー？」
士郎がセイバーを呼ぶ。
「……雑でした」
ぽつりとセイバーが呟いた。
「え？」
その場の空気が変わった。触れてはいけないものに触れてしまった。
そんな感じだった。
「……雑って…セイバーの国の料理がか？」
恐る恐る士郎が聞いてみる。
「……はい」
暗い顔で答える。
気まずい空気が居間に漂う。
「…や、あの……ごめんセイバー…」
銀時が謝る。
「…いえ」
気まずい雰囲気のまま朝食は終わった。

＊

「ところでよぉ。一つ気になることがあるんだ」朝食が終わり、空気を変えようと銀時が話し出す。
「何？」
「宝具って何？」
「…ああ。それもまだ話してなかったわね。セイバー頼める？」
「はい。ギントキ。宝具とは英雄のシンボルたる武器であり奥の手となるものです」
セイバーが説明を始める。
「いくら英雄でも自分の力だけでは偉業は成せません。必ず切り札

となるアイテムがあるのです」
銀時は黙って説明を聞いてる。士郎もだ。
「つまり宝具とは英雄を英雄たらしめる神秘のアイテムなのです」
「ただ、宝具を使うってことはサーヴァントの正体を明かすことに等しいのよ。下手をしたら敵に手の内を晒すことになりかねないからね」
凛も説明に加わり話は終わる。
「じゃあセイバーも宝具っての持ってんのか？」
「はい」
その質問に凛は嫌な予感がした。
「…銀時～。貴方も宝具くらい持ってるわよね～？」
凛は笑顔だったが目は笑っていなかった。
「いや、俺の武器はこの洞爺湖だけで、んな派手な武器はねぇぞ」
木刀を持って話す。
凛は笑顔で額に青筋を浮かべる。
「こぉのダメ侍ー！！！！」
「ぎゃぁあああ！！！！」
綺麗な青空の下。銀時の悲鳴が、平和な衛宮家に響いた。

第十六訓：食の好みも人それぞれ（後書き）

感想お待ちしてます

第十七訓：暗い中で闇は動く

時は遡り、銀時達がライダーと闘っていた時。別の場所で”闇”が動き始めていた。

聖杯戦争が行われてる冬木。その冬木の深山町の外れに柳洞時という山寺がある。その山寺の山門に二人の男が対峙していた。一人は長い髪を後ろに束ね、和服を着たサーヴァント。手には長い刀を持っている。もう一人は髪は短く、黒服のスーツを来た人間である。そして手には刀が握られている。

雲から覗かせる月明りで刀が光る。

「ふむ。こんな時間に一体何の用かな？」

アサシンのサーヴァント・佐々木小次郎が沈黙を破る。

「なに…大した用じゃありませんよ」

男が口元を歪める。

「あんたの命を貰いに来たのさ！！」

叫んで男は小次郎に斬りかかる。山門へと続く石段で刀同士がぶつかり合う音が響く。

小次郎の武器『物干し竿』という長刀を弾き一気に懐に飛び込み勝負を決めようとするが、それを待っていたと言わんばかりのタイミングで小次郎が剣を放つ。

男は最後の一歩が踏み出せず、苦戦していた。

「ふむ。人間でここまでやるとは少々驚いたぞ」

小次郎が一歩下がる。

「ならばそなたの実力に応え、我が秘剣を披露しよう」

鋭い殺気を放ちながら小次郎が刀を構える。

男も刀を構える。

「秘剣―」
小次郎が口を開く。
「燕返し！！！」
その瞬間、上段と横薙ぎの一閃が同時に男に襲い掛かる。
「ぐ…！！」
男は石段の下へと飛び降りる。直後、ザンッと肉を斬る音がする。
男が足場の広い場所に落ちる。
男は起き上がる。そして男は見た。自分の腕を。男の左腕は肘からバッサリと斬られていた。
「うわぁああ！！！」
男が悲鳴を上げる。
「フ…今のは不完全であった。本来”燕返し”は敵の逃げ道を封じる第三の太刀が存在する。あの狭い足場では二筋が限界であった」
石段を下りながら語る。
男のいる広い足場に立つ。
「さて、続けるか？」
腕をおさえてうずくまる男に問い掛ける。
「……フフ…フフフ！フハハハハ！！」
突然、男が高らかに笑い出す。
「？」
小次郎は首を傾げる。
男が立ち上がる。
「たかが腕一本でお前に勝てるなら安いものだ！」
そう言うと、男が持っている刀から機械のコードのような触手が出て、男の斬られた左腕にくっつき刀身が太く長く変化する。
「む…！？何だそれは！？」
小次郎が僅かに動揺する。
「お前が知る必要は…」
男が邪悪な笑みを浮かべる。
「無いっ！！！」

男は先ほどとは別人のような速さで小次郎の懐に入り、動揺して反応できなかった小次郎の前に横薙ぎに剣を振る。
次の瞬間、小次郎の体は真っ二つに裂ける。ビチャビチャと血が飛び散る音と共に小次郎の体が地に落ちる。
「いいぜ。ご老人」
そう言うと森の中から一人の老人が現れる。
そして何やら小さく呪文を唱えると佐々木小次郎の体の内側から禍々しい黒く長い腕が出る。
「まさか……こんな形で終わる…とはな……せめて……あの銀髪の侍と…死合いたかったな…」
そう言ってアサシン・佐々木小次郎は消えていった。
男が佐々木小次郎を斬り裂いた異形の剣の名は『紅桜』と言う対戦艦用機械機動兵器。”電魄”と呼ばれる人工知能を有し、使用者に寄生しその身体を操る。戦闘のデータを重ね能力を向上させる生きた刀。使い込まれた紅桜は戦艦十隻の戦闘力を有する。以前、銀時が破った刀である。
「お前が何を企んでいようが関係無い。わしは聖杯が手に入れば…それで良い」
渇いた声で不気味に老人が語った。

第十八訓：飛んで火に入る夏の虫（前書き）

あの男が登場します。

第十八訓：飛んで火に入る夏の虫

アサシンの中から新たな漆黒のアサシンが生まれる。その時。
「てめぇらこんな所で何やってやがる？」
男の声がした。声の主を見る。青い服に赤い槍を持ったランサーが立っていた。

「マスターの命令で来てみりゃ、てめぇら何者だ？」
「サーヴァントか。丁度いい。お前も紅桜の糧になってもらおう」
そう言って男がランサーに斬りかかる。男の上段からの攻撃をランサーは槍で防ぐ。剣と槍がぶつかる音が響く。
「てめぇ！何だこの剣は！？」
「お前はおとなしく死ねばいいんだ！」
紅桜で猛攻をかける。
防戦一方となるランサー。
「調子に乗るんじゃねぇ！！」
怒鳴りながらランサーが紅桜を弾き無数の突きを繰り出し一気に形勢が逆転する。このまま、あと数発突きを繰り出し、宝具”ゲイボルク”で決めようとランサーが考えた時。
「…シ…なぬ、ていど…に…」
第三者の声が闇に漏れた。
その瞬間、黒い短剣が数本投げられ槍を持っているランサーの手に刺さる。
「ぬ…っ！！」
ランサーが痛みで怯み、一瞬スキが出来る。そのスキを見逃さず、男は紅桜でランサーを斬る。
「がっ！！」

口から血を吐く。
「死なない程度にやったぜ」
斬られた傷から鮮血が飛ぶ。
「ザバーニーヤ！！！」
アサシンが宝具の真名を唱える。グシャッと何かを握り潰すような音がした。
その音がした後ランサーは倒れて動かなくなった。
宝具を使い、ランサーを倒したサーヴァント・アサシンの黒い手には血塗られたランサーの心臓があった。
「やれやれ。これがアンタの宝具かい？恐い恐い」
と笑いながら男が言う。
アサシンは何も返さない。
対象者の二重存在を作りだし、その偽物を潰して対象者を殺害する呪いの腕。それがアサシンの宝具『ザバーニーヤ』
「さて、じゃあ俺は中にいるキャスターを始末するかな」
「わしも行ってやろう。ああ。アサシンはここにいてよいぞ」
「悪いね、ご老人」
そう言って二人は中に入っていった。
アサシンは一人、心臓を持ったままその場に立ってる。境内から肉を切り裂く音がしたのと同時にアサシンは心臓を喰らった。

＊

ある屋敷。
屋敷の中に一人の男がいた。
派手な女物のような着物。左目を覆う包帯。口にはキセルをくわえていた。
「ククク…うまくアレを手に入れられるかねぇ」
煙を吐きながら男は一人で話す。
電気も付けず月明りもなく、真っ暗な部屋で男は一人でキセルをふ

かしている。
「しかし銀時…お前も相変わらずバカやってんな」
雲が動き、月明りが男の顔を照らす。
銀時のいた世界。最も過激で危険な攘夷浪士。
高杉晋助である。

第十九訓：気になったらとことん調べろ

衛宮邸の一室。
凛の部屋。昼食を食べ終えて凛が何か考え事をしてる。
「どうしたぁ凛？」
「…一つ気になる事があるのよ」
「気になる事？」

「ライダーのマスターは慎二だったわよね？」
「ああ。俺は知らないけどな」
耳の穴をほじりながら話を聞く。
「でも、それは有り得ないのよ。慎二はマスターどころか魔術師であるはずがないの」
「…どういうことだ？」
「元々はマキリといって、海外の魔術師なんだけど、それが日本に移住して間桐を名乗るようになったの」
銀時は真剣な表情で聞く。
「だけどその後、彼らの魔術師としての血は薄まっていって、ついに魔術師の生命線である魔術回路は慎二の父親の代で失われたのよ」
そして凛が結論を出す。
「つまり間桐の家はとうに枯れてしまった家系で、慎二がマスターになんてなれるわけが無いの」
「けど実際そいつはマスターになってた…」
「そこが矛盾するのよ」
凛がまた考え込む。

「だったら答えは簡単じゃねぇか」
「え？」
凛が顔を上げる。
「別のやつがライダーを召喚して、そいつに渡したんだよ」
「だから、もう間桐には魔術回路を持った人は誰も…」
言いかけ、凛はある事に気付く。
「どうした？」
急に黙り込んだ凛に話し掛ける。
「……でも…まさか…」
小声で何やらブツブツ呟いている。
「おい、凛！」
「えっ！？」
銀時の声で我に帰る。
「急にどうしたんだよ？何か心当たりでもあるのか？」
すると凛は黙り込んでしまう。
「おい。凛。無視ですかコノヤロー」
「銀時」
「ん？何だ？」
「出かけるから付き合いなさい」
「は？」

＊

凛と銀時は間桐慎二の家の前に立ってる。
「こんなトコに来てどうすんだ？」
面倒臭そうに銀時が言う。
「確認しに来たのよ」
「何の？」
「とにかく中に入るわよ」
「おい。俺の話聞けよ」

正面から堂々と間桐邸に入って行った。玄関を開け中に入る。屋敷の中を見て回るが人はいない。
「誰もいねぇな」
「銀時」
凛が隠されていた地下室へと続く階段を見つける。二人で階段を下りて地下室の扉の前に立つ。凛に目で合図を送る。
扉を開ける。中は淀んだ空気と腐臭しかしなかった。そして暗い地下室の中央辺りに二人の人影があった。
「遠坂先輩！？」
後輩の間桐桜と。
「むっ。来たか」
桜と慎二の祖父・間桐臓硯がいた。
「桜…！」
桜の名を口に出す。
「カカカ。来たな遠坂の娘。そしてそのサーヴァントよ」
渇いた声で笑いながら臓硯が話す。
「てめぇ何者だ？」
銀時が警戒しながら臓硯に問う。
「ワシは間桐臓硯。ここにおる桜と慎二の祖父じゃよ」
「臓硯。貴方、桜を使ってライダーを召喚したわね」
「凛。間桐の血ってのはもう枯れてんだろ？だったら桜でも…」
「桜は私の妹よ」
銀時の言葉を遮り凛が言葉を放つ。
「え？」

第二十訓：間桐と桜

一人の少女が間桐邸にやってきた。
「今日からここがキミの家だ」
そう言われて少女は屋敷の中に入っていった。

屋敷の一室。
「お前は一日も早く当家の魔術を習得するのだ」
一人の老人が少女に話し掛ける。
「お前は間桐の頭首となり、この業を継承させてゆくのだ」
少女は黙って老人の話を聞く。
「お前は魔術の血が絶えた間桐家の希望だ。よいな」
「…はい」
小さく返事をする。
それから少女の辛い日々が始まった。
間桐の魔術は蟲を使う。だが少女には間桐の魔術は身体に合わなかった。少女は地下室で蟲による調整を受けていた。来る日も来る日も地下室で蟲による調整を受ける。
間桐での魔術の継承はまさに拷問だった。
間桐の魔術に無理矢理馴染ませるためにやってきた蟲の調整によって少女の髪や目の色は変化してしまった。そして頭首となる人間に選ばれなかった兄の慎二による暴力も続いた。
そんな中、少女はささやかな幸せを願っていた。同じ学校の先輩。衛宮士郎に心を寄せていた。

＊

「桜が…お前の妹？」

「間桐の血は枯れてしまった。だから私の妹の桜を養女として間桐に預けたのよ」

桜が顔を俯く。

「いや、ちょっと待て凛！お前と桜が姉妹って…」

言いながら凛と桜を見比べる。特に胸の辺りを見て。桜の方が大きい。

「胸の大きさが全然違…」

「どこ見て言ってんのよ！！」

すかさず銀時の顔に蹴りを入れる。

「がぶぁ！！」

口から血を出しながら倒れる。

「ふむ。それで遠坂の娘よ。一体何をしに来たのだ？」

地下室に臓硯の声が響く。

「臓硯。どうして桜を巻き込んだの？」

「巻き込んだ？これはおかしな事を聞く」

臓硯が笑う。

「聖杯を手にするのはマキリの悲願だ。ならば間桐の人間である桜が聖杯戦争に参加するのは当然の事ではないか」

「…桜。貴女はどうなの？」

今度は桜に聞く。

「…私は……」

桜は顔を下に向けたままだ。

「先輩が傷つくのは…嫌です……そんな事したくありません…」

先輩とは恐らく士郎の事だろう。

「私はただ先輩のそばにいたいんです…」

桜が嘘を言ってるようには思えない。おそらくライダーの行動は慎二、あるいは臓硯の指示だろう。

「なら桜。貴女は聖杯戦争で戦う気ないのね？」
「…はい」
小さな声で桜が答える。
「なに、桜が戦う必要はない。戦いはワシがつとめるからのう」
「黙ってろ、ジシィ！」
「むっ！」
銀時が臓硯を鋭い目で睨み、黙らせる。
「遠坂先輩！」
「！」
桜が顔を上げて叫ぶ。
「私…もう嫌です…！もうこれ以上耐えられません！もうここには居たくありません！！」
桜が涙を流す。
「助けてください…」
肩を震わせ、泣きながら凛に助けを求める。
凛は真っ直ぐに桜を見る。
桜も凛を見る。
「臓硯」
「ん？」
「遠坂家の当主として、桜の姉として、遠坂桜を返してもらうわ」

第二十一訓：必ずしも自分の思い通りになるとは限らない

桜は返してもらう。
凛が臓硯にそう告げる。
それを聞いて銀時は満足げな笑みを浮かべ、涙を流しながらも桜は笑顔になる。

「カカカ！」
臓硯の笑い声が地下室に響く。
「悪いがそうはいかん。桜はワシの大切な孫。聖杯を手に入れるのに必要なのじゃ」
「それおかしくねぇか？」
「む？」
「サーヴァント召喚とかならてめぇ一人でも出来るだろ。何で桜が必要なんだ？」
銀時の言葉で凛も気付く。
臓硯は黙っている。
「てめぇ…桜に何かしやがったな？」
目を鋭くして臓硯に問い掛ける。
凛も臓硯を睨む。
「カカカ。素直に教えると思うか？」
「じゃあ知るのも面倒だから、このままお前を斬り伏せる」
そう言って木刀を抜く。
「ほう。そのような事をしてよいのか？」
「何？」

銀時が目を細める。
「桜の心臓にはワシの刻印虫がおる。ワシの合図一つで刻印虫は桜の心臓を食い尽くすぞ」
「な…！？」
凛が動揺する。
桜は震えている。
「カカカ！桜を傷つけたくなければ妙な事はしないことだ」
臓硯が勝ち誇ったように笑う。
臓硯を睨みつける凛の目には怒りと悔しさが宿っていた。
この後、動けない二人をアサシンで始末する予定だった。だが。
「とぉおお！！！」
叫びながら銀時が臓硯にドロップキップを食らわせた。
「ぐぁああ！！」
臓硯が倒れる。
「魔術師殿ぉおお！！！」
銀時の予想外の行動に気配を殺して隠れていた黒いサーヴァント・アサシンが慌てて出てきた。
「ちょっとぉおお！！アンタ何やってるのよぉおお！！？」
凛も叫びながら駆け寄る。
「き…貴様…話を聞いていなかったのか？ワシに危害を加えると…桜の刻印虫が…」
鼻をおさえながら臓硯が話す。
「よく聞けジジィ」
「いや、おヌシが聞け！！」
「いいか？お前が桜を殺せばお前を守る人質はいなくなる。そしたらお前をブッた斬る。桜が人質じゃなかったらそのままお前をブッた斬る。つまり！」
銀時は声を大きくする。
「人質なんて無意味なんだよ！！」
臓硯を指差し銀時が言う。

「な…！？」
臓硯が驚愕する。
「なんて薄情な英雄だ…反英雄の私より酷い…」
アサシンですら呆然としてる。
「スキありー！！！」
銀時が木刀をアサシンの顔に思いっきり振りぬく。
「アアアアア！！！」
パコォオオンという良い音を立ててアサシンが吹っ飛び、壁に激突する。
アサシン：暗殺者としての能力、宝具を使うことなく気絶。
臓硯が呆気に取られる。
「間桐臓硯！」
「！！」
凛の声で臓硯が我に帰る。
凛の手には三つの宝石が握られてる。
「眠りなさい！永遠に！！」
凛が三つの宝石を臓硯に向けて投げる。暗い地下室で光を放ち臓硯の体に当たると、瞬く間に燃え広がる。
「ば…馬鹿な…ワシが死ぬのか……？こんな所でマキリが終わるのか……？有り得ぬ…有り…え…ヌ……」
最後の言葉を発し、肉体は燃え尽き、間桐臓硯はこの世から消滅した。
「違うわ。マキリは終わってたのよ。日本に来る前からね…」
灰となった臓硯を見ながら凛がそう呟いた。

第二十二訓：なんやかんやで姉妹や兄弟は一緒にいたくなるもんだ

臓硯を倒した凛は振り返って全力で走る。
「アンタ何考えてんのよぉおおお！！！」
怒鳴りながら銀時の〇玉を蹴り上げる。
「＃◇●※△■□」
銀時の目に涙が浮かぶ。

股間をおさえながらうずくまる銀時。
「て…テメェ凛…！何しやがんだ…？臭っ！！」
必死に声を出して凛に文句を言う。ピチャピチャした床の匂いに苦しむ。
「それはこっちのセリフよ！いきなり臓硯に攻撃して！一体何考えてるのよ！？」
「あ…あの…遠坂先輩…」
おずおずと桜が止めようとするが。
「桜は黙ってて！」
「は…はい！」
凛に圧されてしまう。
「桜に何かあったらどうするつもりだったのよ！？下手したら桜の命は無かったのよ！？」
銀時の胸倉を掴み怒鳴る。
「ま…待て！落ち着け凛！あれは俺の作戦だ！！」
「作戦？」
銀時を睨みつける。

「あのジジイは桜を人質にすればお前が攻撃できないとわかってた。だから、俺がジジイに攻撃して動揺してるジジイに”俺には人質なんて意味が無い”と思わせたんだ」
「だったら私にパスを使って教えてくれればいいじゃない！」
「いや、お前なんか失敗しそうだから…」
「バカ！！！」
「だばぁあああ」
凛が銀時を殴り、銀時の悲鳴が地下室に響いた。
肩で息をする凛。
「あ…あの…」
桜が凛に近寄る。
「桜！」
凛が桜の肩を掴む。
「アンタ大丈夫？怪我はない！？」
「え？あ…はい…大丈夫です」
戸惑いながらも大丈夫と答える。
「よかった…」
凛が安心する。
「遠坂先輩」
「！」
「ごめんなさい。遠坂先輩に迷惑をかけて…」
「貴女が謝ることはないわ。私は姉として桜を護っただけ」
「でも…私…」
「桜。自分を責める必要はないのよ。これは貴女を間桐に渡した、遠坂家の責任でもあるんだから」
「遠坂先輩…」
「さっもうここに用はないわ。さっさと帰りましょう。ほら銀時！さっさと起きなさい！」
振り返り、銀時を起こそうとする。
「誰のせいでこうなったと思ってんだ！？お前が俺の×玉を蹴った

からだろーが！！」
「桜の前で下品なこと言うなぁあああ！！！」
凛のガントが銀時に炸裂する。
「ぎゃぁあああ！！」
何発か当たりながらも体を起こして全力で逃げる。
「…あはは」
ここで初めて桜が笑った。心の底からの笑い。桜の顔は笑顔だった。

＊

「本当にいいんですか？」
間桐邸を出て、屋敷の正門の前に一同はいた。
「ええ。今後、桜の体に異常が無いか確認するには近くにいた方がいいから、貴女も衛宮君の家に泊まりなさい」
「でも…私なんかが…先輩の家に…それに…」
と言って暗い顔をする。
「本当の事を知ったら…先輩…私の事嫌いになります……」
「桜」
桜の肩に手を置く。
「私は衛宮君とは付き合いが短くて、よく知らないけど、桜は衛宮君の事よく知ってるんでしょ？」
「…はい」
「私は、本当の事を知っても衛宮君が貴女を嫌いになるとは思えない。違う？」
「…そうかもしれません…でも…」
それでも桜は暗い顔をして俯いている。その時。
「桜」
「！」
銀時が桜の名を呼ぶ。
「今まで長い間、一人で苦しみに耐えてきたんだ。だったら、ちょ

っとは周りの奴に頼ってもいいんじゃねぇの？」
「……」
「桜」
凛が桜の名を呼ぶ。
名前を呼ばれ桜が俯いていた顔を上げる。
「わかりました。ご迷惑をおかけするかもしれませんが、遠坂先輩。よろしくお願いします」
笑顔で桜が言った。
「よし。じゃあ衛宮君の家に行きましょう」
凛が歩き出すと。
「あの、遠坂先輩！」
桜が呼び止める。
「何？」
凛が振り返る。
「…あの…その……」
顔を少し赤くしながら戸惑っている。凛が何なのか聞こうとした時。
「姉さんって…呼んでもいいですか…？」
遠慮がちに凛に言った。一瞬、驚いた顔をした凛だが、すぐに笑顔に変わる。
「好きに呼びなさい」
凛の言葉を聞き。
「はい！姉さん！！」
笑顔で凛の横を歩く。
銀時は二人の後ろ姿を微笑みながら見て、歩き出した。

第二十三訓：悪人は暗い所が大好き

士郎の家へ向かう一行。
「あの…姉さんのサーヴァントの名前はなんて言うんですか？」
「俺にクラスは無いから。名前は坂田銀時。桜なら銀ちゃんって呼んでもいいよ」
「調子に乗るな！！」
凛が銀時に強烈なボディブローを食らわす。

一行は衛宮邸に到着。
最初は戸惑った士郎だが、凛から事情を聞き即座に理解した。
「わかった。桜は俺にとって大切な家族だ。こんな俺で役に立てる事なら何でも言ってくれ」
「先輩…本当にいいんですか？」
「当たり前だろ？間桐の人間だろと魔術師だろうと桜は桜だ。家族を守るのに理由なんていらない」
それを聞いて桜は涙を流す。
「先輩…ありがとうございます…！」
泣きながら士郎にお礼を言う。
「さぁ夕食にしましょう。今夜は私がつくるわ」
「遠坂がか！？」
士郎が驚く。
「姉さん。私も一緒につくります」
「そう。じゃあ台所に行きましょう」
「待て凛」

銀時が凛を引き止める。
「何よ銀時？」
銀時の顔は険しかった。少し汗もかいていた。
「かわいそうな卵はつくるなよ」
重い口調で銀時はそう言った。
「は？」

＊

銀時達が去ったあとの間桐邸。地下室で気絶していたアサシンが目を覚ました。
「む…んん……」
体を起こしながら頭をおさえる。
「ハッ！魔術師殿！！」
慌てて地下室を見回すが臓硯の姿は無い。代わりに灰の山が地下室の床にあった。
「魔術師殿…」
自分のマスターだった男の灰を手にし、そう呟いた。
その時、アサシンの背後に一つの影が現れる。気配を殺しながらゆっくりとアサシンに近づく。そして影の手がアサシンに伸びる。
「ぐあっ！！」
突然の激痛がアサシンを襲う。
アサシンが振り返り、その影を見た。
「き…貴様…まさか……！？」
影はゆっくりとアサシンの黒い体を飲み込んでいった。
「ぐぁあああ！！」
地下室にアサシンの断末魔が大きく響いた。
アサシンを飲み込んだ影は一言呟いた。
「ごちそうさま」
影の背後には、左目を包帯で覆った男が笑いながら立っていた。

第二十四訓：銀の侍と白い少女

衛宮家の夕食。
「おおっ！！普通の卵焼きだぁ！！！」
銀時は歓喜の涙を流しながら卵焼きを食べる。
「…負けた」
凛の中華料理を食べて士郎が呟いた。

翌日。
銀時は街を適当に散歩していた。
昨日の夕食、姉の凛が料理すると聞いた銀時は、自分がいた世界にいた殺人料理人を思い出した。
自分の営む『万事屋』の従業員の姉のつくる卵焼きは卵焼きではなく”焼けた卵””かわいそうな卵””ダークマター”と言う兵器なのである。最初はうろたえた銀時だったが、凛の料理は見た目も味も美味だった上に完璧な卵焼きだったので安心した。
「久しぶりにうまい卵焼きを食ったな。元の世界に戻ったら新八の姉と交換するか？」
そう言いながら歩く銀時はもう周りからの奇異な視線を気にしていなかった。
そのまま商店街を歩いていると急に着物の裾を引っ張られた。
「ん？」
銀時は振り返って視線を下に向けた。
「ギントキ、見ーつけた♪」
白い髪の少女が無邪気に笑ってた。

「おまっ…！……名前何だっけ？」
「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」
「ごめん。もう一回言って」
「イリヤでいいよ」

＊

誰もいない小さな公園。ベンチに銀時とイリヤが座ってる。
「イリヤ。まさかお前…こんな時間にやるつもりか？まだ昼前だぞ」
周囲を警戒しながら恐る恐るイリヤに聞く。
「ううん。今日はギントキに会いにきたの」
「え？」
間の抜けた声を出す。
「バーサーカーはお城にいるから怖がらなくても大丈夫だよ」
笑顔でイリヤが言う。
「そ、そうか。で？俺に何か用か？」
「うん。わたしね、ギントキに聞きたいことがあるの」
「何だ？」
「ギントキってどこの英雄なの？」
銀時がちょっと驚いた顔をする。
「わたしね、ギントキって名前とサムライって言葉を聞いて日本の英雄だと思ったの。でもいくら調べても”サカタギントキ”なんて名前の英雄は無かったの」
イリヤが足をブラブラさせながら話す。
「海外の英雄ってことは無いはずだし…。ねぇギントキ。良かったら教えて」
銀時の腕を掴みながらイリヤがねだる。
銀時が頭を掻きながらため息を付く。
「俺はこの世界の人間じゃないんだ」
「え？」

イリヤが首を傾げる。
「俺は別の世界からサーヴァントとして、この世界に召喚されたんだ」
「それ本当？」
イリヤが身を乗り出して聞く。
「ああ。俺のいた世界に魔術なんて無かったしな」
「ふ～ん」
イリヤが身を引く。
「やっぱりギントキって変わってるね。クラスは無いし別の世界から召喚されるなんて」
「疑わねぇのか？」
「うん」
無邪気な笑顔でイリヤがうなずく。
「そうか。イリヤはいい子だねぇ。ウチの神楽にもちったぁ見習わせたいぜ」
「カグラ？」
「ああ。俺は元の世界じゃ、なんでもやる『万事屋』ってのをやっててな。神楽はウチの従業員で馬鹿力で大食漢でゲロを吐いたヒロインだ」
「…何か凄い子ね」
イリヤが若干引いてる。
「ウチのバーサーカーみたいなもんだ」
銀時が耳の穴をほじる。
「あっそうだ」
銀時が何か思い出す。
「！」
「俺もイリヤに聞きたいことがあったんだ」
「何？」

第二十五訓：大きくなったらお父さんのお嫁さんになるって幼い頃の娘は言うと

イリヤと銀時。

第二十五訓：大きくなったらお父さんのお嫁さんになるって幼い頃の娘は言うと

「イリヤって何で士郎を狙うんだ？」
「え…？」
イリヤが目を丸くする。

「まぁマスターである士郎を狙うのは当たり前っちゃ当たり前だけどよ。イリヤの場合は個人的な理由があるみたいだしよ。それに」
一旦言葉を切る。
「初めて会ったときに感じたお前の殺気。ありゃ普通のガキが出せるもんじゃねーしよ」
イリヤは黙って銀時の話を聞いていた。
公園に二人が来る前の静けさが戻る。イリヤは喋らない。銀時はイリヤの返事を黙って待っている。
「ギントキ」
「！」
イリヤが重い口を開く。
その表情は暗かった。
「わたしにもね、エミヤキリツグっていう父親がいたの」
「エミヤって……どっかで聞いたような…」
「…でもね…捨てられちゃったの…わたしもお母さまも……」
静かにイリヤが語る。
「今回フユキに来たのは聖杯戦争に勝つためとキリツグに復讐するため……でもキリツグは死んでた」
銀時はイリヤの話を黙って聞いてる。

「キリツグは死んでたけど…その息子がいた。血が繋がってない息子が。エミヤシロウっていう息子が」
「えっ！？衛宮士郎！？じゃあ士郎がキリツグの息子ってことは……士郎の親父がイリヤの親父！？」
驚いてる銀時の言葉にイリヤが頷く。
「そうか。そういや二人とも衛宮だな…」
銀時が納得する。
「で？親父に復讐できない代わりにその息子を殺そうと考えたのか？」
イリヤは黙って頷く。
銀時は本日二度目のため息を付く。
「イリヤよぉ」
「！」
「復讐なんてやるもんじゃないぜ」
「どうして？」
銀時に聞く。
「どうしてってお前。復讐ほどつまらねぇもんはねーからだよ」
頭を掻きながら銀時は語る。
「憎いヤツを殺しても虚しさしか残らねぇし、また何か大事なもんを失くすことになるぞ」
「でも…！」
「イリヤ」
何か言い返そうとしたイリヤの言葉を銀時が遮る。
「親父が死んだって知ってお前どう思った？」
「え…？」
銀時の顔を見る。
「死んで嬉しかったか？自分の手で殺せなくて悔しかったか？」
「…わたしは……」
そう言ってイリヤは顔を下に向ける。
そして思い出す。キリツグと過ごした日々を。一緒にじゃんけんを

したり雪の降る山道を散歩したり。
イリヤの目から涙があふれ出てくる。
「お前は親父を殺すために来たんじゃねぇ。ただ親父に会いにきたんだ」
泣いてるイリヤの横で語る。
「会って文句の一つでも言ってやりたかったんだ」
イリヤが手で泣いてる顔を覆う。
「会って思いっきり抱きしめたかったんだ」
肩を震わせながら泣く。
「お前は、親父の事が好きだったんだ」
そしてイリヤは銀時に抱き付いた。銀時の胸の中で思いっきり泣いた。
銀時はイリヤの頭に優しく手を置いた。

＊

二人は公園の入口に立ってた。
「一人で大丈夫か？」
「うん。わたしね森の奥の大きなお城に住んでるんだ。今度ギントキも招待してあげるね」
笑いながらイリヤが言う。
「そいつぁ光栄だ」
銀時も微笑む。
イリヤが走り出す。途中で足を止めて銀時に振り返る。
「ギントキ！今日はありがとう！またねー！！」
手を振りながら笑顔でイリヤが言う。
「迷子になるんじゃねぇぞ」
「えへへ」
そうしてイリヤは笑いながら帰っていった。
「さて、俺も帰るかね」

銀時も公園をあとにして歩き出した。

第二十五訓：大きくなったらお父さんのお嫁さんになるって幼い頃の娘は言うと

戦闘シーンを書くのも大変だけど、こういう泣ける話みたいなのを書くのも難しいです。

第二十六訓：たまには平和な話を書いてみようかな（前書き）

是非、楽しんでください。

第二十六訓：たまには平和な話を書いてみようかな

衛宮邸の道場。
士郎とセイバーが打ち合いをしている。凛と桜は座って、銀時は横になりながらそれを見ている。
竹刀を打ち合う音が道場に響く。

「シロウ。そろそろ休憩にしましょう」
そう言うセイバーの顔は汗一つかいていない。
「あ…ああ…そうだな」
士郎は全身汗だくで大の字になって倒れていた。
「先輩。お疲れ様です」
「頑張るねー」
銀時は横になってる。
「アンタも少しは鍛練とかしたら？」
「いやメンドくせーから」

＊

みんなでお茶を飲む。
「そういえばセイバーが聖杯で叶えたい願いって何だ？」
士郎がそう聞くとセイバーは真剣な顔をする。
「私は…やり直したい過去があるのです」
「やり直したい過去？」
「はい」

場の空気が少し重くなる。
「そうだ。銀時の願いは何なの？」
「俺か？そうだねぇ…」
顎に手をやって考える。
「いちご牛乳を一生分手に入れることだ！」
そう言うと銀時以外の全員がポカンとなる。
「ず…ずいぶん変わった願いですね」
戸惑う士郎。
「バカヤロー。カルシウムさえ取れば全てうまくいくんだぞ」
「いちご牛乳しか飲めないでしょアンタ」
「んだコラ！コーヒー牛乳も飲めるぞ！！」
銀時と凛の口論というか子供の口喧嘩みたいなのが始まる。
「まぁまぁ二人とも落ち着いて」
士郎が止めようとすると。
「ギントキ」
セイバーが口を開いた。
「何だ？」
セイバーに顔を向ける。
「よろしければ私と手合わせを…」
「よろしくねぇから断る」
「う…！」
セイバーが言葉を言い切らない内に断る。
「んなメンドくせーことやってられっかよ」
めんどくさそうに頭を掻く。
「ですが…」
「ヤダ、コワイ、イタイ」
「なんでそこだけ外人なのよ」
凛が銀時の頭を叩く。

＊

午後一時半。
道場に銀時とセイバーが竹刀を持って対峙していた。
「悪いが手加減はしねぇぞ」
「望むところです」
両者、鋭い目で睨み合う。
それを道場の壁際で三人が座って見てる。
「…なんでさ？」
と土郎が一言呟いた。
何故こうなったかというと、昼ご飯に出されたデザートが一つ余り、
それを賭けて”糖分王”銀時と”食王”セイバーが決闘することに
なったのである。
「あの…止めた方がいいんじゃないでしょうか？」
「無駄よ桜。こうなったら私達じゃ止められないわ」
と呆れながら凛が言う。
そして銀時とセイバーが互いに竹刀を構える。
「勝っても負けても恨みっこ無しだぜ」
「ええ。純粋に剣士として勝負」
そして決闘が始まる。
「いざ！」
「尋常に！！」
「「勝負！！！」」
互いに踏み込む。
セイバーが竹刀を上段に構える。その時。
ベキッ。
セイバーの頭上で何か折れるような音がした。
「おっ？」
見るとセイバーの竹刀が折れていた。
（馬鹿め！引っ掛かったなセイバー！！）
銀時が薄い笑みを作る。

（セイバー達が道場に来る前に俺が使うやつ以外の竹刀を全て削っておいた！ブン回しただけで折れるくらいになぁ！！）
薄い笑みから邪悪な笑みに変わる。
「うわっ！銀さん汚なっ！！」
士郎が叫ぶが銀時は止まらない。
「デザートは俺のもんだぁああ！！」
叫びながら思いっきり上段から竹刀をセイバーの頭目掛け振り下ろす。
バシィイイ、という竹刀の音が道場に響いた。
セイバーが銀時の竹刀を両手で挟んで止めていた。
「げっ！？」
銀時は冷汗を流した。
（白刃取りかよ！？）
内心かなり焦る銀時。
セイバーはフッと短く笑うと伏せていた顔を上げる。
「ギントキ。貴方の事は尊敬していましたが、今のはちょっと頭にきました」
極上の笑顔で言った。
だが銀時から竹刀を奪い取り、その笑顔はすぐに一変する。
「ギントキ。貴方は侍の風上にも置けない人ですね」
目を鋭くして睨み、竹刀を銀時に向ける。
「ちょ…待てよ～セイバー。お前、アレだよ…冗談だよ冗談！」
「問答無用っ！！！」
「あああああ！！！」
この世界に来て一体、何度目の悲鳴だろうか。また衛宮家に銀時の悲鳴が上がった。
今日も衛宮家は平和である。

第二十七訓：遊園地はデートの定番（前書き）

銀時「感想よろしくね（ピース）」

「よろしくお願いします」

作者

第二十七訓：遊園地はデートの定番

「ん…」
窓から差し込む太陽の光に当てられ凛が起床する。ベッドから下りる。
「さて、台所に行きますか」

凛が台所に向かう。廊下を歩いていると。
「波ァアアア！」
庭から誰かの声がする。
「誰よ？こんな朝っぱらから…」
と言って庭を見ると。
「かーめー〇ーめー波ァアアア！！！」
両手を前に突き出しながら銀時が叫んでる。
それを凛は半眼になりながら眺めてる。
「なんか違うな～。もうちょっとアレかな。よし」
また何かの練習を始める。
「か～め～〇～め～」
銀時が構えを取りながら何気なく横を見ると。
「！！」
凛が呆れた顔で見ていた。

＊

居間。

銀時は手で顔を隠して落ち込んでいた。台所には凛が立って何かつくっている。
「私、何も見てないから」
「すまねぇ…」
銀時が謝る。
「魔力を使えば撃てると思って…全力で練習したんだが……」
銀時は恥ずかしさでもう顔を上げられない。
「まったく。いつまで落ち込んでるのよ」
銀時の横に座る。
「ほら。今日はデートに行くんだから、しっかりしなさい」
「あ？」
凛の言葉に顔を上げる。

＊

朝食を食べ、凛と銀時は冬木の新都にいた。凛の腕にはカゴが下げてある。
（何これ？凛はデートって言ってたけど…）
凛の顔を見る。
「ん？」
（デート？アレ？デートって何だっけ？）
銀時がデートについて考える。
（恋愛関係にある男女が一緒に出掛けること…だよな？あり？デート）
じっと凛の顔を見る。
「銀時？さっきからどうしたのよ？」
（デート…俺と凛が？）
そこでようやく現状を理解した。
「デートォオオオ！！？」
あまりの衝撃に街中で叫んでしまう。周りの人がみんな銀時を見る。

「ちょ…ちょっと銀時！街中で大声出さないでよ！！」
顔を真っ赤にして銀時に怒る。
「いや、だってお前…！デートって……どんだけぇええ！！」
パニックで冷静さを完全に失ってしまった。
「もう！さっさと行くわよ！！」
銀時の腕を引っ張っていく。
（凛とデートって…そんな遠坂ファンを敵に回すような事していいのかよ！？）
腕を引っ張られながら銀時はそんなことを考えていた。

＊

二人は最近、冬木にできた遊園地の入口の前に立ってる。
「何考えてるのよ！？あんな街中で大声出して！」
腕を組んで銀時に怒る。
「いや…悪ぃ……まさか凛が俺とデートなんて考えもしなかったからよ」
「い…言っとくけど別にアンタが好きだからデートするんじゃないんだからね！聖杯戦争で闘ってばかりだから、たまには息抜きをしようと思っただけなんだから！！」
急に顔を赤くして慌てて話す。
（何だこれ？もしかしてこれが”ツンデレ”ってヤツか？）
銀時がそんなことを考えていると。
「ほら！さっさと行くわよ！」
凛が歩き出す。
「へいへい」
そう言って凛の後を歩く。

＊

遊園地に入園する。
「さて。何から乗ろうかしら」
「予定立ててねぇのかよ」
「いいじゃない別に。とりあえず空いてる所から、どんどん行きましょう」
「やれやれ」
それから銀時はジェットコースターに乗ったりメリーゴーランドに乗ったり、様々なアトラクションに乗った。
「お腹も空いたし、そろそろお昼にしない？」
「ああ。そうだな」
二人は芝生の上に凛が持参したビニールシートを広げて座る。
「私サンドイッチ作ってきたのよ」
サンドイッチの入った弁当箱を出す。
ハムタマゴやツナマヨなどがあった。
「おっうまそうだな。じゃあ遠慮なく頂くぜ」
そう言ってサンドイッチを一つ手に取る。
「やっぱ凛の料理はうまいな」
「当たり前でしょ」
凛もサンドイッチを一つ食べる。
「凛達のおかげで久々にまともな飯が食えたぜ」
「今までどんなご飯食べてたのよ？」
「ご飯とパンを一緒に食べてたな」
「何で炭水化物と炭水化物を一緒に食べてるのよ！？」
そんなこんなで午前のデートが終わり、午後へと続く。

第二十八訓：なかなか素直になれないのが恋だと思う

昼食を食べ終えた二人は次のアトラクションに向かった。
「ここにしましょう」
あるアトラクションの前に止まった。そこは。
「！！」
お化け屋敷だった。

「行きましょう」
凛が歩き出す。
「お…おお」
銀時も歩き出す。
お化け屋敷の中に入る。暗い道を二人で歩く。
「けっ。暗いだけで全然恐くねぇじゃねーか」
そう言いながら銀時は凛の隣を歩く。
「…ねぇ銀時」
「ん？」
「何この手？」
そう言って自分の左手を見る。凛の左手を銀時が握ってた。
「なんだコラ。お前が恐がらないようにと思って気ィ使ってやってんだろーが」
「銀時の手、汗ばんでて気持ち悪いんだけど…」
「は？何言ってんの？」
明らかに銀時は動揺している。お化け屋敷に入ってからずっとこの調子だ。そう考えるとすぐに答は出た。

「銀時…」
そこでわざと間を取る。
「……恐いの？」
そう言って不敵な笑みを浮かべる。
”あかいあくま”が現れる。
「なにがだよ？」
銀時の声はわずかに震えてる。
「だから、お化けが恐いんでしょ？」
「バッカ、お前！全然恐くねーよ！」
銀時がそう言うと突然、左側からミイラ男が叫びながら出てくる。
もちろん良くできた人形だが銀時は。
「うおわぁあああ！！」
叫びながら銀時は床にはいつくばった。
「ほらほら、思いっきり恐がってるじゃない」
と意地悪な笑みを浮かべながら銀時に言った。
「バ、バカヤロー！そんなんじゃねーよ！」
慌てて立ち上がり、まだ誤魔化そうとする。
「ほら。手繋いであげるから行きましょう」
そう言って銀時に手を差し出す。
「いや、ホント違うから。お前勘違いしてるよ。俺は…」
と言いながら結局、差し出された凛の手を握る。

＊

お化け屋敷から出てまた他のアトラクションに乗り、もう夕方になっていた。
「…ねぇ銀時」
と少し戸惑いながら言う。
「ん？」
凛の顔を見ると少し赤くなっていた。

「最後に…アレ乗らない？」
そう言って凛は観覧車を指差す。
「ああ。別にいいぜ」
二人は観覧車に乗った。
観覧車に乗ってから二人は会話をしなくなった。夕日の光が二人の顔を照らす。
「銀時」
凛が口を開く。
「今日はどうだった？」
「ん？ああ」
夕日を見ながら言う。
「楽しかったぜ。遊園地に来たのも初めてだったし」
「そう」
会話が途切れて観覧車の中が静かになる。
「凛」
今度は銀時が口を開く。
「何？」
「ありがとよ」
微笑みながら凛にお礼を言う。
「な…！べ、別にお礼なんていらないわよ！」
顔を赤くして銀時から顔をそらす。
（やれやれ。女ってのは面倒だなぁ）
頭を掻きながらそんな事を思う銀時。

＊

遊園地を出て帰り道。あたりはもう真っ暗で、公園の近くを歩いている。
「すっかり暗くなっちまったな」
「ええ」

街灯の明かりだけの道を二人で歩いていく。
「銀時」
「ん？」
お互い足を止めて向き合う。
「これからもよろしくね」
笑顔で銀時に言う。
「おお」
銀時も笑みを浮かべて答える。
そして二人はまた歩き出す。
だが、すぐに銀時が足を止める。凛は銀時の顔を見る。銀時は驚いた顔で目を見開いていた。凛は銀時の視線の先を見た。
一人の男が銀時達に背を向けて道の先に立っていた。派手な着物。
頭には包帯が巻かれてるようだ。
男はゆっくりとこちらを振り返った。

第二十九訓：獣は野に放たれた

振り返った男は左目を包帯で覆い、口にはキセルをくわえている。
「高杉…！？」
銀時が目を見開いて驚く。
「よぉ。久しぶりだな銀時ィ」
口元を歪めて不敵に笑う。

（ヤバイ…！）
男を見て凛はすぐに危険を感じ取った。今までいろんなサーヴァントに出会い危険を感じてきたが、この男からはサーヴァントとはまた違った危険を感じた。
「…何でテメーがこんな所にいるんだ？」
銀時が敵意をむき出して高杉に聞く。これほどまでに敵意をむき出しにした銀時を凛は初めて見た。
「なに…聖杯戦争があるって聞いてよぉ。いてもたってもいられなくなって来ちまったよ」
「！！」
凛が驚く。
（こいつ聖杯戦争のことを知ってる！？それに銀時のことも……）
高杉がキセルを口にくわえる。
「実はなぁ、鬼兵隊と手を組んでる宇宙海賊”春雨”に怒愚魔（どぐま）博士っていう天人がいてよぉ、そいつが世界と世界を行き来できる『次元転送装置』なんていう漫画に出てきそうな装置を開発したんだ」
キセルを口から離して煙を出す。

「馬鹿な話だろ？だが俺はその装置を使ってこの世界に来たんだよ」
銀時達は黙って高杉の話を聞いてる。
「そしたらこの世界には聖杯戦争なんて物騒な事をやってるみてぇじゃねーか。こんな楽しい祭り、参加しねぇわけにはいかねーだろ」
そこで高杉は銀時を見て不敵に笑う。
「しかし銀時ィ。まさかお前がサーヴァントとしてこの世界に召喚されてたとはなぁ…ククク」
高杉が笑う。
「アンタ、どうして聖杯戦争のこと知ってるの？」
警戒しながら凛が聞いた。
「お前らが倒した臓硯って爺さんから聞いたんだよ」
「臓硯から！？」
「聖杯戦争について教えてもらう代わりにいろいろ手を貸してやったがな…銀時。お前ならあの妖怪ジジィを倒せると思ってたぜ」
どうやら臓硯と手を組んでいた高杉は初めから臓硯を始末するつもりだったらしい。
「しかも銀時ィ。お前あのバーサーカーを一回殺したらしいな」
再び口にキセルをくわえる。
「まぁ譲夷戦争で『白夜叉』と恐れられたお前ならサーヴァントの力なしでもバーサーカーに勝てたかもな」
「白夜叉？」
高杉の言葉に凛がひっかかる。
「なんだ。話してねーのか銀時？」
銀時はなにも返さない。
「”譲夷戦争”という、宇宙から来た天人との戦において鬼神の如き働きをやってのけ、敵はおろか味方からも恐れられた伝説の武人」
そこで高杉は煙を吐く。
「それが『白夜叉』坂田銀時だ」
凛が驚いた顔で銀時を見る。
「高杉。こんな所に何しにきやがった？」

目を鋭くして高杉に問い掛ける。
「決まってるだろ。聖杯なんて物騒な物を手に入れにきたんだよ」
「聖杯に願って江戸を更地にでもする気か？」
「聖杯に願って？」
銀時の言葉に高杉は目を細める。
「…ククク…ククク…クハハハハ！！」
高らかに笑い出す高杉。
「何がおかしいのよ！？」
凛が高杉に怒鳴る。
笑いを止めて高杉はこう言った。
「銀時ィ。お前まだ聖杯が願いを叶える便利な道具だと思ってるのか？」
「…どういうことだ？」
「いずれわかるさ」
そう言って高杉は銀時達に背を向ける。
「俺はもう元の世界に帰るぜ。後の事は部下に任せてある」
「待て！！」
高杉に向かって走り出す。だが銀時の行く手を塞ぐように黒いスーツの男が一人立ち塞がる。
「！！」
銀時が足を止める。
「紹介するぜ。そいつは牙蔵（がぞう）。鬼兵隊の一員だ」
凛は牙蔵を見た。
「何よアレ…？」
牙蔵の左腕を見て驚いた。牙蔵の左腕には黒い刀身に不気味な紫色の光を発してる刀が付いていた。
「紅桜！！？」
銀時が驚いて刀の名を大声で言う。
「ヅラがしくじって、一本だけだが残ったんだよ」
そう言って高杉は歩き出す。

「高杉！！」
銀時が叫ぶと高杉が足を止める。
「…銀時。次に会ったら俺をブッた斬るって言ったよな」
銀時に振り返る。
「残念だったな。俺をブッた斬れなくて」
「……！」
銀時は歯噛みする。
「お前がこの世界でどこまであがけるか楽しみにしてるぜ」
そう言って高杉は歩きだし、闇の中へと消えていった。

第三十訓：中途半端に強いと痛い目にあう

「待ちやがれ高杉！！」
銀時が走り出す。だが。
「アンタの相手は俺だぜ白夜叉ぁ！！」
牙蔵が紅桜を振るって銀時に襲い掛かる。

ギィン。ガキィイン。
夜の公園に刀同士がぶつかる音が響く。
洞爺湖を握る銀時と紅桜を振るう牙蔵。刀と一体化してる牙蔵は凛にとって不気味な敵だった。すぐに凛も魔術で援護しようとした。だがその必要はなかった。
「うぉおおお！！」
気合いと共に銀時が木刀を牙蔵に振り下ろす。
牙蔵は紅桜を上に構えて攻撃を防ぐ。
「ぐ…！」
牙蔵が後退する。
だが銀時は牙蔵を逃がさず次々と剣撃を繰り出す。
「ぐっ！く…！」
それを紅桜の反応速度で辛うじて防ぐ。状況は牙蔵の防戦一方であった。
（白夜叉の…攻撃が読めねぇ！！）
牙蔵は銀時の剣撃に苦戦していた。
銀時の剣は我流。雲の如き変化するその剣は正規の剣術を修めた者ほど、とらえ難い。

牙蔵は紅桜でサーヴァント二体と闘ったが、実力で勝ったわけではない。佐々木小次郎戦では紅桜の異形さに気を取らた小次郎の隙を付いて倒した。ランサー戦では途中から劣勢になり臓硯のアサシンが助太刀し、最終的にはアサシンがトドメを刺したのだ。
だが銀時はあのバーサーカーを倒した男。
しかも紅桜はサーヴァント二体と闘ったとはいえ経験が少ない。まだ銀時を倒すには力不足である。
使い込まれてない紅桜など今の銀時の敵ではなかった。
「テメーはどきやがれザコ助！テメーに構ってる暇はねーんだよ！！」
怒鳴りながら牙蔵の頭に木刀を叩き込む。
「が…！」
頭をおさえながら牙蔵が後ずさる。
「く…！さすが白夜叉！やっぱそう簡単には勝てねぇか…」
頭から血を流しながら笑う。
「テメーら聖杯について何を知ってやがる？」
「ククク！高杉様も言ってたろ。いずれわかるさ！！」
そう言いながら牙蔵は紅桜で地面をえぐり砂ボコリを起こし、地面の破片を飛ばす。
「ぐっ！」
銀時が両腕で顔を守る。
「今回は退かせてもらうぜ！またな白夜叉！！」
そう言い残して牙蔵は銀時達の前から姿を消した。
「ちっ」
銀時が舌打ちする。
「銀時」
「！」
凛に振り返る。凛は真っ直ぐに銀時の顔を見てる。
「貴方…何者？」
銀時にそう問い掛ける。

メンドくさそーに銀時が頭を掻く。
「わかった。わかったよ。士郎の家に戻ったら洗いざらい喋ってやるよ」
「ええ。もちろん」

第三十一訓：隠し事はいつかバレる（前書き）

更新しました～。

第三十一訓：隠し事はいつかバレる

衛宮邸。
居間には銀時、凛、士郎、セイバー、桜が座っていた。

「さっ話してもらうわよ。貴方が何者で高杉って男は誰なのか？」
凛が銀時に問う。
「わかったよ。しょうがねーな」
頭を掻きながら銀時が説明しようとしたが。
「つーか説明とか面倒だから。作者、なんかこう、うまい感じに説明まとめといて」
作者：はいはい、わかりました。頑張ってこう、うまい感じにまとめます。
「アンタら小説を何だと思ってんのよぉおお！！！」
凛の叫びも虚しく、簡単に説明することとなる。

＊

銀時はみんなに全てを話した。自分は別の世界から来たと。銀時が住んでる世界では宇宙から来た『天人』という宇宙人に支配されてること。かつて自分も攘夷戦争で天人と戦い多くの仲間を失ったこと。高杉晋助は幕府を倒そうとしてる『鬼兵隊』という武装集団のリーダーであること。以前、自分が倒した紅桜のこと。全てを話した。
銀時の話を聞いて、みんな言葉を失っていた。

（じゃあ、あの時の夢は譲夷戦争で戦った時の記憶…）
凛が以前見た夢の内容を思い出す。
「それで、その高杉って男は聖杯を狙ってるんですか？」
「ああ。聖杯を使って何か企んでんのは確かだ」
「しかしタカスギの言葉は気になりますね」
顎に手を当ててセイバーが言う。
「聖杯が願を叶える便利な道具だと思っているのか…タカスギは聖杯について何か知っているのでしょうか？」
「さぁな…」
銀時はため息を付く。
「あいつは臓硯から聖杯戦争のことを聞いてたわ…桜、貴女なにか心当たりはない？」
凛が桜にそう聞くと桜は表情を暗くする。
「桜？」
「ごめんなさい…私…まだみんなに隠してたことがあるんです」
「隠してたこと？」
士郎も桜に聞く。
「実は……私の体の中には…聖杯の破片が入ってるんです」
「え…？」
士郎が小さく呟く。凛も言葉なく驚いてる。
「マキリ独自の聖杯を作るためにお爺様が前回の聖杯の破片から作られた刻印虫を私の体内に埋め込んだんです」
桜の体に聖杯の破片を埋め込んだ？マキリの悲願なんかのために桜をそんな道具扱いしてたのか？桜の話を聞いて士郎は今は亡き臓硯に怒りを燃やした。
「でも、お爺様が死んで刻印虫も活動を停止して聖杯としての成長も止まりました」
「じゃあ桜はもう聖杯で苦しむことはないんだな？」
「はい」
「そうか。よかった…」

桜の言葉を聞いて安心する。
「姉さん。今まで黙っていてすみません」
凛に頭を下げる。
「はぁ。いいわよもう。桜が無事ならそれで」
「姉さん」
桜が顔を上げる。
「それでサクラ。他に何か知っていることは？」
セイバーが桜に聞く。
「いえ。私が知ってるのはこのくらいで…」
全員がうーむと考え込む。
すると。
「あっ」
銀時が声を上げる。
「どうしたの？」
「聖杯に詳しそうなヤツが一人いる」
「えっ！？誰よそれ！？」
凛が身を乗り出して聞く。
銀時は一人の少女の名前を出す。
「イリヤだ」

第三十二訓：我と書いてオレと読む（前書き）

作者「それじゃあ前書き係さん。お願いします」桂「前書き係じゃない桂だ。出番がないので前書きを担当することになった桂です。では第三十二訓をお楽しみください」

第三十二訓：我と書いてオレと読む

翌日の夕方。
タクシーで郊外の森に着いた。森の前に銀時達が立つ。桜は家で留守番をしている。
「んじゃ行くか」
銀時が一歩踏み出す。

「む…？」
銀時に続いて森に入ったセイバーが立ち止まる。
「どうしたんだセイバー？」
士郎が聞く。
セイバーが真剣な顔で振り返る。
「微かですが魔力の残滓を感じます。おそらくここには結界が張られてあったのでしょう。ですがその結界がありません」
「誰かが結界を破ったってことか？」
「はい」
結界を破って中に入った。一体誰が？
「とにかく中に入りましょう」
凛の言葉で森の中に入っていった。

＊

イリヤが住んでる城。
その城の中から音がする。剣と剣がぶつかる音。剣が肉を裂く音。

剣が肉を刺す音。それらが城内に響いた。
「イヤ…イヤだよ。バーサーカー…！」
城内で震えてる少女が一人。
「■■■■■！！！」
少女の前には体中に剣や槍を刺されたバーサーカーが大剣を振るって吠えていた。
「ふん。うるさい雑種だ。いい加減黙れ」
バーサーカーと対峙する黄金の鎧を纏った男がパチン、と指を鳴らす。
すると男の背後から剣、槍、矛とあらゆる武器がバーサーカー目掛けて発射される。
「■■■■■■！！」
咆哮を上げながら大剣を振るが全ての剣は弾けず、何本かバーサーカーの鉛色の屈強な体に突き刺さる。バーサーカーの鉛色の体から血が垂れ、城の床を赤く染める。
「お願い！もうやめてバーサーカー！」
少女がバーサーカーに叫ぶ。
この黄金の男との闘いで既にバーサーカーは八回死んでいる。銀時に倒された一回を合わせて計九回。半数以上の命を失っていた。
しかしバーサーカーは男へと向かっていく足を止めない。後ろにいる少女を守るために。
「うっとうしい雑種だ。これ以上、我(おれ)を苛立たせるな」
男の背後の空間が歪み新たな武器が現れる。男が指を鳴らし、再びバーサーカーへと剣を飛ばす。
「■■■■■！！」
吠えながらバーサーカーは剣を弾く。
「しぶとい雑種だ。だがこれ以上貴様に構ってる時間などない」
男が再び指を鳴らすと空間から新たな武器がバーサーカーへ飛ぶ。
城内に鎖のような音が響く。
バーサーカーの体を銀の鎖が二重、三重と拘束して動きを止める。

「■■■■■■！！」
バーサーカーが全身に力を込めて鎖を引きちぎろうとするが鎖はびくともしない。
「無駄だ。その鎖は捕縛した対象の神性が高いほど硬度を増す。我ほどではないが神性の高い貴様ではその鎖は破れん」
そう言って男はバーサーカーの横を通り過ぎる。
「■■■■■■！！」
バーサーカーが吠える。
男はバーサーカーを無視してイリヤを見る。
「ふむ。よく出来た人形だ。聖杯としての機能は完全だな」
イリヤが驚いた顔をする。
「あ…あなた、何なのよ？」
必死に声を振り絞って男に問う。
「貴様がそれを知る必要はない。我は聖杯を持って帰るだけだ」
そう言ってゆっくりイリヤに近づく。
「嫌…嫌！来ないで！」
涙が出るのを必死に我慢して叫ぶ。
「黙れ人形風情が」
黄金の男が近づく。
「誰か…助けて…」
一人の少年の顔がイリヤの脳裏に浮かんだ。
「お兄ちゃん…！」
銀髪の男の顔がイリヤの脳裏に浮かぶ。自分に大切な事を気付かせてくれた男の顔が。
「ギントキー！！」
イリヤが男の名を叫んだ。
直後、城の大きな扉が音を立てて開いた。
「むっ！」
黄金の男が扉の方を見る。
開かれた扉には着物を着た銀髪の男が立っていた。

「貴様…何者だ？」
黄金の男が不機嫌そうに目を鋭くして銀髪の男に言った。
「何者だ？」
銀髪の男は短く笑った。
「宇宙一馬鹿なサーヴァントだ。コノヤロー」
ニタァと憎たらしい笑みをして銀時は言った。

第三十三訓：主人公は遅れてやってくる（前書き）

桂「全国の譲夷志士の諸君、待たせたな。いよいよ銀時と金ピカが戦うぞ」

作者「いや、譲夷志士じゃないから」

第三十三訓：主人公は遅れてやってくる

「ギントキ！！」
イリヤが笑顔で銀時の名を叫んだ。
「よぉイリヤ。遅くなって悪ぃな」
笑みを浮かべる銀時。
「貴様…サーヴァントか」
不機嫌そうに銀時を睨みつける黄金の男。

「馬鹿な…！何故貴方が現界してるのですか、アーチャー！！」
銀時の横に立ち、黄金の男を見てセイバーが驚く。
「アーチャー？」
銀時が片眉を上げる。
「彼は前回の聖杯戦争にアーチャーとして参加したサーヴァントです」
セイバーが銀時に話していると。
「セイバー？おおっセイバーではないか！」
男は大きく両手を広げてセイバーの名を呼ぶ。
「何だあいつ？」
銀時は目を細める。
「セイバーよ。ようやく我のものになる気になったか！」
男の目はセイバーしか写っていないようだ。
「バカだ。あいつ絶対バカだ」
銀時が小声で呟いた。
「私はあなたのものになる気はありません」

不可視の剣を構えて男に答える。
「やれやれ。仕方ない。では少しお仕置きをしてやろう。ついでに俺の邪魔をしたそこの雑種もな」
そう言って銀時を指差す。
「それって金メッキ？」
黄金の鎧を指差しながら銀時が言った。
男の額に青筋が浮かぶ。
「王の所有物を馬鹿にするか無礼者めがぁああ！！！」
怒りの形相で男は怒鳴り、背後に浮かんでる剣を飛ばす。

＊

「何なのよアイツ？あの剣の数も普通じゃないわ！」
「しかもあれ全部本物だぞ」
凛と士郎は別の場所から中の様子を見てる。
「ちょっと衛宮君！全部本物ってどういうことよ！？」
「だから全部本物なんだって。どうして一人であんな沢山の宝具を持ってるかはわからないけど」
士郎が考える。
「全ての宝具を所有してる英雄…」
凛も考える。

＊

城内では激戦が繰り広げられている。しかし状況は銀時達の防戦一方だった。
黄金の男が雨のように繰り出す宝具の矢を二人は弾いて防ぐことしかできず前に踏み出せずにいた。
「ちっキリがねぇな！」
剣を弾きながら舌打ちする。

「フハハハハ！どうした雑種？威勢がいいのは口だけか？」
男が高らかに笑う。
二人が一歩引く。男が宝具の攻撃を止める。
「セイバー！あいつの真名とかわかんねぇの？」
「わかりません」
「わかんねぇって…あんなにバンバン宝具撃ってんだぞ？」
男は余裕の笑みを浮かべている。
「これほどの量の宝具を所有する英雄は私にもわかりません」
「マジでか？」
二人が話していると。
「セイバーから離れろ！雑種！！」
銀時に向けて宝具を放つ。
「うおっ！！」
横に跳んで宝具をかわす。

＊

銀時達が闘ってる中、凛と士郎は黄金の男の正体について考えていた。
銀時達に放ってた宝具の中には銀時の心臓を狙った紅い魔槍『ゲイボルク』に似たような槍もあった。
士郎は考える。もし男が全ての宝具を…いや、全ての宝具の原型を所有しているとしたら。
そして士郎はある一つの答を出す。
「もしかしたら…」
「何？何かわかったの衛宮君？」
「ああ。あいつの正体は…」
この世のすべての財宝を手にしたと言われる、メソポタミアの王。
人類最古の英雄王―。
「ギルガメッシュ」

第三十四訓：王様って髭生やして太ってるオッサンのイメージがあるよね（前書

桂「譲夷志士を目指す諸君！君達の魂のこもった感想を待っている
ぞ！」作者「譲夷志士、目指してないから」　　桂「作者！
ここは俺のコーナーだろ！俺の邪魔をするな！」

第三十四訓：王様って髭生やして太ってるオッサンのイメージがあるよね

城内の床に剣が突き刺さる。
「ふんごぉおお！！」
セイバーと一緒に宝具の雨を木刀で弾く。
イリヤは体を震わせてその光景を見てる。

「さすがはセイバー。そして粘るな雑種」
床には何十本という剣が突き刺さっている。
「はぁはぁ…なめんなよ若造…俺ぁまだまだやれるぜ…」
そう言う銀時は汗だくで肩で息をしている。
「ふん。そんなボロボロの体でよくもまぁ頑張るな」
黄金のサーヴァント・ギルガメッシュが見下した目で銀時を見る。
「大丈夫ですかギントキ！？」
銀時のそばに寄る。
「セイバー」
「何ですか？」
「このままじゃラチがあかねぇ。ここは強行突破するぞ」
「強行突破？」
セイバーが首を傾げる。
「いいか？奴はあくまで”アーチャー”のサーヴァントだ。奴に接近戦で勝負すれば”セイバー”のサーヴァントのお前が負けるはずねぇ。俺が奴の宝具の雨を弾きながら前に進むから、お前は俺のすぐ後に付いてあの金メッキに斬りかかれ」
セイバーに作戦を説明する。

「しかし、それではギントキが…！」
「心配いらねぇよ」
木刀を構える。
「死なねーよ俺ぁ」
銀時の目が鋭くなる。
「……わかりました」
セイバーも不可視の剣を構える。
「行くぜ！！」
「はい！！」
ギルガメッシュに向かってダッシュする。
「愚か者が！雑種ごときが我に近づくな！！」
声を大きくあげ、ギルガメッシュの背後から宝具が発射される。
「おおおお！！！」
自身に迫る宝具を木刀で次々と弾きながら進む。腕や足に剣や槍がかするが気にしない。ギルガメッシュに向かって進むのみ。
「下がれ雑種！！」
撃ち出す宝具の数を増やす。
ドスッと肉を刺す音。
「ぐっ！！」
銀時の左腕に剣が刺さる。
「死ね！雑種！！」
銀時にトドメを刺そうとした時。
「アーチャー！！」
「むっ！」
銀時の背後からセイバーが飛び出し、ギルガメッシュに斬りかかる。
ギルガメッシュが背後の空間から剣を取り出しセイバーの剣を防ぐ。
「ちっ！」
ギルガメッシュが後退する。
「逃がさん！！」
セイバーがギルガメッシュを追い追撃を放つ。

銀時の読み通り剣の腕ではセイバーが上だった。徐々にギルガメッシュを追い詰めていく。
「行けぇえ！セイバー！！」
銀時が叫ぶ。
「調子に乗るな！！」
再びギルガメッシュの背後から宝具の雨がセイバーに降り注ぐ。
「く…！」
今度はセイバーが後退する。
「やるではないかセイバー。流石は我の女だ」
「言ったはずです。私は貴方のものではない」
両者睨み合う。銀時が立ち上がる。
ギルガメッシュが不敵に笑う。
「よかろう」
「！」
セイバーが構える。
「お前を屈服させるために、我も”我の剣”で相手をしよう」
そう言って空間に手を突っ込む。そして一本の剣を取り出した。
「！！」
ソレを見ただけで嫌な予感がした。背中に寒気が走った。
果たしてソレは”剣”と呼べる物なのか。刀身は三つのドリルのような円筒で出来ている。
「これは我の剣だが我にも名がわからなくてな。我は『エア』と呼んでいる」
エアの三つの円筒が回転を始め、爆風を起こす。
「いけない！！」
セイバーも自らの剣の封印を解く。剣を不可視にしていた宝具『風王結界』を解き、不可視の剣はその姿を現す。セイバーの手には黄金の剣が握られていた。
「エヌマー」
エアの出力が上がる。

「エクスー」
セイバーの聖剣が黄金に輝く。
「エリシュ！！！」
エアから紅き閃光が放たれる。
「カリバー！！！」
聖剣から黄金の閃光が放たれる。
放たれた二つの光がぶつかる。風を起こし、光を発し、周囲を巻き込みながら二つの究極の剣が激突する。
やがて光は消え、風がおさまる。銀時が伏せていた顔を上げた。
立っていたのはギルガメッシュだった。黄金の鎧には傷一つない。
銀時はセイバーが立っていた所を見た。
セイバーは倒れていた。銀の鎧は粉々に砕け、頭や体の所々から血を流して倒れていた。
「セイバーー！！！」
セイバーの姿を見て銀時は叫んだ。

第三十五訓：初めて会う人を呼び捨てにしてはいけない（前書き）

桂「むっ。そういえばエリザベスが見当たらんな。エリザベス～」

エ［第三十五訓、楽しんでください］

桂「エリザベス！！？」

第三十五訓：初めて会う人を呼び捨てにしてはいけない

銀時がセイバーに駆け寄る。
「セイバー！しっかりしろ！おいっ！！」
「ギ…ギントキ…」
セイバーが弱々しい声を出す。

「セイバー！！」
城の入口から士郎が叫びながら凛と一緒に入ってきた。
「士郎！凛！」
士郎を見る。
「セイバーのマスターか…」
士郎を睨むギルガメッシュ。
「ギルガメッシュ！！てめぇ…！よくもセイバーを！！」
士郎の言葉を聞き、ギルガメッシュが片眉を上げる。士郎がギルガメッシュに向かって走り出そうとする。
「バカヤロー！てめぇの敵う相手じゃねぇだろ！！」
銀時が士郎を止める。
「ほう。雑種ごときが俺の正体に気付くとはな」
ギルガメッシュが細く笑む。
「だが雑種」
すぐに笑みが消える。
「雑種ごときが王である我の名を呼ぶな！不届き者め！！」
ギルガメッシュが宝具を数十本、士郎に向けて放つ。
「ちっ！」

銀時が士郎と凛を護るように二人の前に立つ。迫る宝具を木刀で弾く。だが逆に宝具に木刀が弾かれ銀時は丸腰になる。丸腰となった銀時に数本の剣が刺さる。
「ぐぁああ！！！」
銀時が悲鳴を上げる。
「銀時！！」
叫びながら凛は銀時に駆け寄り、体を支える。銀時の体から血が出る。
「銀さん！！」
士郎も銀時に駆け寄る。
「わかったか雑種ども」
ギルガメッシュが不敵に笑う。
「これが王と雑種の絶対的な力の差だ」
士郎がギルガメッシュを睨む。何もできない自分に腹が立つ。
「うるせーよ」
銀時が口を開く。
「何？」
ギルガメッシュが目を細める。
「さっきから雑種、雑種ってうるせーんだよ」
足に力を込める。
「セイバーを物扱いしたり士郎を雑種呼ばわりしたり…」
傷口から血を流しながら立ち上がる。
「そうやって人を見下す権利なんて誰にもねーんだよ」
力強い目でギルガメッシュを見る。
「…まだ立ち上がるか雑種」
不快感を露にした目で銀時を睨む。
「銀時！その体じゃ無理よ！」
凛が銀時を止めようとする。
「凛…俺よりセイバーを頼む」
「けど…！」

凛は銀時の着物を掴んで離さない。
「凛」
「！」
銀時が凛の顔を見る。
「俺は負けねーからよ」
そう言って銀時は笑った。
銀時の笑った顔を見て、凛は思わず掴んでた手を離す。
「ふん。剣もない貴様に何ができる？」
ギルガメッシュは余裕の笑みを浮かべている。
「剣ならあるぜ…とっておきの剣がな」
銀時は不敵な笑みを浮かべる。
「とっておきの剣だと？フハハハハ！貴様にお似合いのみすぼらしい木刀は手元にはないのだぞ？」
ギルガメッシュが高らかに笑う。
それでも銀時は不敵な笑みを崩さない。すると突然、銀時の左手が光出す。
「ん？」
左手の光は強く輝いた。

第三十六訓：目覚める夜叉（前書き）

桂「さぁギルガメッシュ戦もクライマックスだ！克目せよ！！」

第三十六訓：目覚める夜叉

光は消え、銀時の左手には一本の刀が握られていた。刀の鍔の装飾はとぐろを巻いた龍だった。

「何だそれは？」
ギルガメッシュが銀時に問う。
だが銀時はギルガメッシュの問いには答えず、ゆっくりと刀を鞘から抜いた。
「何かって？そうだな…」
銀時が刀を構える。
「『名も無き名刀』ってのはどうだ？」
と笑いながら言った。
「…いい加減にしろよ雑種」
不快な目で銀時を睨む。
「貴様のその顔を見るだけで苛々する。そして今までの王に対する無礼な行動と言動。万死に値する！」
ギルガメッシュの背後に宝物庫『ゲート・オブ・バビロン』が展開され、無数の宝具が現れる。銀時が凛達から離れてギルガメッシュと対峙する。ギルガメッシュも銀時だけに狙いを定めてる。
「目障りだ。失せろ雑種！！」
その言葉を合図に宝具が発射される。それぞれが必殺の威力を誇る魔弾。
銀時はその魔弾の中に走っていった。鋭く銀色に光る刀を手にして。
凛はセイバーの手当てをしていた。魔力のこもった宝石を使って回

復させる。
「あ…リン…？」
セイバーが目を覚ます。
「セイバー！気がついたか！？」
「シロウ？私は…確かアーチャーの宝具に……」
そこでハッとなる。
「ギントキ！ギントキはどうしました！？」
セイバーが慌てて辺りを見回す。ギルガメッシュと闘ってる銀時の姿をとらえる。
「私も…！」
と言って立ち上がろうとする。
「バカ！その体じゃ無理だ！！」
士郎に止められる。
「ですが…このままではギントキが…！」
セイバーが悔しさを顔に出す。
「大丈夫よ」
凛が言った。
「大丈夫。アイツは負けないわ」
「リン？」
「銀時は私のサーヴァントよ。だから私は銀時を信じてる」
凛は力強くそう言った。
「ですが…いくらギントキでも…」
そう言ってまた銀時を見る。最初は自分の力の無さに悔しみながら見ていたが、すぐに驚きの表情に変わった。
当たっていないのだ。銀時にギルガメッシュの宝具の雨が銀時に当たっていない。それどころか掠りもしない。
神速の速さを保ちながら刀で宝具を弾き、体を捻って宝具を避けながら徐々に前に進んでいる。
（馬鹿な！？動きがさっきと別人ではないか！！）
ギルガメッシュの顔に初めて焦りの色が浮かぶ。

「凄い…！」
士郎も驚いている。
「どうして急にあんなに強くなったんだ！？」
士郎が驚いてる隣でセイバーがじっと銀時の動きを見てる。
「まさか、この戦いの中で成長してるのか！？」
士郎がそう言うと。
「いえ、違いますシロウ」
士郎の言葉を否定する。
「違う？じゃあ一体…」
「あれは成長などの強さではありません。あれは極限の命のやり取りの中で」
宝具を弾き、捌き、かわしながら銀時が前に進む。
「体の奥底に眠る戦いの記憶が甦ったのです」
セイバーの言葉を聞いて凛は思い出す。銀時がかつて『白夜叉』として恐れられていた事を。
「おのれぇええ！！」
ギルガメッシュが怒声を放つ。
「よもや貴様のような雑種ごときに我の剣を使うことになるとはな！！」
そう言って空間に手を伸ばし、一つの剣を取り出す。星によって鍛えられたセイバーの聖剣『エクスカリバー』を破ったギルガメッシュの剣『エア』。
「塵一つ残さん！！」
剣が回転を始め、出力を上げる。
「跡形も無く消えて無くなれぇ！！！」
セイバーの時以上の暴風を起こし、エアの出力が最大になる。
銀時はギルガメッシュの前で立ってる。
「エヌマ―」
風がエアへと集まっていく。ギルガメッシュは剣を振る。
「エリシュ！！！！」

先ほどよりも強大で強力な『エヌマ・エリシュ』が放たれる。
紅い閃光が銀時に迫る。城の壁を破壊し、床をえぐり、瓦礫を吹き飛ばす。
そして光は消え、風が止む。煙が消えて銀時が立っていた所が見えた。その場所に銀時はいなかった。
「フハハハハ！！」
銀時の姿が無くなり高らかに笑い上げる。
だがすぐに笑いは止まる。ギルガメッシュは感じた。自分の背後にある気配を。
凛は見た。ギルガメッシュの背後にいる自分のサーヴァントを。
凛は思った。
（これが白夜叉！！！）
ギルガメッシュの背後で銀時は居合いの構えをしている。
「貴様…！！」
ギルガメッシュが振り返るが、もう遅い。
銀時から銀色の刃が放たれる。
放たれた刃は黄金の鎧とギルガメッシュの体を斬った。

第三十七訓：サブタイトルを考えるのもなかなか大変（前書き）

桂「何故、俺ではなく奴らが出ているのだ！？」

第三十七訓：サブタイトルを考えるのもなかなか大変

二十年前、突如江戸に舞い降りた異人『天人』。彼らの台頭と廃刀令により侍は衰退の一途をたどっていた。
それが銀時のいた世界。銀時のいた国。
江戸である。

暗い部屋。
明かりは部屋に置いてあるパソコン画面の光のみ。パソコンの前に一人の男が椅子に座っていた。
男は怒愚魔(どぐま)博士という名の天人。銀河系で最大の規模を誇る犯罪シンジケート宇宙海賊”春雨”の一員で、『次元転送装置』を発明して悪巧みを考えてる科学者。
「高杉様は戻ってこられた。後は牙蔵が聖杯とかいうのを手に入れてくれれば…」
キーボードを叩きながら怒愚魔博士が喋る。
「もうすぐだ。もうすぐ全てが終わる」
口元を歪めながら喋る。
「聖杯を使って私を学界から追放した連中に復讐してやる！！」
握り拳に力を入れて怒愚魔が叫ぶ。
その時。
「くせ者だー！！」
怒愚魔のいる地下室の上が騒がしくなる。
「何？」

＊

怒愚魔のいる地下室の上の部屋。黒服の男達が刀を手に部屋に突入していた。

彼らは『真選組』。幕府の武装警察である。

先頭に三人の男が立っている。

「御用改めである！」

大声を上げたのは真選組局長・近藤勲である。顔がゴリラ顔でストーカーをしてるのが特徴。

「真選組だ！神妙にお縄につけ！！」

次に声を上げたのは真選組鬼の副長・土方十四郎。目を鋭くし、タバコをくわえている。重度のマヨラーで常に瞳孔開き気味。

「あ～かったり～」

呑気な声を出すのは真選組一番隊隊長・沖田総悟。真選組一の剣の使い手でドSである。常に副長の座を狙っている。

「おのれ真選組め！！」

「幕府の犬が！！」

着物を着た男達が刀を持って部屋に集まる。

彼らは『譲夷浪士』。

幕府を倒し、天人を排除しようとしてる連中である。中にはテロ行為をする過激派もいる。

「一人残らず討ち取れぇええ！！」

土方の声を合図に真選組と譲夷浪士の戦いが始まった。

「トシ！総悟！こっちだ！」

近藤が地下室への階段を見つけ二人を促す。階段をおりていく。

勢いよく扉を開ける。

中には怒愚魔博士と人が二人ほど入れる巨大な装置があった。

「し…真選組かっ！？」

怒愚魔がうろたえる。

「てめぇ！高杉はどこだ！？」

胸倉を掴んで怒愚魔に詰め寄る。
「こ…ここにはもういない！一時間ほど前に出ていった！本当だ！！」
怒愚魔が震えながら答える。
「トシ。どうやら本当のようだ。上でも高杉の姿はないようだ」
部屋を捜索し、上の階にいた隊員からの報告を受け、土方にそう言った。
「ちっ」
舌打ちをして怒愚魔を離した。
「しっかし何だこの装置は？」
そう言って土方は巨大な装置に手を触れる。
「土方さん。危ないですぜ～」
直後、バズーカが発射される音がした。
「うおわぁ！！？」
ギリギリで弾を避け、装置が爆発する。次元転送装置は粉々に壊れてしまった。
「総悟ぉおお！！」
近藤が叫ぶ。
「土方さ～ん。大丈夫ですかい？」
バズーカを担いで呑気な声で土方を呼ぶ。
「てめぇ総悟！死ぬとこだったじゃねーか！！」
怒鳴りながら土方が立ち上がる。
「よかった。無事だったんですね。チッ」
「おい！今、舌打ちしたろ！？こっち見ろ！！」
二人が言い争ってる隣で。
「ああ…わしの最高傑作が……！」
怒愚魔が力無くうなだれた。
「まぁまぁ元気出せ」
近藤が怒愚魔を慰める。

＊

怒愚魔博士と譲夷浪士をパトカーで連行する。

「そういやァ土方さん」

沖田が土方に話し掛ける。

「何だ？」

口からタバコの煙を吐く。

「俺達の出番、これで終わりみたいでさァ」

「え？」

土方は口をポカンと開けてタバコを地面に落とした。

第三十八訓：一難去ってまた一難（前書き）

桂「おのれ真選組め！俺も必ず出てやるぞ！！」

第三十八訓：一難去ってまた一難

アインツベルンの城。
銀時とギルガメッシュの戦いが終わろうとしていた。

「がはっ！！」
銀時に斬られ、口から血を吐いて床に膝をつく。
銀時も傷口から血を流し、肩で息をする。
戦いの様子を見ていた全員が驚いて声も出ず呆然としていた。
「俺の勝ちだなぁ…王様ぁ？」
憎たらしい笑みを浮かべる銀時。
「き…貴様のような…雑種に…！」
銀時を睨む。
その時。
「何やってるんだよお前！？」
突然城内に誰かの声が響く。
全員が声の主を見た。声の主は。
「自分は最強だって大口叩いておいて、なんだよその様は！？」
ライダーのマスターだった間桐慎二だった。
「慎二！？」
士郎が声を上げる。だが慎二は士郎に構わず。
「さっさと立てよ英雄王！早くこいつらを皆殺しにしろよ！！」
ギルガメッシュに文句を言い続ける。
「…雑種…！貴様…」
慎二を睨む。

「な…何だよ？僕はマスターだぞ？お前は僕のサーヴァントなんだぞ！僕の言う事を聞けばいいんだよ！！」
慎二がギルガメッシュに怒鳴る。
「あの…馬鹿！」
凛も慎二を睨む。
「誰だあいつ…？お前のマスターか？」
ギルガメッシュに聞く。
「ふん！仮のマスターだ…」
忌々しげに慎二を見ながら話す。
「ほら！さっさとこいつらを殺せ！最強のお前なら簡単だろ！！」
まだ怒鳴り続ける慎二。
「慎二！もうやめろ！」
「うるさい衛宮！僕は負けない！聖杯を手に入れて魔術師になるんだ！！」
士郎に怒鳴る。
イリヤがバーサーカーと一緒に銀時に近寄る。バーサーカーを拘束していた鎖は消えていた。
「ギントキ。大丈夫？」
「ああ。心配いらねーよ」
そう言ってイリヤの頭を撫でる。
「よかった」
イリヤが笑顔になる。
「うわぁあああ！！！」
慎二の悲鳴が城内に響く。
全員が慎二を見る。慎二の体は横に真っ二つに斬られ、血が吹き出ていた。
「慎二ぃいい！！！」
士郎が慎二の名を叫ぶ。
そして慎二の後ろにいたのは。
「牙蔵！！」

左腕に紅桜を付けた牙蔵が立っていた。
「いやぁ驚いたぜ。まさかギルガメッシュまで倒しちまうとは…」
ギルガメッシュを見ながら牙蔵が語る。
「何だ貴様は…？」
ギルガメッシュが立ち上がる。
「俺か？俺は…」
牙蔵の右腕が黒く変色する。
「聖杯だよ」
直後、牙蔵の黒く変色した右腕が伸びてギルガメッシュを捕まえる。
「何っ！？」
ギルガメッシュが驚く。近くにいた銀時も全員驚いて動きが止まる。
牙蔵がギルガメッシュを引き寄せる。
「ああ。マスターに助けを求めても無駄だぜ。マスターの…ええっと…ああ、言峰は始末しといたから」
「貴様…！！」
ギルガメッシュの体が黒く染まっていく。
「貴様…聖杯と言ったな……どういうことだ…？」
赤い瞳で睨んで牙蔵に聞く。
「簡単なことだ。俺の体に聖杯の破片が入ってるからだ」
「何だと！？」
「何ですって！？」
ギルガメッシュと凛が驚く。
「間桐の娘に聖杯の破片が埋め込まれてるのは知ってるよな？実は臓硯に頼んで間桐の娘にある聖杯の破片を少し俺の体に移植したんだよ。俺の体をちょっといじってな」
笑みを浮かべて牙蔵が語る。ギルガメッシュの体はどんどん黒く染まる。
「俺の破片は蟲じゃないから臓硯が死んでも活動は停止しない」
ギルガメッシュは顔以外すべて黒くなっていた。
「聖杯を喚ぶにはサーヴァントの魂が必要だ。俺の中にはアサシン

の魂しかない。これじゃ足りないんだよ」
笑いながらギルガメッシュを見る。
「ギルガメッシュ。英雄王のお前の魂を手に入れれば聖杯にぐっと近づく」
ギルガメッシュは顔を黒く染められながらも牙蔵を睨み続けた。
「さようなら。英雄王」
ギルガメッシュは完全に黒く染まり、牙蔵の黒い右腕に飲み込まれていった。

第三十九訓：理性は消えても心は消えず（前書き）

桂「イエ～イ！みんな恥ずかしがらずに感想を書こう！イエ～イ！」

作者「桂さん。ノリがウザいです」

第三十九訓：理性は消えても心は消えず

「いやぁさすが英雄王。いい魂をしている」
ギルガメッシュを飲み込んだ牙蔵は満足げにそう言った。
「だが聖杯を喚ぶにはまだ足りない」
そう言って銀時達を見る。

「まぁ全員じゃなくても何人か飲み込めば聖杯は喚べるだろ」
笑みを浮かべて牙蔵が語る。
「貴方の思い通りにはさせません！！」
士郎と凛の前に立ってセイバーが剣を構える。
「面白い…ならまずはセイバーから…」
セイバーの方へ黒い右手を上げる。
「っと見せかけて！！」
牙蔵が叫んだ瞬間、左腕の紅桜の刀身が伸びる。伸びた刀身はセイバーではなく。
「がっ！！」
紅桜の刀身は銀時の腹に突き刺さる。持っていた刀が消える。
「銀時！！」
「ギントキ！！」
凛とイリヤが叫ぶ。
「一番厄介な白夜叉！アンタの魂をいただくぜ！！」
銀時から紅桜を抜く。銀時は傷口をおさえ、口から血を吐いてその場に倒れる。
「バーサーカー！！」

銀時に寄ってイリヤが叫ぶ。
「■■■■■■！！」
イリヤの声に応えてバーサーカーが吠える。
「貴様っ！！」
セイバーが剣を持って走る。セイバーとバーサーカーが牙蔵に迫る。
二人が上段と中段からそれぞれ剣を振る。
だが剣は空を切り、牙蔵は二人の頭上を飛び越える。床に着地して
銀時に向かって走る。
「もらったぜ白夜叉！！」
黒い右手を延ばす。
「ダメーー！！」
イリヤが叫びながら銀時の前に立つ。
「イリヤ！！」
士郎が走るが間に合わない。
黒い右手はイリヤの胸に刺さる。
「ハハッ！なら白夜叉の代わりにお前の中にあるサーヴァントの魂
をいただくぜ！！」
そう言ってイリヤの中からサーヴァントの魂を吸い取る。
「イリヤから離れなさい！！」
凛が宝石を牙蔵に投げる。牙蔵がイリヤから右手を離し、宝石を避
ける。宝石は床に当たって大きな音を立てて爆発する。
「はぁあああ！！！」
セイバーが牙蔵に斬り掛かる。
紅桜で剣を受け止め押し返す。セイバー達から距離を取る。
セイバーとバーサーカーが銀時とイリヤを守るように前に立つ。
「イリヤ！大丈夫か！？」
士郎がイリヤの体を抱える。
「…シロウ…うん、大丈夫だよ…」
士郎に答える。
「安心しろよ。サーヴァントの魂を奪っただけでそいつ自身には何

もしてねーよ」
笑いながら話す牙蔵を士郎が睨む。
「リン！ギントキは？」
「気を失ってるわ。傷も深いし、戻って早く手当てしないと！」
凛が銀時の体を診る。
「けどアイツが俺達を逃がすとは思えない」
牙蔵を睨みながら士郎が言う。
「では私がヤツを食い止めます。その間にみんなは…」
セイバーがそう言うとバーサーカーがセイバーの前に出る。
「バーサーカー？」
セイバーがバーサーカーを見上げる。バーサーカーもセイバーを見る。その目は何かを伝えようとしていた。
「バーサーカー…貴方…！」
バーサーカーの意図に気付いたセイバーは一瞬驚いた。
「■■■■■■■！！！」
バーサーカーが地を揺るがすような咆哮を上げる。そして牙蔵へ向かって走り出す。
セイバーはバーサーカーの背中を見る。
「ご武運を」
そしてセイバーは銀時を背中に背負い、イリヤを腕に抱く。
「シロウ、リン！バーサーカーがヤツを足止めします。今の内に逃げましょう」
「けど…」
士郎はバーサーカーを置いていくことに戸惑ってる。
「行くわよ衛宮君！」
凛が士郎の手を引く。
「遠坂！？」
「今の私達じゃ牙蔵には勝てない！ここは一旦退くわよ！！」
そう言って凛は木刀を拾って走る。全員で城を出る。
「バーサーカー！セイバー離してよ！バーサーカー！！」

セイバーの腕の中でイリヤが暴れる。
セイバーは振り返って城を見た。剣がぶつかる音とバーサーカーの咆哮が聞こえた。
「感謝します。バーサーカー」
そう言って前を向き、士郎達と共に森の中を走った。

第四十訓：やるなと言われるとやりたくなる

アインツベルンの森から抜けて衛宮邸に戻った。銀時は凛の手当てを受けて部屋で寝ている。
みんなは居間に集まっている。
「バーサーカー…消えちゃった…」
泣きそうな顔でイリヤが言った。

「申し訳ありません、イリヤスフィール。ですがあの場にいたら全員やられてました」
セイバーが申し訳なさそうにイリヤに言った。
「とにかく生き残った私達は絶対に牙蔵を倒すわよ」
「ああ。あいつは絶対に許せない」
士郎も頷いた。
「それにしても牙蔵が聖杯の破片を移植してたなんて…桜、心当たりは？」
「そういえば少し前にお爺様に身体を調整すると言われて眠らされたことがあります」
凛の問いに桜が答える。
「多分その時ね」
凛が納得すると。
「けど…聖杯ってあんなに禍々しい物なのか？」
士郎達が見た牙蔵の右腕。聖杯なんて綺麗な物ではなく禍々しい感じだった。みんなで考えているとイリヤが伏せていた顔を上げる。
「『アンリマユ』」

ぽつりとイリヤが言った。
「え？」
みんなの視線がイリヤに集まる。
「『この世全ての悪』。それが聖杯の中身」
「この世全ての悪…？」
士郎がイリヤに聞く。
「前々回…つまり第三次聖杯戦争にアインツベルンが喚び出した喚んではいけないサーヴァント」
全員が黙ってイリヤの話を聞いてる。
「ある村で人間全体の善性の証明するために一人の人間を、この世全ての悪を体現する悪魔『アンリマユ』の名と役割を強制的に背負わせたの」
みんなが黙ってる中、イリヤは話を続ける。
「アンリマユは最弱のサーヴァントだった。だからすぐに敗北して聖杯に取り込まれた。けどアンリマユは周りから身勝手な願いで一人の人間を消して模造された英霊という”願い”その物。アンリマユを取り込んだ際、聖杯という『願望機』はその願いを叶えてしまい、聖杯はアンリマユに汚染されてしまったの」
そこでイリヤは一呼吸おく。
「もう聖杯は願いを叶える願望機じゃない。ただの人殺しの道具よ」
これでイリヤの話は終わった。その場にいる全員が黙ってしまう。
「じゃあ牙蔵の腕が黒くなったのもアンリマユの力？」
沈黙を破ったのは凛だった。
「ええ。そうよ」
イリヤが即答する。
「アンリマユなんて化物と、戦えば戦うほど強くなる紅桜。最悪ね」
凛が険しい表情をする。
「以前タカスギが言っていたことは、こういうことだったのですね」
セイバーが以前高杉が言ったことを思い出していた。
「それでも倒すんだ。それが奴の狙いなら、俺は絶対にそんなこと

させない！」
士郎が力強くそう言った。
「もちろんです。アレは私が求める聖杯ではない」
士郎にセイバーが答える。
「ええ。私の所有地で好き勝手させないわ」
凛も士郎に答える。
「私の中にあったサーヴァントの魂はライダー、ランサー、キャスターの三体。あいつが持ってた魂はアサシン一体。私の中の全部の魂とギルガメッシュとバーサーカーを取り込んだから聖杯を喚ぶには十分な量よ」
イリヤが状況を説明する。
「けど今から行っても疲れきった今の私達じゃ勝つのは無理ね」
「はい。ここは一旦休み、万全の状態で臨むべきです」
凛とセイバーがそう言うと。
「でも、もし牙蔵が先に聖杯を召喚したら？」
士郎がそう言った。
「たぶん大丈夫だよ。シロウ」
「え？」
士郎がイリヤを見る。
「条件が揃ってもすぐに聖杯を喚べるわけじゃないわ。アンリマユが出てくるのも時間が掛かると思うし。それにあいつ魔術師じゃないから、そういうことには手間取ってるんじゃないかな？」
イリヤが士郎にそう言った。確かにそれなら今焦って行くより今日は休んで万全の状態で行くべきだ。
「そうだな。わかった。今日はもう休もう」
「そうしましょう」
そう言ってみんなそれぞれ部屋に入り、眠りについた。

第四十一訓：とりあえずももに蹴り入れとけ

空が真っ黒。
（アレ？何だこれ？空が真っ黒だ…）
何も無い真っ暗闇。
（アレ？何で俺こんな所にいるんだ？）
暗闇に銀髪の男が倒れてる。
（アレ？こんなん前にもなかったっけ？アレ…？）

「目覚めよ坂田銀時」
暗闇に以前、銀時が会った仙人が現れる。
「ん…」
銀時が目を覚ます。眠い目を擦りながら体を起こす。
「あ…あんたは…」
銀時が目の前にいる仙人に気付く。
「久しぶりだな銀時」
仙人が笑う。
「誰だっけ？」
直後、仙人がずっこける。
「貴様〜！私を忘れたか？お前を英霊にしたこの私を？」
銀時を睨みながら立ち上がる。
「ああ。洞爺湖の仙人？」
「違ーう！姿は似ているが違ーう！！」
仙人が唾を飛ばしながら怒鳴る。
「わかったわかった。で？何の用だよ？」

鼻の穴をほじりながら仙人に聞く。
「ぐ…！まぁいい。実は今回はお前に謝りに来たのだ」
銀時の態度に腹を立てながらも我慢して話を始める。
「あ？謝りに？」
銀時が目を細める。
「うむ。実はな…」
仙人が真面目な顔で話す。
「お前まだ死んでないんだ」
仙人がとんでもない事を言った。それを聞いた銀時はポカンとしてる。
「いやスマン。早とちりしてお前を英霊にしちゃったんじゃ。てっきり死んだのかと思って」
顔の前に手をやって仙人が謝る。銀時の額に青筋が浮かぶ。
「ふざけんなテメェエエ！！！」
銀時は仙人の太股を思いっきり蹴った。
「ぐわぁあああ！！」
太股をおさえて仙人が悶える。
「テメッ！ふざけんなよ。んなアホみたいな理由で俺を面倒事に巻き込みやがって！」
仙人をゲシゲシ踏みながら銀時が文句を言う。
「わ…悪かった！だから私はお前を生き返らせに来たんだ！」
踏まれながら仙人が言う。
「生き返らせる？」
銀時が足を止める。
「正確には元の世界に戻すのだ。お前はまだ死んでいないのだからな」
足をおさえながら仙人が立ち上がる。
「…本当に戻せるんだろうな？」
「ああ。本当だ」
仙人が答える。

だが戻れるというのに銀時は浮かない顔をしている。
「どうした？嬉しくないのか？」
仙人が銀時に問う。
「……そりゃ嬉しい話だがよ」
銀時が頭を掻く。
「元の世界に帰るのはもうちっと後で頼むわ」
銀時がそう言うと仙人は目を細める。
「聖杯か？」
「ああ」
仙人がため息を付く。
「やめておけ。アンリマユはお前の手に負える相手ではない」
声を低くして銀時に言う。
「アンリマユ？」
銀時が片眉を上げる。
「聖杯を汚染しているサーヴァントだ。汚染された聖杯は今やただの大量殺戮兵器だ」
仙人の話を聞いてため息を付く。
「なおさら帰れねーよ」
銀時が仙人に背を向ける。
「こっちの世界でも大事なもんができちまったからよ」
そう言って一人の少女が思い浮かぶ。自分を召喚した少女。
仙人がやれやれと顔を横に振る。
「しょうがないやつじゃ。もうよい。好きにするがいい」
仙人も銀時に背を向け歩き出す。銀時も歩き出す。
「坂田銀時」
仙人が銀時の名を呼ぶ。銀時は振り返らずに立ち止まる。
「お前がもし全てを終わらせたら、元の世界へ帰すのとは別に、一つお前の願いを叶えてやる」
背を向けて銀時に語る。
「だから…死ぬんじゃないぞ」

そう言って仙人は歩き出す。銀時も何も答えず歩き出す。

第四十二訓：誰にでも辛い過去はある

夢を見た。
たった一人になりながらも戦い続けた少女の夢を。
夢の最後に見たもの。ぼんやりとしてよくわからない。
それは鞘に見えた。

朝になり衛宮士郎は目を覚ます。
（何だったんだあの夢？）
体を起こす。布団を畳んで居間に向かった。
しばらくして凛とセイバーと桜とイリヤが起きてきた。銀時は部屋でまだ寝ているようだ。
もうすぐ朝食なので銀時を起こすことにした。
「では私が行きます」
と言ってセイバーが銀時を起こしに行った。部屋に行く途中の縁側でセイバーは足を止めた。縁側に銀時が座っていた。
「ギントキ」
セイバーが銀時を呼ぶ。
「おお。セイバーか」
銀時もセイバーに気付く。
「もうすぐ朝食ですよ」
「ああ」
だが銀時はそこから動こうとしなかった。
セイバーが銀時の隣に座る。
「ギントキ。私にはやり直したい過去がありました」

銀時の隣でセイバーが話し始める。
「私は王でした。国のために身を捧げましたが国を護ることができなかった」
銀時は黙ってセイバーの話を聞いてる。
「その時に私は思ったのです。私は王にふさわしい器ではないと」
朝の冷たい風が二人に当たる。
「だから私は聖杯で新たに王の選定をやり直そうと考えたのです」
そこでセイバーは表情を険しくする。
「ですが…果たしてそれで良いのかと最近悩んでいるのです」
「何で悩んでんだ？」
銀時がセイバーに聞く。
そこでセイバーは黙ってしまう。銀時がう～んと考える。そしてこう言った。
「”人の一生は重き荷を負うて遠き道を往くが如し”」
セイバーが銀時の顔を見る。
「昔なぁ、徳川田信秀というオッサンが言った言葉でな…」
「あの…それは徳川家康では？」
セイバーがそう言うと銀時は”何で知ってるんだよ！？”と言いたげな目でセイバーを睨んだ。だがすぐに気を取り直す。
「最初は何を辛気くせーことをなんて思ったけどよ、年寄りの言うことはバカにできねーな…」
遠い目をして銀時が語る。
「人はよ。誰でも両手に大事に何か抱えてるもんだ。だが、かついでる時には気付かねぇ…」
今度はセイバーが銀時の話を黙って聞いてる。
「その重さに気付くのは全部手元からすべり落ちた時だ。その時、俺はもうこんなもん持たねぇと思った…」
かつての戦い譲夷戦争を思い出しながら語る。仲間をたくさん失ったあの忌まわしい記憶を思い出しながら。
「なのに…」

そこで銀時はフッと短く笑う。
「またいつの間にか背負いこんでた」
いつも自分にツッコミを入れる眼鏡。
大食らいのチャイナ娘。
そして自分を召喚した魔術師。
「いっそ捨てちまえば楽になると思ったけどよ、どーにもそーゆう気になれなくてな」
そこで銀時はセイバーの顔を見る。
「あいつらがいねーと、歩いててもあんまり面白くなくなっちまってよぉ」
仲間の顔を思い出して笑いながらセイバーに言った。
「それによぉ」
「！」
顔を前に向けて銀時が続きを話す。
「落としちまったもんの事も忘れちゃいけねぇ」
その言葉にセイバーがハッとなる。
「確かにお前にとっちゃ辛い過去だったかもしれねぇ。だがその辛さや失ったもんを忘れるようなことはしちゃいけねぇよ」
セイバーは思い出した。銀時も辛い過去を背負って生きてきたことを。以前銀時が自分は英雄なんて綺麗なものではないと言ったことを。
「…忘れてはいけない過去」
セイバーが前を見る。そして静かに目を閉じる。風は止み、静かに時間だけが過ぎていく。
セイバーがゆっくりと目を開ける。
「やっと答が出ました」
「ん？」
セイバーを見る。
「もう私に聖杯は必要ない」
ハッキリとセイバーはそう言った。そして銀時の顔を見る。

「ありがとう。ギントキ。貴方のおかげで目が覚めました」
笑顔でそう言った。
「俺ぁ何にもしてねぇよ」
銀時は笑ってそう言った。
「銀時〜！セイバー！」
凛が声を上げながら縁側に来る。
「なにやってるのよ？もう朝食できてるわよ」
「はい。行きましょうギントキ」
「ああ」
立ち上がって三人は居間に向かった。
決戦の時は迫っていた。

第四十三訓：決戦の地へ（前書き）

桂「いよいよ決戦の地だ！俺も天竺に行かねば！」

作者「天竺ないから」

第四十三訓：決戦の地へ

銀時達は衛宮邸の玄関の戸を開ける。イリヤと桜は家で留守番することなった。
銀時達が玄関の前に立つ。士郎が振り返って家を見る。
「行ってくるよ。オヤジ」

聖杯召喚の地である柳洞寺。その柳洞寺の石段の前にいた。
ここでこの世全ての悪が生まれようとしてる。絶対にそれは阻止しなければならない。
「階段から外れた横穴だったわね。行きましょう」
凛が先頭に立って歩く。銀時達もそれに続く。しばらく歩いて横穴を見つけ中に入る。暗い穴の中を進んでいく。進んでいく度に胸騒ぎが強くなる。穴の奥からの嫌な感じが強くなる。
だが立ち止まらない。それぞれの護りたいモノを護るために。
そして広い空間に出た。東京ドームよりも広くて天井は、はるか高くにあった。
その中央に祭壇らしき物があり、その上にソレはあった。
まるで繭のような黒い塊。この世全ての悪『アンリマユ』が入っている繭。
その繭の前にソイツはいた。右半身を黒く染め、左腕に紅桜を付けた牙蔵が立っていた。
「来たか。白夜叉」
牙蔵は銀時を見てそう言った。
「来てやったぜ。お前とソイツをブッた斬りにな」

牙蔵と後ろの繭を見て言った。銀時の言葉を聞いて牙蔵は笑った。
「ククク。わざわざ殺されに来たか」
そう言って左腕の紅桜を構える。
「もうすぐだ。もうすぐアンリマユが生まれる」
舌を出して紅桜の刃を舐める。
銀時とセイバーが前に出てそれぞれ剣を構える。銀時は木刀『洞爺湖』。セイバーは聖剣『エクスカリバー』。
「何だ白夜叉？あの刀は使わないのか？ギルガメッシュを倒し、以前紅桜を斬ったあの刀を」
不敵に笑って銀時に聞く。
「コイツが一番しっくりくるんだよ」
銀時も不敵に笑ってそう返す。
「銀時。アンリマユがいつ出るかわからないから、一気に攻めるわよ！」
後ろで凛が腕の魔術刻印を光らせ、手に宝石を持って構える。
「一気に終わらせる気か？クハハハハハ！！」
牙蔵が高らかに笑う。牙蔵の笑い声が大洞窟に響く。
「アンリマユの力と紅桜を持ったこの俺を簡単に倒せると思ってんのか？」
殺気のこもった目で銀時達を睨む。
「簡単に倒すのは無理だが、テメーは絶対に倒すぜ」
銀時も鋭い目をして返す。
「ククク。面白い！面白いぜ白夜叉！！」
牙蔵が口元を歪める。
そしてボゴン、と音を立てて牙蔵の黒い右腕が膨らむ。
「！！」
全員が同様する。
「果たしてお前達は…強化した紅桜とアンリマユの力を得た俺の力にどれだけ耐えられるかな？」
牙蔵の右腕がメキメキと音を立てて強化する。

「気をつけてくださいギントキ。奴の魔力がどんどん高まっています！」
「ああ。わかってるよ」
魔力は感じなくとも牙蔵から発せられる凄まじい殺気で銀時も気を引き締める。
「行くぜセイバー！」
「はい、ギントキ！」
そう言った直後、二人は同時に地を蹴った。
「こいつで終わりだぜ牙蔵ぉおおお！！！」
銀時の声が大洞窟に響いた。
アンリマユと紅桜を身につけた牙蔵との決戦が始まった。

第四十四訓：二対一って卑怯みたいだけど相手は怪物なんだからいいじゃないか

桂「いよいよ牙蔵との対決だ！！」

第四十四訓：二対一って卑怯みたいだけど相手は怪物なんだからいいじゃないか

「うぉおお！！！」
「はぁあああ！！！」
銀時とセイバーが気合いと共に牙蔵に斬りかかった。

牙蔵の左側に銀時が斬り掛かり、右側にセイバーが斬り掛かる。
それを牙蔵は木刀を紅桜で止め、エクスカリバーを黒い手で止める。
「かあっ！！」
牙蔵が二人を弾き飛ばす。
そして牙蔵の右手から黒い触手のような物が現れる。触手が銀時とセイバーに襲い掛かる。蛇のように襲い掛かる黒い触手を剣で斬り、かわしながら防ぐ。
「銀時、後ろ！！」
凛の声で後ろを見て、咄嗟に体を沈める。直後、銀時の頭上を紅桜の伸びた刀身が掠める。
「サンキュー凛！」
凛に礼を言って体勢を立て直す。
触手はいくら斬ってもすぐに牙蔵の手から新たな触手が生えて襲ってくる。しかも触手ばかりに気を取られていると、先ほどのように紅桜で狙われてしまう。
「このままではキリがありません！」
触手に苦戦するセイバー。
「銀時！セイバー！私が宝石弾で触手を狙うから二人はその隙に牙蔵に近づいて！」

「わかりました！」
そして銀時とセイバーが走り出す。
黒い触手が二人に襲い掛かる。凛が後ろから赤い閃光を放つ。閃光が当たった触手は燃え尽きる。凛の援護射撃によって二人の負担は減り、自分達も触手を斬りながら前に進む。
「ギントキ！私が触手の相手をします！貴方は牙蔵本体を！」
「おう！」
セイバーが触手を引き受けて銀時は牙蔵に迫る。
「この前の続きといこうぜ白夜叉！！」
牙蔵が紅桜を構える。
「うぉおおお！！！」
上段から牙蔵に斬り掛かる。牙蔵は紅桜でそれを受け止め、軽く木刀を弾くと横薙ぎの一撃を放つ。銀時はそれを木刀で防ぐ。
「ぐぅ…！！」
力負けして後ろに押される。牙蔵が紅桜を引くと素早く左右から目にも止まらぬ猛攻を仕掛ける。戦況は銀時の防戦一方となる。
「銀時！」
凛が銀時の名を叫ぶ。
（この紅桜…前より強くなってやがる！！）
なんとか紅桜の猛攻を木刀で防ぎ続ける。
「クハハハハ！この前の戦いのデータはしっかりとって向上してんだよ！！」
笑いながらも牙蔵は猛攻の手を緩めない。
「聖杯の器となった人間はサーヴァントの魂を取り込むたびに人間としての機能が失われていくんじゃなかったのか！？」
牙蔵の動きを見て士郎が疑問を口にする。
「たぶん紅桜が牙蔵の体に伝達指令を出して動かしてるのよ！だから今、体の動きを実質支配してるのは紅桜よ！」
凛が自分の考えを話す。
紅桜のスピードとパワーに銀時が押される。

「はあっ！！」
セイバーが自身に迫る触手を斬る。
「このっ！！」
凛も宝石で援護する。セイバーが一気に牙蔵に近づく。
ザンッ、とセイバーの剣が牙蔵の右腕を斬り落とす。
（よしっ！残るは左の紅桜！）
セイバーが銀時に加勢しようとした時。
「離れろセイバー！！」
士郎の叫び声が聞こえた。士郎の声を聞いて咄嗟に後ろに跳ぶ。さっきセイバーがいた所に太い黒い触手が刺さる。
「なっ！？」
見ると地面に落ちていた右腕が牙蔵の体にくっついて再生していた。
再び触手がセイバーに襲い掛かる。
銀時は未だ紅桜に防戦一方だった。
（少し強くいくぞ！）
牙蔵の口元が歪む。紅桜が紫色に光る。
「！！」
危険を感じた銀時が間合いを広げる。次の瞬間、牙蔵が紅桜を上段から思いっきり振り下ろす。振り下ろされた紅桜は地面を深く切り裂いた。
「ちっ！本物のバケモンだぜ！！」
銀時はすぐに牙蔵に突進する。
「があっ！！」
気合いと共に牙蔵が紅桜を横薙ぎに振る。その時に生じた風圧で銀時とセイバーが吹き飛ぶ。
また銀時達と牙蔵の距離が離れる。
「大丈夫ですかギントキ！？」
「まぁな。だがまだ一太刀も浴びせてねぇ」
額の汗を拭きながらセイバーに答える。
「ハハハハハ！最高だぜ！あの白夜叉が手も足も出ない！！」

高らかに牙蔵が笑う。
「このアンリマユを使って江戸を火の海に…いや…江戸を、全てを無に帰す！！」
アンリマユを使って江戸を滅ぼす。それが今回の鬼兵隊の、高杉の目的。
「そのようなことはさせません！」
セイバーが剣を構える。
「俺の大事なもんをてめぇ如きに壊されてたまるかよ」

第四十五訓：物の扱いには気をつけろ（前書き）

桂「強大な力を得た牙蔵に果たして銀時達は勝てるのか！？」

第四十五訓：物の扱いには気をつけろ

柳洞寺の地下大洞窟。
牙蔵との戦いは続いていた。

「うぉおおお！！」
叫びながら銀時は牙蔵に斬り掛かる。上下左右から繰り出される雲の如き変化する太刀筋。だが紅桜はその太刀筋をとらえていた。前回の銀時との戦闘データに加えバーサーカーとの戦闘データで紅桜の能力は大幅に向上していた。
セイバーは触手と戦っていた。斬ってもすぐに次から次へと襲い掛かる触手に苦戦していた。
（このままでは、こちらの魔力が消耗される一方！）
なんとか突破口を開こうと必死になる。
（今、宝具を使っても避けられるか防がれてしまう！無駄に撃つことは許されない！）
触手を斬りながら必死に思案する。
その時、牙蔵の右腕が三倍くらい大きくなる。そして大きくした右腕を振り上げ、セイバー目掛けて思いっきり振り下ろす。
「くっ！！」
セイバーが後ろに跳ぶ。跳んだ後に拳が地面を粉々にしてヘコませる。

＊

銀時は紅桜におされていた。致命傷ではないが体中に切り傷がある。
「どうした白夜叉？もう終わりか？」
牙蔵は余裕の笑みを浮かべている。
銀時は切り傷から血を流し、肩で息をしている。ぺっと口から血を吐き捨てる。
「調子に乗るなよ」
「！」
銀時の言葉に牙蔵が目を細める。
「来いよ。てめぇの頭カチ割ってやる」
銀時は鋭い目で牙蔵を睨んだ。その目は白夜叉の目だった。
「ぶっ潰してやるぜ！！」
牙蔵が紅桜を振る。銀時も木刀を振る。二人の激しい攻防が始まる。
剣がぶつかる度に火花が散る。
「ぐ…！」
牙蔵が苦い顔をする。
一見、牙蔵が圧倒してるように見える。だが牙蔵の攻撃は全て防がれている。
（これは…英雄王の時と一緒だ！白夜叉の動きが格段に良くなった！！）
牙蔵は内心少し焦っていた。その時。
ピッ。
牙蔵の左頬を何かが掠った。掠ったところから血が出る。銀時の木刀が牙蔵の左頬に掠ったのだ。
（俺に攻撃を当てた！？）
銀時の攻撃が当たり動揺する。
その動揺を見逃さず、銀時が攻勢に出る。大洞窟に木刀と紅桜がぶつかる音が響く。
「もう少しなんだ！もう少しでアンリマユが出てくるんだよ！」
自分の思い通りにならなくて牙蔵が怒る。

「邪魔だ！邪魔なんだよお前！！」
怒りに任せて紅桜を振る。
「消えろォオ！白夜叉ァアアア！！！！！」
牙蔵が激怒して叫ぶ。
紅桜を振る度に強い風圧が起こる。地面が砕けて割れる。そんな剣撃の嵐の中、銀時はいた。
―思い出せ―
剣の嵐をかわし続ける。
―忌まわしき記憶を―
紅桜の攻撃を木刀で捌く。
―生き残るために―
傷口から血が出る。
―護るために―
止まることの無い紅桜の攻撃。
―魂を狩る夜叉となれ―
銀時が牙蔵の懐に入る。体勢を低くし、居合いの構えをとる。
牙蔵が反応する前に斬撃を放つ。放たれた斬撃は牙蔵の左腕と紅桜の付け根を斬った。
だが完全には斬れず、数本のコードが牙蔵の左腕に繋がってる。
（浅かったか！！）
一旦、牙蔵から離れる。
セイバーも銀時の隣に移動する。牙蔵は斬られた所をおさえてる。
「ギントキ！今がチャンスです！一気に倒しましょう！」
「おお」
銀時達が一気に攻めようとした時。
「がぁあああ！！！」
牙蔵が悲鳴を上げる。
「！？」
びっくりして牙蔵の様子を見る。
「か…体が…！が……」

牙蔵が苦しむ。
「ぐ…」
口から涎を垂らし、冷汗を流して苦しむ。
「ぐぁあああ！！！」
先ほどよりも大きな悲鳴を上げる。
牙蔵の体が変異する。右半身は更に黒く染まり、左半身は紅桜のコードで完全に覆われてしまう。
「これは…！？」
セイバーが驚いて声を出す。
「暴走！？」
凛も驚く。
「暴走だって？」
士郎が凛に聞く。
「やっぱり普通の人間で聖杯を制御するには無理があったのよ！それに紅桜も使い続ければ使用者を侵食するって銀時が言ってたわ！」
自分の考えと銀時から教えられた事を言った。
「ちっ。メンドくせーことになっちまったぜ…」
銀時が木刀を構え直す。
「コォオオオ」
牙蔵の黒く、コードが絡まった顔を上げる。
「きますよギントキ！」
「ああ」
牙蔵が紅桜を上にあげる。
「アアアア！！！」
一気に振り下ろす。紅桜は地面を大きく割り、離れた銀時達まで斬撃が届く。
「うぁあああ！！」
「ぐぁあああ！！」
牙蔵の斬撃で二人が吹き飛ぶ。
「銀時！！」

「セイバー！！」
二人が叫ぶ。
銀時が体を起こす。
「こいつぁヤベーな…」
頭から血を流しながら銀時が立ち上がった。

第四十六訓：奇跡はあきらめない人間が起こすんだ（前書き）

桂「信じていれば、必ず夢は叶う」　　作者「何言ってるんですか？ヅラさん」　　桂「ヅラじゃない桂だ！」

第四十六訓：奇跡はあきらめない人間が起こすんだ

セイバーが立ち上がる。
「セイバー。大丈夫か？」
「あまり良いとは言えません」
二人の前には二つの暴走した力の融合体が不気味に立っていた。

「セイバー。宝具使えるか？」
「魔力に限界があるので一発しか撃てません」
悔しそうな表情でセイバーが答える。
「一発か…景気良く二、三発撃てないの？」
こんな時でも銀時は軽口を言う。
「撃てるわけないでしょう」
セイバーが少し怒った声で言う。
「ゴォオオオ！！！」
突然、牙蔵が吠える。
「来るぞ、セイバー」
「はい！」
二人とも剣を構える。
牙蔵が二人に向かって突進する。

＊

（俺は何もできないのか？）
みんなの戦いを見てて士郎は思った。

（俺は見てることしかできないのか？）
血が出るくらいに拳を強く握る。
（俺もみんなを護りたい！）

＊

今、銀時とセイバーは暴走した牙蔵と戦っている。先ほどよりも速く、重い斬撃。銀時が牙蔵から離れる。牙蔵が離れる銀時に紅桜を振る。刀身を伸ばしてない紅桜では届かないが、銀時は自身に迫る殺気を感じて体を反らした。
直後、銀時の頬を見えない何かが掠めた。後ろの壁に音を立てて斬撃の跡が残る。
「おいおい…マジかよ？」
冷汗を流して顔を引きつらせる。
右腕も触手ではなく右腕自体が伸びてセイバーに襲い掛かる。跳んで腕をかわす。
「はぁあああ！！！」
腕に剣を振り下ろす。だが鈍い音を立てて弾かれてしまう。
「くっ！！」
銀時もセイバーも防戦一方だった。
（なんとか宝具を使う隙を作らねば…！）
攻撃をかわしながら隙をうかがう。
ここで牙蔵が赤く光る目を銀時とセイバー以外に向ける。
「！！」
牙蔵の視線の先を見る。
視線の先には凛と士郎がいた。牙蔵の攻撃の矛先が凛達に変わり、紅桜の刀身を伸ばす。
「凛！！」
銀時が走り出すが間に合わない。
すると士郎が凛の前に出る。そして手を前に出す。

（俺もみんなを護る！）
思い浮かべるのは夢で見たあの鞘。
その姿をハッキリ思い浮かべる。
紅桜の刀身が迫る。
「トレース・オン（投影、開始）！！」
士郎が呪文を唱えた時。
奇跡が起きた。
二人に迫った紅桜が弾かれた。
「！？！」
表情はわからないが牙蔵が驚いている。
「え？」
投影した本人の士郎も驚いている。
『投影魔術』とは、イメージを元に魔力で一時的に物体を作り出す魔術である。
そして士郎が投影した物は。
「私の…鞘？」
セイバー：アルトリア・アーサー王の失われた鞘。全て遠き理想郷『アヴァロン』。あらゆる物理攻撃、魔術を無効にする宝具。
「やるじゃねーか士郎」
そして銀時は動いた。
セイバーもすぐに牙蔵に向き直り、剣を構える。士郎の投影魔術に驚いて出来た隙を二人は逃さない。
「エクス―」
セイバーが宝具の真名を解放する。
「カリバー！！！！！」
振り下ろされた剣から光の刃が放たれる。
「！！」
牙蔵がエクスカリバーに気付くが、もう遅い。エクスカリバーの光に牙蔵は飲み込まれた。
だが、牙蔵は倒れない。エクスカリバーを紅桜で辛うじて防ぎ、セ

イバーに襲い掛かろうとした時。
「うぉおおお！！」
坂田銀時が目の前に迫っていた。
銀時は牙蔵の頭に向かって渾身の突きを放つ。
牙蔵は紅桜を頭の前に出して防御する。紅桜に銀時の木刀が当たった。
「貫けェエエ！！！！」
腕に更に力を込める。
紅桜にヒビが生じる。そのままヒビは広まり。
パキィイイン。
セイバーのエクスカリバーと銀時の突きに耐えられず、紅桜は音を立てて粉々に砕け散った。
そして木刀はそのまま牙蔵の頭に直撃した。
砕けた紅桜が音を立てて地面に落ち、頭を木刀で突かれた牙蔵も地面に倒れた。コードは解け、牙蔵は白目を向き、口から涎を垂らして倒れていた。
銀時は倒れた牙蔵を見つめていた。

第四十七訓　ラスボスを倒したと思ったらまだ次のボスがいた（前書き）

桂「何っ！？牙蔵を倒して終わりではないのか！？」

第四十七訓　ラスボスを倒したと思ったらまだ次のボスがいた

「終わった…のか…？」
士郎が呆然としてる。
「いいえ。まだですシロウ」
そう言ってセイバーは黒い繭を見る。
「アレを破壊しなければ終わらない」

「ちょっと衛宮君！さっきのアレ何だったのよ？」
凛が士郎に聞く。
「え？何って投影魔術だけど？」
戸惑いながら凛にそう答える。
「投影魔術が出来るなんて私、聞いてないわよ？」
凛が士郎を思いっきり睨む。
「わ…悪い遠坂。普段は強化ばっかりやってたから…」
「はぁ…もういいわよ」
ため息を付いて凛は肩の力を抜かす。
「ではシロウ。私はアレを破壊してきます」
「ああ。頼むセイバー」
黒い繭に向かって歩き始めるセイバー。途中でその足を止めて、士郎に振り返る。
「シロウ。貴方は私の鞘だったのですね」
優しい笑顔で士郎にそう言った。
「え？」
士郎はセイバーの言った意味がわからず呆然としてた。

「大丈夫、銀時！？」
凛が銀時に駆け寄る。
「ああ。なんとかな」
「よかった…」
銀時が無事でホッとする。
「なぁ凛。この傷なんとか治せねーか？痛くてしょうがねーんだ」
傷を指差しながらそう言う。
「はいはい。全く、宝石いっぱい使って赤字だわ。見返りはきっちり貰うんだから」
ブツブツ言いながら凛は宝石を取り出す。
ピシッ。
音が鳴った。
嫌な音。
何かがヒビ割れる音。
凛と銀時が音の鳴った方を見る。士郎も見た。セイバーも。
黒い繭に亀裂が出来ている。
ビシッビシッ。
音を立てながら亀裂が広がっていく。
「ま…かさ…」
士郎が口を開いた。
顔だけでなく全身にドッと嫌な汗が出た。今まで以上の寒気を感じた。
「逃げろ！！」
銀時が声を上げた。それで全員が我に帰る。
「凛！お前の宝石を全部、俺にくれ！」
「えっ！？でも…」
凛が戸惑う。
「いいから早くしろ！！」
焦ったように銀時が怒鳴る。
「…わ…わかったわよ！」

そう言って凛は自分が持ってる宝石を全部、銀時に渡した。
黒い繭の亀裂はどんどん広がっていく。
「こっからは俺一人でいい」
「えっ！？」
銀時以外の全員が驚く。
「無理ですギントキ！いくら貴方でもアレに一人で戦うなど…！」
銀時に駆け寄ってセイバーが言う。アレの魔力は尋常じゃない。サーヴァントが七人束になってかかっても勝てるかどうか。
「セイバー。お前は凛と士郎を頼む」
「ギントキ！！」
銀時の着物を掴んでセイバーが怒鳴る。
バキャアアア。
ガラスを砕くような音がして黒い繭に穴が開く。穴の中から灰色の腕が現れる。
全員が黒い繭を見る。
「ほら。モタモタしてたら野郎が出てきちまうぞ」
「ダメだ！銀さんが残るなら俺達も残る！！」
士郎も銀時に食い下がる。
「遠坂！お前も何か言ってくれ！」
士郎が凛を見る。
凛はじっと銀時を見てる。
「凛」
凛を見ながら銀時が言った。
「あとで必ず戻るからよ」
笑って銀時はそう言った。
凛は銀時を見つめていた。そして顔を下げる。
「…わかったわ」
小さな声で凛が言った。
「遠坂！？」
士郎が驚く。

「リン！正気ですか！？」
セイバーも驚く。
「銀時」
「！」
凛が伏せていた顔を上げて自分の腕にある令呪を見せる。
「最初で最後の令呪よ」
凛が銀時を見る。
「必ず生きて帰ってきなさい！」
腕の令呪が光り、模様の一つが欠ける。
「たくっ」
銀時が頭を掻く。
「んなことしねーでも約束は守るぜ」
その時。
バガァァァァ。
大きな音を立てて黒い繭が砕ける。
全員が黒い繭があった所を見る。
黒い繭の破片が地面に落ちる。黒い繭があった場所の中心に人影のようなものが見える。
「礼を…言う…ぞ…」
ソイツは喋った。
「やっと…我(われ)は…この世に…復活…した」
最悪のサーヴァント。この世全ての悪『アンリマユ』が解き放たれた。

第四十八訓：結局魔王の復活は阻止できない（前書き）

桂「どうやらこの小説のアンリマユは『Ｆａｔｅ』のアンリマユとは違うみたいだな」

第四十八訓：結局魔王の復活は阻止できない

ソイツは全身が灰色でバーサーカーに勝るとも劣らない屈強な肉体をして、頭の左右に角を生やしたデーモンのような姿だった。

「あれが…アンリマユ…」
最初に声を出したのは凛だった。
「本当にアレが…最弱のサーヴァントだったのか…？」
士郎がそう言った。
アンリマユから感じる膨大な魔力。サーヴァント一体の魔力量など軽く上回る魔力。
「戦いに…敗れた…我は…聖杯と一体化し…膨大な魔力を…手に入れた…」
アンリマユが口を開く。
「この力で…我は…世界を滅ぼす」
アンリマユの重い声が大洞窟に響く。
「だが…その前…に…」
アンリマユがある人物を見る。
「お前を…消す」
アンリマユの視線の先にいた人物。坂田銀時に言った。
銀時はじっとアンリマユを見てる。
「お前は…今回の聖杯戦争の中でも…規格外のサーヴァント…我の障害に…なるやもしれん……」
紅い目で銀時を見ながらアンリマユが語る。
「だから…ここで…消す！！」

アンリマユの声と共に地面に亀裂が走る。亀裂から炎が出てくる。
「地面から炎が！？」
セイバーが剣を構える。
「アイツ、マグマを操れるのか！？」
アンリマユを見て士郎が声を上げる。
「離れろ！！」
銀時の声を聞き、セイバーが士郎と凛を抱いて後ろに飛ぶ。
亀裂がアンリマユと銀時を囲むように走り、地面が裂ける。地面の裂け目に牙蔵が落ちる。牙蔵はマグマの中に消えていった。
「こんな…ことまで…！？」
士郎が驚愕する。
「ギントキ！」
セイバーの声に銀時が振り返る。
「必ず戻ってきてください！」
セイバーの言葉を聞いて短くフッと笑う。
「へいへい」
セイバーにそう言って前を向こうとすると。
「銀時！」
今度は凛が銀時を呼んだ。
「何だ？」
凛に振り返る。
「絶対戻ってきなさいよ！私…」
拳を強く握る。
「私まだアンタに伝えてないことがあるんだから！！」
顔を真っ赤にして銀時に向かってそう言った。
それを聞いて銀時は前を向く。
「侍は果たせない約束はしねぇよ」
そう言った直後、地面の裂け目から炎が上がり、銀時の姿は見えなくなった。
「炎の壁！？」

炎の壁は銀時とアンリマユを囲んだ裂け目から出ている。
「ギントキを逃がさないためと、私達の加勢を防ぐためでしょう。炎からヤツの魔力を感じます」
炎の壁を見ながらセイバーが説明する。
「つまりアンリマユの結界か？」
「そうです」
凛は右手を胸の前に置いて炎の壁をじっと見ていた。
「負けたら…許さないんだから」

＊

炎の壁の中。
銀時はアンリマユと対峙していた。
「これで…お前は…逃げられない…」
アンリマユが喋る。
「お前が生き残る…方法は一つ…我を倒すしか…方法はない…」
銀時はアンリマユには何も言わず、凛から受け取った魔力のこもった宝石を全て飲み込もうとする。
「苦っ！」
涙目になって苦しんだが銀時は宝石を一気に飲み込んだ。銀時の体に魔力が漲り、体中の傷が治る。
「へっ。元から逃げるつもりなんてねーよ」
銀時は腰から『洞爺湖』を抜く。
「我に…勝つつもりか…？」
アンリマユは両手に魔力を溜める。
「決まってんだろ」
そして左手が光り、ギルガメッシュを斬った刀『名も無き名刀』が現れる。
「テメーの居場所はここじゃねぇ」
両手に剣を握り、アンリマユを鋭い目で睨む。

「この世全ての悪は、闇の世界に帰りやがれぇえええ！！！」
銀時がアンリマユに向かって走り出す。
銀時ＶＳアンリマユ。
未来を賭けた最終決戦が始まる。

第四十九訓：悪人は力を自慢したがる（前書き）

桂「いよいよ最後の決戦！銀時ＶＳアンリマユの始まりだ！！」

第四十九訓：悪人は力を自慢したがる

誰も知らない闘い。
地下大洞窟で始まる最終決戦。
最後に立っているのは銀時か？アンリマユか？

「おおおお！！」
叫びながら銀時は右手の木刀をアンリマユの頭目掛けて上段から振り下ろす。
それをアンリマユは左手の人差し指一本で止めてしまう。
「な…！？」
一瞬驚いた銀時だが、すぐ左手の刀で横薙ぎの一撃を放つ。
しかしそれもアンリマユの右手で止められてしまう。
「弱い…遅い…」
アンリマユが銀時の頭に頭突きをする。
ゴッ。
鈍い音を立てて銀時の頭から血が出る。
「ぐあっ！！」
頭をおさえる。
「吹き飛べ…」
直後、アンリマユが銀時の腹目掛けて拳を繰り出す。銀時は後ろに吹っ飛んでしまう。
「がはっ！！」
地面に倒れ、口から血を吐く。
アンリマユはじっと銀時を見て立っている。

「ふむ…やるな…」
自らの拳を見る。
「咄嗟に…木刀と真剣で…我の一撃を防いだか…」
銀時が立ち上がる。
（防御した上からでもこの衝撃…！しかも最初の頭突きで頭がクラクラしやがる…！）
頭をおさえながら体がフラフラする。
「どうした…？もう…終わりか？」
「…んなわけねーだろ。こっからが本番だぜ！」
地を蹴ってアンリマユとの距離を縮める。
「てぇあああ！！」
気合いと共に横薙ぎに木刀を振る。それをアンリマユは跳んで避け、口を開いて魔力を溜める。危険を察して銀時は後ろに跳び、アンリマユの口から黒い魔力の塊が発射される。さっき銀時のいた場所に当たり大爆発を起こす。爆風で銀時はさらに後ろに飛ばされる。地面を見ると、底が見えない丸い穴が出来ていた。
銀時はアンリマユの気配を察して横に跳び、アンリマユが拳を振り下ろし、地面は粉々に砕けて大きなへコみができる。
次から次へと繰り出されるアンリマユの猛攻を銀時は避け続ける。
（ふざけやがって！！）
紙一重でアンリマユの猛攻をかわす。
（直撃したら体ごと魂を押し潰す一撃！）
アンリマユが手のひらからガントのような黒い塊を飛ばす。
（こいつが聖杯を得たアンリマユの力ってわけかい！！）
黒い塊を避ける銀時。
アンリマユが手を高らかに上げる。手の上に巨大な黒い魔力の塊を作り上げる。
「ムンッ！」
銀時目掛けて魔力球を投げる。
銀時は体を屈めながら跳ぶ。魔力球が地面とぶつかり爆発する。

「ぐあっ！！」
銀時が地面に倒れる。砂埃が消える。銀時が顔を上げる。
「ハッハッハッハッ！」
アンリマユが笑いながら銀時に近づく。
「…何が可笑しい？」
アンリマユを睨む。
「なに…手加減するのも…難しいと…思ってな…」
「手加減…だと？」
銀時が体を起こす。
「聖杯の力が…それだけ強大ということだ…」
笑いながらアンリマユが話す。
（冗談じゃねーぜ！これで手加減って…本気でやったらどうなっちまうんだ！？）
銀時が立ち上がる。
「まだ戦うか……ゴミめ…」
「うぉおお！！」
アンリマユに向かって走る。
木刀と真剣の連撃をアンリマユに繰り出す。だがアンリマユに全て防がれる。
「るぉおお！！！」
更に力を込めて攻撃する。だがアンリマユには通用しない。
「粘る…な…」
アンリマユが口を開く。銀時は攻撃を続ける。
「だが…やはり圧倒的だな…」
アンリマユが右拳を握る。
「力の差が！」
次の瞬間、銀時の腹にアンリマユの拳が入る。
「が…っ！！」
モロにアンリマユの攻撃を受けて骨が砕け、内蔵もいくつか痛める。
アンリマユが左の手のひらに魔力を溜める。

「終わり…だ！」
左手を銀時の前に出し、手のひらから黒い魔力の塊を放つ。
黒い魔力の中に銀時が飲み込まれる。

第五十訓：みんな強さを求めてる（前書き）

桂「銀時ぃいいい！！」

第五十訓：みんな強さを求めてる

「終わり…だ！」
黒い魔力波。
アンリマユから絶望の一撃が放たれる。

アンリマユが魔力波を放った後、砂埃が立つ。
「……まだ…やるか…」
アンリマユが後ろを向く。
「ザコが…」
銀時が頭から血を流し、着物をボロボロにしてアンリマユに迫る。
木刀をアンリマユの頭目掛けて振る。
「笑わせる…」
左人差し指で軽く木刀を止める。
「ろくに力も残ってないクズが…！」
銀時の首目掛けて右手の手刀を放つ。銀時は左の刀で手刀を防ぐが、力負けして後方に吹き飛んでしまう。そのまま地面に倒れる。
「ぐ…！」
腕に力を入れて必死に体を起こす。
「よく我の…魔力波の直撃を避けたな…褒めてやる」
ボロボロの体で銀時が立ち上がる。
「だが…ザコがどう頑張ろうと…ザコはザコだ…」
銀時の姿を見て笑いながら言う。
「力の無い者は…敗れ去るのみ」
銀時は肩で息をしてじっとアンリマユを見てる。

「かつて…我もそうだった」
アンリマユが顔を上にあげる。
「我は…最弱のサーヴァントだった…弱かった我はすぐに闘いに敗れ…聖杯に取り込まれた」
アンリマユが以前参加した聖杯戦争を思い出して語る。
「だが我は…聖杯を汚染し一体化した…そして我は変わった！」
右手を高らかに上げる。
「見るがいい！この姿を！漲る力を！」
アンリマユが魔力を発する。
「我は神にも等しき力を手に入れた…！我は生まれ変わった！我は強くなった！この力で我は…我を呪い、蔑み、疎んだこの世を無に帰す！！」
アンリマユが憎悪に満ちた目的を言い放つ。
「勘違いしてんじゃねーよ」
それまで黙ってアンリマユの話を聞いていた銀時が口を開いた。
「何…？」
アンリマユが銀時を睨む。
「んなもん本当の強さじゃねーよ。聖杯で得た強さなんざ」
銀時が一歩前に出る。
「テメーは弱いまんまだ。どんだけ姿を変えようが魔力を増やそうが、テメーの魂は弱いまんまだ」
アンリマユを真っ直ぐに見て銀時は言う。
「……黙れ…」
「んなハリボテの強さ、俺がたたっ斬ってやるよ」
「黙れェエエ！！！」
アンリマユが叫び声を上げる。
腕を伸ばして銀時に襲い掛かり、銀時は横に跳んで避ける。
「貴様など…我の力で消し去ってくれる！！」
両の手から野球ボール程の大きさの魔力球を複数放つ。
銀時は魔力球をかわし、かわせない魔力球は剣で弾く。

「消え去れ！！」
口から魔力波を放つ。
銀時目掛けて放たれ爆発する。砂埃が立ってよく見えない。
「手こずらせお…」
砂埃が晴れてアンリマユは言葉を止める。
銀時が立っていた。
「んなまやかしの強さなんかに…俺は負けねぇよ」
鋭い目でアンリマユを睨む。
地を蹴って、一気にアンリマユとの距離を縮める。
「無駄だぁああ！！！」
両手を前に出し、巨大な魔力波を放つ。大きな音を立てて大爆発を起こす。爆風が起こり、砂埃が舞う。
ドスッ。
肉を刺す音がした。アンリマユが自身の右肩を見ると刀が刺さっていた。視線を上げて睨みつける。
「き…さまぁああ！！！」
銀時がアンリマユの右肩に刀を突き刺していた。続けて銀時は木刀をアンリマユの顔面に振りぬく。木刀はアンリマユの顔面に直撃した。
「調子に乗るなぁああ！！」
左拳で銀時の顔を殴る。殴られた銀時は後方に吹き飛ぶ。
「ぬっ！」
銀時がすぐに立ち上がる。
「まだ…立ち上がるか…」
紅い目で銀時を睨む。
「…テメーにだけは…絶対に…負けねぇよ…」
目に消えない闘志を宿してアンリマユに言う。
「……」
黙って銀時を睨む。
「面白い…」

アンリマユが笑う。
「？」
銀時が目を細める。
「我の魂が…弱いと言ったな」
アンリマユの右手に黒い球体が現れる。
「攻め方を変えよう」
銀時が警戒して剣を構える。
「貴様の魂の強さ…見せてもらうではないか」

第五十一訓：絆は人を強くする（前書き）

桂「こうなったら俺もサーヴァントになって…！」

作者「死なないとサーヴァントになれませんよ？」

桂「え…？」

第五十一訓：絆は人を強くする

ヤバイ。
黒い球体を見て銀時はそう直感した。
アレに触れてはダメだ。アレに捕まってはイケない。

「見せてもらおう…貴様の魂の強さを」
直後、アンリマユが銀時に向かってダッシュする。
「く…！」
銀時も横に走り出すが、すぐにアンリマユの左手に捕まってしまう。
「無駄だ…逃げることは…できん…」
アンリマユの左手は銀時の左腕を掴んで離さない。球体を持ってる右手を上げて、球体は人が一人入れる大きさになる。
「”闇”に落ちるがいい」
銀時に向かって球体を投げる。
「……！！」
銀時は黒い球体の中に飲み込まれていった。

＊

真っ黒い闇。
闇の中に銀時が立っている。
「ここは…？」
辺りを見回すが真っ暗で何も見えない。何もない。
その時。

―死ね―

耳元で声が聞こえた。

「！！」

後ろを振り返る。何もいない。

―死ね死ね―

また声が聞こえる。何度周りを見ても誰もいない。

―死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね―

『死』が銀時を呼ぶ。『死』へと誘おうとする。

気分が悪くなる、息苦しくなる、めまいがする、頭痛がする、寒気がする、冷汗が流れる。

闇から複数の干からびた手が現れる。手は銀時を掴むと闇に引きずりこもうとする。

「ぐ…！」

必死に手を振り払おうとする。

―殺せ殺せ―

また声が聞こえる。

銀時を死の闇に引きずりこもうとする。

死の呪い。

それがアンリマユの力。

―死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね―

「……！！」

闇から聞こえる声に、闇へと誘う手に必死にあらがう。

―殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ―

「…うるせぇ…！」

闇に引き込まれまいと必死にあらがう。

―あきらめて死んじまえよ―

銀時の目の前にドクロが現れる。

―どーせ誰も助からねぇ―

ドクロが銀時に話し掛ける。

―お前が必死に頑張ったって残るのは死体の山だ―
「…黙れ…！」
ドクロを睨んで小さく呟く。
―お前は無力だ―
不気味にドクロが笑う。
―おとなしく闇に飲まれろ―
「黙れって言ってんだ！」
声を荒げる。
―お前もお前の大事なものもみんな死ぬんだよ―
憎悪、怨念、呪い、嘲笑、あらゆる悪意が銀時の心を、魂を蝕む。
「うわぁあああ！！！」
闇の中に銀時の叫び声が響いた。

＊

銀時を飲み込んだ黒い球体の前にアンリマユが立っている。
「ハハハ…お前はこの呪いに勝てるか…？」
銀時の苦しむ姿を想像して笑いながら球体を見つめた。
「死の海に溺れて死ぬがいい」

＊

（こいつがアンリマユの呪いか…！！）
銀時は闇の中で必死に耐えていた。闇からの手が銀時を引っ張る。
（こんな所で死ねるかよ！）
体中に力を入れる。
（どーせ死ぬんなら綺麗な女と結婚して、孫にかこまれて穏やかに死んでやるよ！）
少しずつ前に出る。
「それによぉ…」

歯を食いしばる。
「俺の事を待ってる女がいんだよ！」
闇からの手を振り払う。一本、また一本と干からびた手を振り払う。
「侍は果たせない約束はしねぇえええ！！！」
全身全霊の力で全ての手を振り払う。
自分の帰りを待つ少女のために。少女との約束を護るために。闇を振払う。

＊

ビシッ
「ムッ！？」
黒い球体に亀裂が走る。
「な…に…！？」
アンリマユが驚く中、亀裂は黒い球体全体に広がる。
「ま…まさか…！」
アンリマユが一歩後ずさった時。
バガァァァァ。
黒い球体は音を立てて砕け散り、中から銀時が姿を現す。
「よぉ」
銀時が不敵な笑みを浮かべる。
「我の呪いを…破っただと…！？」
アンリマユが動揺する。
「馬鹿な！何故だ？何故倒れない！？何故立ち上がる！？」
紅い目で銀時を睨みながらアンリマユが叫ぶ。

＊

炎の壁の外。
凛達は壁の外で銀時の闘いを見守っていた。

「くそっ！ここで待ってることしか出来ないのか！？」
士郎が拳を握りしめる。
凛はじっと炎の壁を見ていた。
（何か…何か銀時の力になれる事は…）
凛は必死に考える。自分に何か出来ることはないのか。
（力…？）
凛が何かに気付く。
「そうだわ！」
凛が声を上げる。
「遠坂！？」
「リン！？」
二人が驚く。
（私にも出来ることがある！）

＊

「アアアアア！！」
アンリマユの体が肥大する。
「貴様の肉体と魂！押し潰してくれるわぁああ！！！」
アンリマユの拳が銀時に迫る。銀時もアンリマユの拳を防ごうと木刀と真剣を頭上に構える。
アンリマユの拳が木刀と真剣にぶつかる。
「潰れるがいい！」
腕に力を込める。
「ぐぉおおお！！」
歯を食いしばって必死に耐える。地面に亀裂が走り、砕ける。
「これで終わりだァ！！」
一気に銀時を押し潰そうとした時。
銀時の体が銀色に光る。
「何っ！？」

アンリマユは驚いて腕の力を緩めてしまう。
直後、銀時が剣を振るってアンリマユの拳を弾く。
「ヌゥ！」
アンリマユが後ろにさがる。
銀時も自身の異変に戸惑う。
「こいつぁ…」
だがすぐに銀色に光った理由に気付く。
「ありがとよ。凛」
自分のマスターに礼を言う。

＊

（別にお礼なんていらないわよ！）
パスを通じて銀時に言った。
銀時が銀色に光った理由。それは凛が銀時に魔力を送ったからである。
サーヴァントはマスターからの魔力供給を受けているが、銀時はほとんどそれを受けていなかった。セイバーや他のサーヴァントのように宝具のために膨大な魔力を必要としなかったので必要最低限の魔力しか受け取っていなかったのだ。
しかし今、凛の方から膨大な魔力を銀時に流しているので銀時の力が上がり銀色に輝いたのである。
（決めなさい！銀時！！）

＊

「お…のれ…虫ケラどもがぁ！」
アンリマユが歯を食いしばって怒る。
「悪ぃな。俺にはお前に無いもんがあるんだよ」
「我に無いものだと？」

銀時が右手の親指を立て、自身の後ろを指差す。
「護り護られる大事なもんがな」
自分を信じる大切な仲間を指差しながら銀時がそう言った。

第五十二訓：人の力は無限大（前書き）

桂「心が力を生むんだ」エ［今いいこと言った］

第五十二訓：人の力は無限大

侍は剣を取る。
己の信念を護るために。
侍は闘う。
己の大事なものを護るために。

炎の円の中心。
二人のサーヴァントが対峙している。
己の大事なものを護る、坂田銀時。
世界を滅ぼそうとする、アンリマユ。
「何度潰そうと…立ち上がる…！うっとうしい虫ケラが！！」
アンリマユが拳を握る。
銀時はニタァといつもの憎たらしい笑みを浮かべる。
「カスが！今の貴様の力など…燃え尽きる前の炎に過ぎん！！」
銀時を指差してアンリマユが怒鳴る。
「強大な力を得た我が…負けるわけがないのだ！！」
アンリマユがそう叫ぶと銀時は不敵に笑った。
「言ったなアンリマユ」
「何？」
「倒される前のラスボスってのは、そういうセリフを言うんだよ」
アンリマユを指差しながら銀時が言う。
「お前、敗北フラグが立ったぜ」
不敵な笑みでそう言った。
「黙れ！！」

銀時の言葉に激怒する。
「その減らず口を今黙らせてやる！」
そう叫ぶとアンリマユの足元に魔法陣が浮かび上がる。銀時が目を細める。
「聖杯戦争の根本たる『大聖杯』。この力と我の真名を解放して全員地獄へ送ってくれるわ！！」
怒りの形相でアンリマユが叫ぶ。
「上等だよ。そのガラクタと一緒にブッた斬ってやるよ！！」
白夜叉の目をしてアンリマユを睨む。
「消し去れ！全てを無に帰してくれる！！！」
アンリマユが構える。
「俺と凛の魂の一撃！テメーの目に焼き付けな！！！」
『名も無き名刀』を腰に差し、愛刀『洞爺湖』を両手で持ち、居合いに似た構えをする。
「アンリマユ！！！！」
アンリマユが真名を解放する。両手を前に出す。アンリマユの両手の間に黒い魔力の塊が現れる。
「アアアアア！！！」
アンリマユの灰色の体は黒く変色し、バーサーカー並の大きさにまで肥大する。そして禍々しい魔力を身に纏う。魔力は圧縮され、大きな黒い球体になる。全てを呪い、破壊し、無に帰す宝具『アンリマユ』。
「うおおおお！！！」
居合いの構えでアンリマユに向かって走り出す。
アンリマユが宝具である黒い魔力波を放つ。
銀時も一気に木刀を振り抜く。
木刀と魔力波が火花を散らして激突し、強い衝撃が起きる。
「ぐおおおお！！」
銀時を押し潰そうとする。
「ふんごぉおおお！！」

アンリマユを斬ろうとする。
「フハハハハ！素晴らしい！素晴らしいぞ聖杯の魔力は！！」
聖杯の魔力に喜びながら銀時を押し潰そうと魔力波を放ち続ける。
「ぐぅ…！！」
わずかに銀時が押され、足元の地面が砕ける。

＊

「アンリマユの魔力が急激に上がりました！」
焦った様子でセイバーが言う。
その時、凛が地面に膝をつく。
「遠坂！！」
士郎が遠坂の肩に手を置く。
「あいつ…！いきなり沢山魔力持っていって…！」
銀時に文句を言いながら顔を上げる。
「負けたら承知しないわよ！！」

＊

「ハーハッハッハッハッ！！聖杯によって我は…無限ともいえる魔力を手に入れたのだぁああ！！」
さらに魔力を上げて銀時を押し潰そうとする。
「ぐぅ…！！」
歯を食いしばって木刀を持つ両腕に力を込める。腕の骨が軋み、筋肉の筋が切れて、体が悲鳴を上げる。
「これで終わりだぁああ！！」
アンリマユがそう叫んだ時。
ビシッ、ビシィイ。
足元でヒビ割れる音がした。
「なっ！？」

アンリマユが足元を見る。魔法陣にヒビが入っている。
「大聖杯にヒビが…！？」
アンリマユが驚く。
「何故だ！？何故、大聖杯にヒビが！！？」
大聖杯にヒビが入るという事態にアンリマユが動揺する。
「はっ！！」
そして目の前の銀色の侍を見る。
「まさか…奴らの魔力に…聖杯が押されているのか！？」
驚愕の表情で銀時を見る。
「うぉおおお！！！」
銀時が雄叫びを上げてアンリマユの魔力波を斬り裂いた。
「何ィ！？」
アンリマユが驚いて腕を引っ込める。
「馬鹿なっ！！聖杯の力より…奴らの魔力の方が上だというのかァ！！？」
アンリマユがうろたえて後ずさる。
「おおおお！！」
アンリマユの懐に入る。
「この世全ての悪を！」
木刀を上段に構える。
「斬り裂けェエエエ！！！！」
頭からアンリマユの体を斬り裂いた。
「オ…オオオオオ！！！」
アンリマユが叫ぶ。同時に大聖杯が砕ける。
黒い光を発してアンリマユと大聖杯は消滅した。

第五十三訓：お疲れ銀さん

月明りが輝く夜。
そんな夜の川に一隻の屋形船がゆっくりと進んでいた。

「晋助。牙蔵からの連絡が途絶えたでござる」
サングラスをかけ、耳にヘッドホンを付け、背中に三味線を背負った男が報告する。
男の視線の先には派手な着物を着た男が窓際に座っている。
「そうか」
口にくわえたキセルを離し、煙を吐く。
アンリマユを利用して江戸を破壊しようとしていた高杉晋助である。
「怒愚魔博士も真選組に捕まっちまったしな…ククク…今回は失敗だな」
計画が失敗しても高杉は不気味に笑う。
「元々アレは拙者ら人間に扱える代物ではござらん」
高杉と話してる男の名は河上万斉。鬼兵隊の一員で、人斬り万斉と恐れられる剣豪である。
「ククク。しかし、一目見てみたかったな…」
そう言って窓の外を見る。
「この世全ての悪を…」
また口にキセルをくわえる。
屋形船は夜の川を静かに進んでいった。

＊

目を覚ます。
「銀時？」
自分を呼ぶ声が聞こえる。
目の前に凛の顔があった。
「…凛？」
銀時が凛の名を口にする。
「よかった。目が覚めたのね」
そう言って凛は安心して笑顔になる。
「アレ？確か…アンリマユと闘り合って…それから…」
目が覚める前の事を思い出す。
「終わったわよ。銀時」
凛が柔らかい笑顔でそう言った。
「…そうか」
銀時もフッと短く笑った。
「アレ？」
銀時が何かに気付く。
「どうしたのよ？」
頭に何か違和感がある。俺は何に頭をのっけてるんだ？
「凛…俺、今どうなってるの？」
「どうって？」
銀時の質問に凛は首を傾げる。
「いや…なんか…枕とは違う感触が頭に…」
銀時がそう言うと。
「ああ。銀時、膝枕は初めて？」
凛が笑顔でそう言った。
「おおおおいっ！！」
叫びながら勢い良く飛び起きる。
「あら。もう起きちゃうの？」
凛が残念そうに言った。

「お前なぁ！膝枕なんてされたら俺はさらに遠坂ファンを敵に回しちまうだろーが！！」
「ギントキ。目が覚めたのですね」
凛に怒鳴っていると後ろからセイバーの声が聞こえた。
「銀さん。もう大丈夫なんですか？」
セイバーと士郎が歩いてくる。
「おお。お前らも無事だったか」
二人の無事も確認する。
「はい。銀さんと遠坂のおかげで助かりました」
「大聖杯が破壊されて、もうこの街で聖杯戦争が起きることはないでしょう」
全てが終わった。みんなで生きて終わった。
「そういやぁここどこだ？」
銀時が辺りを見回す。
「柳洞寺の近くの小さな丘よ」
と凛が答える。
「そうか」
そう言って銀時は太陽を見る。
「朝日か…」
朝日を見ながら銀時が言った。
「ええ」
銀時の隣で凛も朝日を見ながらそう答えた。
「綺麗だな…」
山から覗く朝日を見てそう呟いた。
「そうね」
じっと朝日を見つめる。
「隣にもっと綺麗なもんがあるけどな」
「えっ！？」
凛は顔を真っ赤にして銀時の顔を見る。
銀時は横目で凛を見て微笑んでる。

「坂田銀時」
「！！」
突然聞こえた声に全員が振り返る。
白髪で黒いマントのような物を着た男が立ってる。
「誰だあんた！？」
士郎達が身構える。
「安心しろ。私は敵ではない」
そう言って銀時に近づく。
銀時の前で足を止める。
「見事だ銀時。まさか本当にアンリマユを倒すとはな」
「一人じゃどうにもならなかった。凛や士郎達のおかげだ」
朝の冷たい風が吹く。
「約束だ。お前を元の世界に戻そう」
「え？」
銀時以外の全員が声を出した。
「むっ？なんだ、話してないのか？」
「あー。説明が面倒でな」
頭を掻きながら銀時がそう言った。
「元の世界に戻すって？」
凛が仙人に聞く。
「坂田銀時は死んではいない。だから聖杯戦争が終わったら元の世界へ戻す約束をしたのだ」
仙人がみんなに説明した。
「死んでいない？」
セイバーが少し驚く。
「そうか。だから霊体化できなかったのか」
士郎は驚きながらも納得していた。
「では銀時」
「へいへい」
頭を掻く。

「あっそうだ」
銀時が凛に振り返る。
「お前、俺に何か言いたい事があったんじゃね？」

第五十四訓：告白は人生の一大イベント

「お前、俺に何か言いたい事があったんじゃね？」
凛を見つめて銀時はそう言った。

銀時の言葉に凛が顔を真っ赤にする。顔を下に向けてしまう。
「どうした、凛？」
凛に声をかけるが返事はない。
「おい。無視ですかコノヤロー」
また返事はない。
めげずに銀時が凛に声をかけようとした時。
「私…」
「！」
凛が顔を上げて銀時の顔を真っ直ぐに見つめる。
「私、銀時が好き」
顔を赤くしながらも銀時の顔を見つめ、ハッキリと言った。
凛が銀時に告白した。
「もう、銀時じゃなきゃダメ」
周りのみんなは驚いてる。
銀時だけは驚いた様子はない。
「そうか」
そう言って銀時は凛に近づく。
凛の目の前で立ち止まる。
「俺もだ」
「え？」

銀時の言葉に凛は呆然とする。
「俺もお前が好きだ」
銀時も凛に告白する。
「ぎ、銀時っ！！？」
銀時の告白に驚いて、赤かった顔は更に真っ赤になる。
「だから…」
死んだ魚のような目ではなく、光の宿った目で凛を見つめる。
「俺と来い」
「えっ！？」
再び銀時の言葉に驚く。
「お、俺と来いって…どういうことよ！？」
わけがわからず銀時に聞く。
「一緒に俺の世界に来い」
銀時の答えに凛は目を見開いて驚く。
「と…遠坂が銀さんの世界に…！？」
「そのような事が可能なのですか！？」
二人も驚く。
「できるよな？仙人」
銀時が仙人の方を見る。
「うむ。お前の願いを一つ叶えてやると約束したしな。そのような願いは朝メシ前だ」
グッと右手の親指を立てて仙人がそう言った。
「だとよ」
そう言って凛に向き直る。
「お前がよけりゃ俺と一緒に来い」
もう一度、凛に言った。
凛は何も言わずただじっと銀時の顔を見てる。
「…嫌か？」
銀時がそう聞くと凛は首を横に振った。
「…馬鹿…嫌なわけないでしょ」

そして笑顔で銀時の顔を見る。
「行くわ。言ったでしょ？銀時じゃなきゃダメだって」
それを聞いて銀時も微笑む。凛が士郎の方を見る。
「衛宮君。そういう事だから…桜には貴方から伝えといて」
少し寂しそうな笑顔で士郎にそう言った。
「…わかった。遠坂がそう決めたのなら」
頷いて士郎が答える。
「ありがとう」
士郎に礼を言う。
「士郎」
「！」
銀時が士郎を呼ぶ。
「イリヤに伝えといてくれ。”元気でな”ってな」
「わかりました」
銀時にも頷いて答えた。
「では。そろそろ…」
「待ってください！」
仙人の声を遮ってセイバーが声を上げた。
「セイバー？」
士郎がセイバーの名を呼ぶ。
「あの…」
セイバーが一歩前に出る。
「私も一緒に連れていってください！」
「えっ！？」
セイバー以外の全員が驚いた。
「お願いします」
頭を下げてお願いする。
「いやいやいや、おかしいよ。何でセイバーまで来るんだ？」
銀時がセイバーに聞く。
「それは…その…」

セイバーは急に銀時から目をそらして顔を赤くする。
「！！」
その時、凛はセイバーの想いに気付いた。
「おい。何で顔赤くしてんだ？風邪か？」
銀時がそう聞くと。
「いいんじゃない？セイバーも連れてっても」
凛がそう言った。
「え？」
銀時が凛を見る。
「いいわよね、銀時？」
凛がそう聞くと。
「まぁ…俺ぁ別にいいけどよ」
頭を掻きながらそう答える。
「本当ですか！？」
目を輝かせてセイバーが聞く。
「仙人。どうだ？」
仙人に聞く。
「まぁ一人でも二人でも問題は無いぞ」
「だそうだセイバー」
「ありがとうございます！」
セイバーが礼を言う。
「セイバー」
「！」
凛がセイバーを呼ぶ。
「言っておくけど、渡す気はないわよ」
凛が不敵に笑ってそう言うと。
「望む所です」
セイバーが目を鋭くして答える。
二人の間で火花が散る。
その光景を見て銀時、士郎、仙人は揃ってこう言った。

「「「なんでさ?」」」

第五十五訓：さよならは言わない

聖杯戦争は終わり、この世界に別れを告げる時がきた。

「セイバー」
士郎がセイバーを呼ぶ。
「何でしょうシロウ？」
セイバーが士郎に振り向く。そして驚いた。
士郎の手にはセイバーの失われた宝具『アヴァロン』が握られていた。
「これはセイバーの物なんだろ？ならこれはセイバーが持ってるべきだ」
セイバーが言った。”シロウは私の鞘だったのですね”と。それは士郎の体の中にアヴァロンが入っていることを言ってたのである。
「よろしいのですか？」
セイバーが士郎に聞く。
「ああ」
そう言ってセイバーに鞘を差し出した。
セイバーはじっと自らの鞘を見つめていた。

＊

前回の聖杯戦争。一人の魔術師が一人の死にかけた少年を見つけた。魔術師は少年の命を助けるために、鞘を少年の中に埋め込んだ。鞘の力で少年の命は助かった。そして魔術師は両親を亡くしたその少

年を養子として引き取った。

＊

「ありがとう。シロウ」
礼を言って士郎から鞘を受け取った。
「そういやぁセイバーってサーヴァントのままで来るのか？魔力とか大丈夫なの？」
銀時が凛にそう聞いた。
「それなら心配ないわ。私がセイバーのマスターになって維持するから」
「そうか」
そう言ってセイバーを見る。
「セイバー。私と契約するわよ」
そう言ってセイバーに近づく。
「あっリン」
セイバーが何かに気がついて凛に声をかける。
「まだシロウとの契約が続いてます」
そう言って士郎の手の甲にある令呪を見る。
「あ…」
ちなみにこの聖杯戦争で令呪は一回も使っていない。令呪を使い切らなければ契約は切れない。
「テキトーに指示だして令呪使い切っちまえ」
そして、なんやかんやで令呪を使い切り、セイバーと士郎との契約を切って、セイバーは凛と契約した。
「では、そろそろ行くぞ」
仙人がそう言うと。
「おお」
「そうね」
「わかりました」

三人がそう答えた。
「衛宮君。桜の事よろしくね」
「ああ。遠坂も元気で」
士郎と凛が別れの挨拶を交わす。
「シロウ。貴方がマスターでよかった。お元気で」
「ああ。俺もセイバーがパートナーでよかった。向こうでも頑張れよ」
セイバーとも挨拶を交わす。
「士郎」
銀時が士郎を呼ぶ。
「銀さん」
呼ばれて銀時を見る。
「いい魔術師になれよ」
「はい」
そして銀時達は仙人のそばに立つ。
「では行くぞ」
銀時達の体が白く光る。
「銀時」
凛が銀時を呼ぶ。
「ん？」
凛の方に顔を向けると。

チュッ

銀時の唇に凛の唇が重なる。
銀時は目を見開いて驚く。
凛がゆっくり唇をはなす。
「おま…！！」
銀時が珍しく顔を赤くして慌てる。
「私のファーストキスよ」

凛は笑顔でそう言った。
直後、強い光を発して、光がおさまると銀時達の姿はなかった。
丘には士郎と仙人しか立っていなかった。
「お前もご苦労だったな。衛宮士郎」
仙人が士郎にそう言った。
「あの…」
士郎が仙人の方を向く。
「貴方は何者なんですか？」
そう聞かれて仙人はフッと短く笑ってこう答えた。
「仙人じゃ」

第五十六訓：お帰り銀さん（前書き）

桂「更っ新！！」

第五十六訓：お帰り銀さん

目が覚める。
見知らぬ天井があった。
「……」
銀時はベッドで横になっていた。

頭には包帯が巻かれてる。服はパジャマでも、いつもの着物でもなく病院の入院患者が着る服だった。
「病院か…？」
ぼんやりする頭を働かせる。
すると両隣から静かな寝息が聞こえる。両隣を見る。凛とセイバーが気持ちよさそうに寝ている。
「ん～」
上半身を起こして背伸びする。病室には自分と凛達以外、誰もいない。
すると病室の扉が開かれる。
「銀ちゃーん！今日は起きてるアルか？」
「神楽ちゃん。病室で大声出しちゃダメだって」
少年と少女が病室に入ってくる。
「神楽！新八！」
入ってきた二人を見て名前を呼ぶ。
「あっ！銀ちゃん起きてるヨ！！」
赤いチャイナ服を着た少女・神楽が銀時を見て喜ぶ。
「よかった！意識が戻ったんですね！」

眼鏡をかけた、これといって特徴の無い少年・志村新八も喜ぶ。
だが二人はピタリと足を止め、銀時の両隣で寝てる二人の少女を見る。
「あ…」
時が止まった感覚になる。気まずい雰囲気になる。
「銀ちゃんのバカァアアア！！」
泣きながら神楽は銀時の顔に蹴りを入れる。
「ぐぼぁ！！」
銀時は鼻をおさえて悶える。
「ん…？」
「む…」
すると凛とセイバーが目を覚まして体を起こす。
「あれ…？ここは…そうか。銀時の世界か…」
「ちょっと銀さん！誰なんですか、その二人！？」
新八が凛とセイバーを指差しながら叫ぶ。
「ここは…ギントキ！大丈夫ですか！？」
セイバーが鼻血を流してる銀時に近寄る。
「お前ら一体誰アルカ！？」
神楽が激怒しながら二人に聞いた。
「あら。人に名前を聞く前に自分から名乗るのが礼儀じゃないの？」
凛が不敵に笑いながら神楽にそう言った。
「私は神楽アル！」
元気よく神楽が答えた。
「志村新八です」
新八がそう言うと。
「あら？貴方いたの？」
と凛に言われてしまう。
「いや！初対面でひどくないですかそれ！？」
今日も新八の突っ込みは好調である。
「僕達は名乗ったんですからあなた達も名前を教えてください」

気分を落ち着けて新八は凛達に言った。
「私は遠坂凛。銀時の彼女よ」
「私はセイバーと言います」
二人の自己紹介に新八と神楽は一瞬呆然となるが、すぐにハッとなり。
「「銀の彼女(さん・ちゃん)ぉおおお！！！？？」」
二人の叫び声が病院内に響いた。
「うっせーよ！病院でデケー声出すなよ！！」
銀時が怒鳴った直後。
「セイバー！！」
セイバーを呼ぶ声と共に病室の扉が勢いよく開かれた。そこに立っていたのは。
「ギルガメッシュ！！？」
黄金の鎧ではなく黒いライダースーツを着たギルガメッシュが立っていた。
「はっはっはっ！会いたかったぞセイバー！！」
ギルガメッシュが高らかに笑う。
「なんでだよ！？」
銀時が叫ぶ。
「何でお前がここにいんだよ！？」
指差しながら銀時が叫ぶ。
「我は前回の聖杯戦争で聖杯の泥を浴びて”受肉”したのだ！今回、我は確かに聖杯に取り込まれた！だがお前が聖杯を破壊したおかげで唯一肉体を持っていた我は聖杯から抜け出せたのだ！！」
セイバーに出会い上機嫌でギルガメッシュが説明する。
「そして聖杯から出た我は白髪の雑種の力でこの世界へ来たのだ！おっと、安心しろ。セイバーのマスターだった雑種には危害はくわえていない」
どうやらギルガメッシュは仙人を脅してこの世界に来たらしい。
みんな呆然としてギルガメッシュを見てる。

「セイバー！我はお前に会うためなら、たとえ火の中水の中！世界を飛び越えて会いに行くぞ！！」
病室にギルガメッシュの声が響く。
「いや、その前にアンタ誰ですか！？あの人も銀さんの知り合いなんですか！？」
新八が銀時に聞く。
「知らねーよ！あんな馬鹿、俺知らねー！！」
銀時がそう叫ぶと。
「やかましいわ！病院でデカい声出すな！馬鹿共がぁああ！！」
婦長が病室に乗り込み、凛とセイバー以外全員ボコボコにする。
薄れていく意識の中、銀時は思った。
（ああ…帰ってきたんだな…この騒がしい世界に…）

第五十七訓：ようこそ万事屋へ

病院から退院して、銀時は万事屋に帰って来た。
多くの仲間を連れて。

中央のテーブルを挟んで右のソファーに銀時、凛、セイバーが座り、
左のソファーに神楽、新八が座ってる。
そしてギルガメッシュはデスクの椅子に座っている。
「つまり銀さんはこっちの世界で意識を失っている間に向こうの世
界でサーヴァントとして遠坂さん達と一緒に聖杯戦争を闘って、元
凶のアンリマユを倒してこっちの世界に帰ってきたと」
新八が銀時達が話した説明を確認する。
「ああ」
銀時が答える。
「で、凛ちゃんは銀ちゃんの恋人で、セイバーは凛ちゃんのサーヴ
アントで、ギルガメッシュはセイバーのストーカーアルカ？」
神楽が銀時にそう聞く。
「そうだ」
銀時が答える。
「我はストーカーではない！！」
デスクを叩いてギルガメッシュが怒鳴る。
「突然そんな話されても信じられませんよ」
ギルガメッシュをスルーして新八が銀時にそう言った。
「我を無視するな！！」
またギルガメッシュが怒鳴る。

「そうですね。凛。何か魔術を見せてはどうですか？」
「セ…セイバーまで我を無視しおって…！」
ギルガメッシュが拳を握る。
「そうね。じゃあガントでもしようかしら？」
「え？アレやんの？」
銀時が苦い顔をする。
「大丈夫よ。ちゃんと力は弱めるし、死にはしないわよ」
「つーか誰にやるんだよ？」
銀時が聞くと。
「アンタに決まってるでしょ」
そう言って銀時を指差す。
「え？」
次の瞬間、凛の指からガントが放たれた。
「がぶっ！」
ガントは見事、銀時に当たる。銀時の顔色がみるみる悪くなる。
「ゲホッゲホッ！」
咳をして、熱にうなされる銀時。
「信じていただけたかしら？」
ニッコリ笑って凛が新八と神楽に言った。
「「はい。信じます」」

＊

約一時間後。
凛の治療で銀時は回復した。
「テメー凛…」
隣にいる凛を睨みつける。
「まぁまぁ。風邪も治ったし、新八君達も信じてくれたんだし。いいじゃない」
凛が笑顔で答える。

「ところで皆さんは何を営んでるのですか？」
セイバーが質問する。
「僕達はなんでもやる万事屋というのをやってます」
「万事屋…ですか」
「ところで皆さんはこれからどうするんですか？」
新八が凛達にそう聞くと。
「ここに住むに決まってるじゃない」
「当然です」
「狭いが仕方ない」
全員、万事屋に住むと答える。
「みんなここに住むんですか！？」
新八が驚く。
「私の押し入れは譲らないネ！」
神楽は寝床を死守する。
「いいわよ。銀時の隣で寝るから」
「わ…私もギントキの隣に…！」
と二人が言うと。
「セイバー！く…やはりあの男に好意を抱いているのか！」
ギルガメッシュが悔しがる。
「大丈夫なんですか銀さん？こんな大人数で」
新八が心配する。
「まぁなんとかなるだろ」

＊

深夜。
新八は家に帰り、神楽は押し入れで寝ている。
銀時は一人ソファーに座ってる。しみじみと部屋を見る。
ちなみに凛とセイバーは隣の和室で寝てる。
「眠れぬのか？」

ギルガメッシュが銀時に声をかける。
「ああ」
後ろに立ってるギルガメッシュに顔を向けずに答える。
「なんだかんだで、やっぱり我が家が一番落ち着くんだな」
テーブルの上のジャンプを見ながら言う。
フンッと鼻を鳴らすギルガメッシュ。
「ギントキ」
「ん？」
ギルガメッシュを見る。
（アレ？今こいつ俺の事”雑種”じゃなくて名前で…）
銀時がそんな事を考えていると。
「セイバーの心は今お前に向いている。だが！」
そこで目をカッと見開き、銀時を指差す。
「我は必ずセイバーを振り向かせる！！そして我の女にしてみせる！！」
銀時にそう言うとギルガメッシュは去っていった。
「何言ってんだアイツ？」
耳の穴をほじりながら銀時はそう言った。
その時。
「ギントキ」
ギルガメッシュが戻ってきた。
「あ？」
「我はどこで寝ればいい？」
寝る場所を銀時に聞くと。
「ソファーで寝れば？」
「王の我がそんな所で寝れるか！！」
ギルガメッシュが怒鳴った時。
「夜中にうるさいアル！！！」
押し入れから神楽が飛び出てギルガメッシュの後頭部にドロップキックを食らわす。

「グガッ！！」
短い悲鳴を漏らして顔面を床にぶつけるギルガメッシュ。そのまま眠りにつく。
神楽は押し入れの中に戻る。
「まっいいやな」
と銀時が言った。

第五十八訓：人付合いはまずあいさつから

翌朝。
坂田家の朝食に凛、セイバー、ギルガメッシュの三人は呆然とする。

坂田家の朝食。
白いご飯の上に味付けノリが一枚乗ってるだけだった。あと味噌汁。
「「いただきま～す」」
銀時と神楽がご飯を食べ始める。
凛達はじっと自分達の朝食を見てる。見てるというより睨んでる。
「銀時…何これ…？」
凛が銀時に聞く。
「あ？何って朝メシだよ」
パリパリ音を立ててノリを食べる。
「あの…朝食はこれだけですか？」
今度はセイバーが聞いた。
「これだけネ。いつもの事ネ」
そう言って神楽はご飯を食べる。
「神楽。この前は卵かけご飯だったろ」
「あっ、そうだったネ」
二人がそんな会話をしていると。
「ふざけるなぁああ！！！」
ギルガメッシュが叫びながら立ち上がる。
「ギントキ！貴様は王である我にこんな質素な食事を食べろと言うのか！？」

テーブルに身を乗り出して銀時に怒鳴る。
「ああ。食え」
「な…！？」
ギルガメッシュが戸惑う。
「つーかお前まだ自分が王だと思ってんの？そりゃあ遠い昔の話だよ」
やれやれといった感じで首を横に振る。
「誰が何を言おうと我は王だ！！」
胸を張ってギルガメッシュは言う。
「世界飛び越えてまで好きな女の後をつけるなんてストーカーの王ネ」
「我はストーカーではないと言っておるだろう！！」
銀時、神楽と言い争うギルガメッシュ。
そんな三人をよそに凛とセイバーは朝食を食べる。
「銀時から話は聞いてたけど…ここまでなんて…」
「彼も食でツラい思いをしてるのですね…」
落ち込みながら朝食を食べる。

＊

「お～い。全員で下に行くぞ」
「下？」
朝食を食べ終えて銀時がみんなに呼びかける。
「何をしに行くのですか？」
セイバーが聞く。
「メンドくせーけどよ。下のババァにお前らの事、紹介すんだよ」
頭を掻きながらそう言った。
「下のって…誰なの？」
「ここの大家だよ」

＊

銀時達は万事屋を出て、一階のお店『スナックお登勢』の前にいた。
「ババァ、入るぞ～」
言いながら扉を開ける。
店の中には薄墨色の着物を粋に着こなした五十代の女性がいた。
「ん？朝っぱらから何か用かい？」
名前はお登勢。『スナックお登勢』のオーナーで『万事屋銀ちゃん』の大家さんである。
「ああ。ちょっとな…」
そう言って中に入ると銀時の後ろから凛達が入ってくる。
「…何だい、そいつらは？」
凛達を見て目を細める。
「ああ。今日からウチで住み込みで働く事になったやつらだ」
メンドくさそーに銀時が説明する。
「は？」
タバコに火をつけようとした手を止める。
「あんた何言ってんだい？」
「じゃ、そういうことで」
さっさと出ていこうとする銀時だが。
「ちょっと待ちな」
お登勢に捕まってしまう。
「銀時。家賃もロクに払えないあんたが何考えてんだい？」
目を細めて銀時を睨む。
「あの～アレだ。俺にもちょっと事情があってな…」
「家賃払ってから言いな、このボケナスゥウウ！！」
お登勢のアッパーカットが綺麗に銀時のアゴにクリーンヒットした。
「ごばぁ！！」
銀時は店の外まで吹っ飛んでしまった。
「ギントキ！？」

「貴様！よくも我の所有物を傷つけ…」
ギルガメッシュがお登勢に襲い掛かろうとした時。
「あぁ？」
ギロッと目を鋭くしてギルガメッシュを睨んだ。
「う…！？」
お登勢の威圧感に圧されてしまうギルガメッシュ。
お登勢の睨みを見たセイバーと凛も圧されて一歩後ずさる。
「文句あるのかい？」
「いや…ない……」
とギルガメッシュは答えた。
「たくっ。どうしようもない天然パーマだね」
そう言ってお登勢は店の奥に向かう。
「お前達もさっさと出ていきな」
言われて三人はおとなしく店を出た。店の入口の前に呆然と立ってる。
「あの人、凄いわね」
「物凄い威圧感でした」
「…ただ者ではない」
みんな冷汗を流してそれぞれ思った事を口にした。
銀時は三人の前で倒れて、青空を眺めていた。

第五十九訓：意外と天井って見ないよね（前書き）

後書きも読んでね。

第五十九訓：意外と天井って見ないよね

お登勢に追い出された四人は万事屋に戻っていた。
程なくして新八が万事屋に入る。
「おはようございまーす」

「そりゃあお登勢さんにぶっ飛ばされますよ」
銀時から朝の出来事を聞いて新八はそう答えた。
「たくっ。何で朝っぱらからこんな目に…」
銀時はブツブツ文句を言っている。
「すみませんギントキ。私達のせいで迷惑をかけて…」
セイバーがしょんぼりして謝る。
「まぁ気にすんな。いつもの事だ」
と言った直後、銀時は急に目を鋭くして隣に置いてある木刀を掴んで、天井に向かって投げた。
グサッ
何かに刺さる音がしてソレは天井から落ちてきた。
「何？何！？」
凛が慌てて立ち上がり、セイバーとギルガメッシュが構える。
しかし万事屋トリオは全く動じず冷静である。
「いたた…」
落ちてきたのは人だった。長いロングヘアーに眼鏡をかけた、なかなかの美人。頭には銀時が投げた木刀が刺さっている。
「ちょっと！頭に木刀刺さってるけど大丈夫なの！？」
凛が大声で言うと。

「心配ないネ。銀魂の世界じゃ普通アル」
と酢こんぶを食べながら神楽が答えた。
「ストーカー女。いつから人ん家にいた？」
そう言いながら銀時は頭に刺さってる木刀を引き抜く。
「やめて！触らないで！！」
「触ってねーよ」
女の訴えに銀時は冷ややかに返す。
「病院から退院したって聞いて銀さんの家に忍び込んだら、知らない女が二人もいるじゃない！しかも一人は銀さんの彼女！！」
目に涙を浮かべて女が話す。
「ヒドイじゃない銀さん！！私という女がいながら！一緒にＳＭプレイした仲じゃない！！」
「してねーよ！！」
銀時が女に怒鳴る。
「あの…この女性は誰なんですか？」
セイバーが新八に聞く。
「えっと…この人は猿飛あやめさんと言って元お庭番衆のくの一で、今は始末屋をやってるんですが…ハッキリ言ってしまえば銀さんのストーカーです」
と新八が説明する。
「ストーカー？この女性が？」
「ゴリラとギルと同じアル」
神楽はまだ酢こんぶを食べている。
「我はストーカーではないと何度言えばわかる！？それにギルとは何だ！？」
ギルガメッシュが神楽に怒鳴る。
「ギルガメッシュなんて長いアル。ギルで十分ヨ」
「貴様〜！！」
拳を握って怒りを燃え上がらせる。
「ねぇ銀時。この女性とはどういう関係なの？」

凛が笑顔で銀時に聞く。だが目は笑ってはいない。
「おい、誤解すんなよ凛。こいつはただの納豆臭い変態ストーカー女で俺はストーカー被害にあってる被害者だ」
銀時が凛にそう言うと。
「そこのアナタ！」
猿飛あやめ。通称さっちゃんは凛を指差して声を上げた。
「銀さんの彼女だか何だか知らないけど、アナタなんかに銀さんは渡さないわ！！」
言われて凛がムッとなる。
「銀さんのおち〇ち〇は私のも…」
「退場ぅうう！！！」
さっちゃんの言葉を遮って銀時は木刀を思いっきり振った。
「あああああん！！」
さっちゃんは木刀で思いっきり外に吹っ飛ばされた。
「たくっ」
銀時はため息を付く。
「ギントキ。色々と苦労しているのですね」
セイバーがそう言うと。
「まぁな」
と銀時は答えた。
「この世界にまともな女はいないのか？」
ギルガメッシュが新八に聞いた。
「そうですね…個性的な女性がいっぱいです」
苦笑いをしてギルガメッシュに答える。
「凛」
銀時が凛に振り返る。
「さっきの女は彼女でもなんでもねぇ…だから…」
銀時がそう言うと。
「わかってるわよ」
凛はソッポをむく。

「銀時の事、信じてるから」
顔を赤くしてそう呟いた。
「おお」
それを聞いて銀時は微笑む。
「なんかイラッとするアル。幸せ見せびらかして！いっそ壊してやりたいネ！」
「いけません！カグラ！」
「神楽ちゃん！抑えて！」
セイバーと新八が神楽を止める。
「ただなぁ」
銀時がアゴに手を当てて言った。
「ん？」
凛が銀時を見る。
「お前も胸はさっちゃんくらいあってボンッキュッボーンならもっと良かったんだけどな」
銀時がそう言った瞬間。
ブチッ
凛の中で何かが切れた。
「こぉのエロ侍ィイイ！！」
叫び声と同時に凛は見事な回転後ろ回し蹴りを銀時に決めた。
「ぐぶぁ！！」
凛の蹴りを受けて銀時は倒れた。
倒れた銀時はこう呟いた。
「…パンツ見えた…」

第五十九訓：意外と天井って見ないよね（後書き）

遂に次回で最終回！

第六十訓：最後はみんなで盛り上がっていこう（前書き）

今回で最終話です！　あいつらが再登場します。

後書きも是非読んでください！

第六十訓：最後はみんなで盛り上がっていこう

「湿っぽい終わり方は銀魂には似合わねぇ。最後は飲んで騒いで派手にいくぜ！」

花見へとやってきた万事屋一行。天気も良く桜は満開に咲いており、絶好の花見日和である。

「この前までは三人と一匹だけの花見になると思ってたが、まさかこんな大勢になるとは思わなかったな」

メンバーを見て銀時がそう言った。

「それにしても、こんな大きな犬がいるなんて非常識だわ」

そう言う凛の後ろには巨大な白い犬・定春がいる。

「わんっ」

定春は元気良く吠えた。

「しかし、なかなか可愛い犬ですね」

凛の隣に座ってるセイバーが定春の頭を撫でる。

「花見か…ふむ。まぁギリギリ合格点にしておこう」

ギルガメッシュは何やら得点を付けている。

「凛ちゃん！早く凛ちゃんの料理食べたいアル！」

神楽は両手にハシを持ってわくわくしている。

「銀さんが遠坂さんは料理が上手だって言ってたしね。それに今日は奮発していい食材を買ったし」

新八も凛の手料理を楽しみにしている。

「それじゃあ早速食べましょ」

そう言って凛は弁当箱のフタを開けた。中にはおいしそうな料理が入っており、その中には完璧な卵焼きが入っていた。
「わぁ！すごいヨ！ウチじゃこんな料理お目にかかれないヨ！！」
料理を見て神楽のテンションが上がる。
「凄い！本物の卵焼きだ！！」
卵焼きを見て新八は涙を流しながら感激する。
「…一回、見てみたいわね。”かわいそうな卵”」
新八の反応を見て凛はそう呟いた。
「ではいただきましょう」
セイバーがそう言うと。
「わんっわんっ」
定春が吠える。
「フフフ。大丈夫ですよ定春。ちゃんと貴方の分も取りますから」
「わんっ！」
セイバーの言葉に定春は嬉しそうに吠えた。
「何でなつかれてんの？」
料理を食べながら銀時が呟いた。
「おいしい！これです！これこそが卵焼きです！！」
新八は卵焼きを食べて感動している。
みんなで楽しんでいると。
「おい」
突然、男の声が聞こえた。
「ん？」
銀時が後ろを振り向くと。
「そこをどけ」
目を鋭くした男がそう言った。そして男の後ろには大勢の柄の悪そうな男達がいた。
近藤率いる武装警察『真選組』である。
「なんだ。またお前らかよ」
メンドくさそうに銀時は頭を掻く。

「それはこっちのセリフだ。前にも言ったはずだぞ。そこは真選組の花見の特別席だ」
目を鋭くした男・土方十四郎がそう言った。
「あれ？知らない顔があるな。旦那、新しい万事屋メンバーですかい？」
爽やかな顔をした男・沖田総悟が凛達を見て言った。
「ああ。まぁな」
鼻をほじりながら銀時が答える。
「ギントキ。何だこの雑種どもは？」
不愉快そうな目でギルガメッシュが言った。
「あ？雑種だと？」
土方がギルガメッシュを睨む。
「税金泥棒でチンピラ警察の真選組だ」
「誰が税金泥棒だ！？チンピラ警察でもねぇ！！」
銀時の説明に土方が怒鳴る。
「うるさいぞ雑種。早々に立ち去るがいい」
うっとうしそうにギルガメッシュが言った。
「何だと？」
土方がまたギルガメッシュを睨む。
「我は王だ。王である我に場所を譲るのは当然であろう」
「ふざけんなよ金髪！誰がテメーなんかに…！」
「うるさいわね！せっかくの花見が台無しになるじゃない！！」
土方の言葉を遮って凛が怒鳴る。
「そこのお嬢さんの言う通りだ」
ここで、それまで黙っていた局長・近藤勲が口を開いた。
「喧嘩はよせトシ。だがお嬢さん。こちらも毎年恒例の行事でな。おいそれと変更はできんのだ。どうか我々に譲ってはくれないか？」
近藤がそう言うと。
「絶対に譲らないわ」
そう言って凛、セイバー、ギルガメッシュは立ち上がった。

「私達をどかしたかったら使い切れないほどの宝石を用意しなさい」
「究極の料理を用意しなさい」
「この世界の全ての財を我に献上しろ」
三人がそれぞれ、そんなことを言うと。
「お前ら無茶な注文するな」
新八が汗を流して突っ込んだ。
「おもしれぇ。幕府に逆らうか？」
土方が腰に差した刀を抜こうとした時。
「待ちなせぇみなさん」
沖田が声を上げた。
全員が沖田を見る。
「陣地争奪って言ったらやっぱコレでしょう」
そう言って沖田は黄色いヘルメットを頭に被り、ピコピコハンマーを片手に取った。
「第二回！陣地争奪戦…”叩いてかぶってジャンケンポン大会”！」
「前と同じじゃねーか！！」
凛達以外の全員が沖田に突っ込んだ。
沖田のルール説明
「説明しよう。”叩いてかぶってジャンケンポン”とは、ゲャンケンをして勝った方が殴りかかり、頭にヒットすれば勝ち、ヘルメットで防がれたらセーフでまたジャンケンをするというゲームだ」
沖田の説明が終わり、真選組がシートを敷いて決戦の場が作られる。
「勝敗は両陣営代表三人による勝負で決まります。審判も公平を期して両陣営から新八君と俺、山崎が務めさせてもらいます。この勝負で勝った方がここで花見をする権利が得られます」
真選組の密偵、山崎退が説明する。隣には新八が立っている。
「では一回戦、近藤局長ＶＳセイバーさん！」
山崎が二人の名を呼ぶ。
「では行ってきますギントキ」
「おお」

セイバーは近藤の前に座った。
「新八君。あの子はちゃんとルール守ってくれるんだろうね？」
山崎が小声で新八にたずねた。
「大丈夫ですよ。姉上じゃあるまいし。ちゃんとルールは守ってくれますよ」
笑って新八はそう言った。
実は前回の花見でも真選組とこの勝負をしたのだが、新八の姉は近藤からストーカーの被害にあっており、ルールを無視してメットの上から思いっきり頭を殴って近藤を気絶させたのである。
「ルールを守ってくれるならそれでいいんだけど…」
山崎は浮かない顔をしている。
「悪いがセイバーさん。相手が女の子だからと言って手加減はしませんよ」
不敵に笑って近藤はそう言った。
「はい。全力で勝負しましょう」
と真剣な顔でそう返したセイバー。そんなセイバーは頭の中ではこんなことを考えていた。
（ここで勝ってギントキにイイところを見せる！！）
そして戦いが始まる。
「はい！叩いてかぶってジャンケンポン！！」
山崎が合図をする。
近藤はパーを出し、セイバーはチョキを出した。
すかさず近藤はヘルメットを手に取り。
「おーっとセーフ！」
殴られる前にヘルメットを頭にかぶった。本来ならここで、またジャンケンをするのだが。
「はぁあああ！」
セイバーは何故かピコピコハンマーを持った手に力を入れている。
「え？」
近藤が冷汗を流す。

「あの…セイバーさん？これ…もうヘルメットかぶってるから」
近藤がヘルメットを指差しながら言うがセイバーは聞いてない。
「ピコピコ…」
セイバーが宝具の真名を…じゃなかった。ピコピコハンマーの名を口にする。
「ハンマー！！！」
ピコピコハンマーを近藤の頭目掛けて思いっきり振り下ろす。
ドゴッ
ピコピコハンマーから発せられないはずの重い音を立てて近藤の頭に当たる。近藤は目から涙を、鼻から鼻血を吹き出す。そのまま近藤は倒れて気絶してしまった。
みんなア然とする。

え…ええええ？

セイバーの人間離れした怪力とルール違反に驚いてみんな言葉を失ってしまう。
「やりましたギントキ！！」
セイバーが笑顔で銀時に言った。
銀時は冷汗を流して苦笑いをしてる。
「ちょっとぉお！セイバーさん何やってんのぉお！？」
我に帰った新八がセイバーに怒鳴る。
「何って叩いてかぶってジャンケンポンですが？」
セイバーが首を傾げる。
「ヘルメットかぶった上から殴っちゃダメじゃないですか！！」
新八がそう注意すると。
「え…？これは敵の防御を破って倒すゲームではないのですか？」
驚いた顔をしてセイバーはそう言った。
「違うわぁああ！！ちゃんとルール聞けぇええ！！」
新八がセイバーに怒鳴る。

真選組の隊員達が近藤に駆け寄る。
「局長ぉおお！！しっかり！！」
「てめぇ何しやがんだクソガキィイ！！」
隊員達がセイバーに怒鳴ると。
「悔しければ剣をとりなさい」
そう言うセイバーは王としての気迫と威圧感を放っていた。
「すいませんでした！！」
セイバーの気迫に圧されて隊員全員が土下座して謝った。
「…新八君…あの子は一体…？」
山崎が震えながら新八にたずねた。
「…話すと長くなるので…」
新八は説明しなかった。
「…えーと。局長が戦闘不能になったので、一戦目は無効とさせていただきます」
近藤は隊員達に運ばれて手当てを受けてる。
「すいませんギントキ」
しょんぼりとして銀時に謝った。
「気にすんな」
セイバーを励ました。
「では二戦目の人は最低限のルールは守ってください」
山崎が二戦目の二人、沖田とギルガメッシュに言った。
「王と雑種の力の差を我が直々に教えてやる」
不敵な笑みでギルガメッシュがそう言った。
「負かして裸にして、裸の王様にしてやるぜィ」
腹黒い笑みで沖田がそう言った。
「ルール守るかな…あの人」
新八は心配しながらギルガメッシュを見る。
そして勝負は始まった。
「おおっ！！」
勝負が始まった瞬間、周りから驚きの声が上がる。

二人の動きはまるでビデオの早送りのように早かった。
「すげぇ！あまりの早さに二人ともメットとハンマーを持ったままのよーに見えるぞ！！」
全員が驚く。
「ほぅ。総悟と互角にやりあうたァ何者だあの金髪？奴ァ頭は空だが腕は真選組でも最強をうたわれる男だぜ…」
タバコを吸いながら土方はそう言った。
「互角だァ？ウチのギルにヒトが勝てると思ってんの？奴はなァ人類最古の英雄王ギルガメッシュなんだぜ。スゴイんだぜ～」
笑いながら銀時はそう言った。
「なんだとウチの総悟なんかなぁ…」
銀時に食いかかる。
「ちょっとアンタ達！みっともないからやめなさいよ！！」
その間も総悟とギルガメッシュの勝負は続いていた。
「やるな雑種！ギントキだけが異常に強いと思っていたが、そうではないようだな！」
「そうやって余裕ぶってられるのも今の内でィ！」
二人とも全く隙を見せない。ここでギルガメッシュが動いた。
「では圧倒的な力の差を見せてやろう！王の財宝！！」
王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）を開いて宝具…ではなく大量のピコピコハンマーを背後に出す。
「何でだよ！！」
新八が突っ込む。
「宝具使っちゃダメですよ！ってか何でピコピコハンマーそんなに持ってんですか！？」
「我が王だからだ！」
笑ってギルガメッシュは新八に言った。
「答になってねーよ！！」
「上等でィ！！」
総悟もいつものバズーカを構える。

そして壮絶な撃ち合いが始まった。
「だからルール守れお前ら！！」
「これも収拾つかないな」
山崎があきらめた声で言った。
「たくっ。やっぱこうなるんじゃねーか。うっすら予想はしてたけどな」
そう言って銀時は土方と酒を飲んでる。
「アンタもまた前と同じで飲み比べ対決してんのかよ！？」
新八が銀時に怒鳴る。
「違ーよ。ただ飲んでるだけだ」
「え？」
新八の怒りが静まる。
「みんなやりたいようにやりゃいいのさ」
そう言ってまた酒を飲む。
「銀さん…」
「新八君」
山崎が新八の肩に手を置く。
「一緒に飲みましょーか」
山崎は笑ってそう言った。
「…そうですね」
新八も笑って返事をした。
みんなで酒を飲み、料理を食べながら騒いで楽しむ。
近藤は気絶したまま。
総悟とギルガメッシュはまだ撃ち合っている。
みんなで賑やかに騒いでる様子を見て銀時は微笑んだ。
「聖杯なんざ、やっぱ必要ねーな」
「え？」
凛が銀時を見る。
「俺の願いはもう叶ったからな」
そう言ってコップに酒を注ぐ。

「銀時の願いって何よ？」
凛が銀時に聞く。
「ん？俺の願いか？」
そう言って銀時は凛を抱き寄せる。
「ちょっ…！？銀時っ！！？」
いきなり抱かれて凛は顔を真っ赤にする。酔ってるせいか銀時の顔も少し赤い。
「俺の願いはな…」
銀時は微笑む。
「こうやって、みんなでバカ騒ぎすることさ」
そう言って一口酒を飲む。
春風で桜の花びらが綺麗に空を舞った。

第六十訓：最後はみんなで盛り上がっていこう（後書き）

終わった。ついに終わりました聖杯大争奪戦。　長かったです。最初は三十話くらいで終わるかな、と思ってたんですが実際はその倍まで続きました。まさかこんな長編になるとは…。　こんなグダグダな小説を読んでくれてありがとうございました！たくさんのコメント・感想ありがとうございます！実は、この作品の続編を書こうかと考えています。ちなみにどんな内容にするかはまだ考え中です（笑）もし続編が出たらまた温かい目で見守って読んでください。　今まで本当にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3449g/

銀魂 銀時VSサーヴァント！聖杯大争奪戦！！

2010年10月10日14時25分発行